
センター姫とスモール王子

yuzoku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

センター姫とスモール王子

【Nコード】

N7987U

【作者名】

yuzoku

【あらすじ】

デカいっただけで今年新設の女バスに入部させられたバスケット初心者の小泉ヒメ。でも意外とバスケットっておもしろいかも！？一方小学校のころからバスケット筋もといドリブル命の王地大河、通称オージ。二人はバスケットを通して絡んだり交わったりすることで、成長し合ったりしなかったり。。

さらわれ…ではなく勧誘される姫（前書き）

「はるか3ptシューター」のその後の翔泉高校を描いておりますので一部「はるか」の登場人物がでてきたりします。しかし主人公たちは入れ替わっていますのでどちらから読んでいただいても楽しめるようにはしています。

なお、この小説は男女2人の主人公が交互に「語り」になっていきます。

さらわれ…ではなく勧誘される姫

「あなた、バスケットに興味ない？」

入学式が終わって早々、同じクラスの人がいきなり声をかけてきた。

いきなり話したこともない人からこんなこと言われたから正直面喰ってしまったって、すぐには何の返事もできずにいた。

「その身長、バスケットはかなり武器になるんだよね！スツゴイうらやましいなあ。ねえねえいくつあるの？」

「身長は181センチだけど。」

正直身長は昔からネタにされてからかわれてきたので私にとってはトラウマでしかなかった。

「うわ、やっぱリスゴイ！なんか迫力あるなって思ってたんだあ。」

あっ、ごめん名前も言ってなかったね。アタシの名前は塩見怜しおみれい、気軽にレイって呼んで。よろしくね！あなた名前は？」

「小泉陽愛。」

そして、その身長に似つかわしくないこの名前も気に入っていない。

そんなことはおかまいなしにレイはしゃべり続ける。

「わたし去年のウチの高校の男子の試合みて感動したんだよね！それであたしもあんな風になりたいくてこの高校入って、それで女子でもバスケットを作ろうと思っっているの！あなた身長もあるみたいだしやってみない？」

「え、でもあたしバスケットなんてしたことないし…」

「その点なら任しいて！この、プレーヤーとしてもコーチとして

も超一流のあたしが、ビシバシ指導してあげるから！」

なんか厳しい練習になりそうで不安だったが、高校に入って何か打ち込めるものがほしいと思っていたのも事実だったので、なかば強引であるが彼女の要求をのむことにした。

「よかったあ。これで有望な新人第1号ゲットだわ。」

えっ、もしかしてあたしでようやく勧誘1人目だったの？なんだから不安が増してきた…

こうして、男子バスケット部の全国出場の陰に隠れて全然話題にならなかったけど、実は女子バスケットボール部も今年から新設されることになったのだ。

強気王子

オレの名前は王地大河。おうじタイガ翔泉高校のピカピカの1年生だ。

オレが入部している翔泉高校男子バスケット部の先輩たちは、今年見事全国出場を果たした。

そんな華々しい結果とは対照的に、しかも同じ一年であるリヨウスケがベンチ入りして試合でも活躍する中、おれ達は毎日のようにラニングや筋トレといった屋外練習ばかりが続いていた。

もちろん先輩たちの試合は全国大会に行っても一生懸命声を枯らして応援したし、負けてしまった時はやっぱり悔しくてしょうがなかった。

しかしこれでようやくオレにもチャンスが回ってくるかと思うとわくわくの方が大きかった。

話は4月の入部期間に戻る。

オレは他の一年が自己紹介する日、運悪くというか勘違いで一日遅れで入部した。ちなみにオレの身長は168センチ。それでポジションはSFスモールフォワード希望だと言ったら、当時のマネージャーのサヤ先輩に「その身長で男子の高校バスケットをやってくのはかなり厳しいと思うから、これから覚悟しときなさい。ま、前例がなくはないけど。でもガードじゃなくてフォワードで続けてくかどうかはよく考えときなさいよね。」と言われた。

でもオレはあきらめる気ななかつた。だってSFって言ったら

一番スコアラーとして活躍できる花形ポジションだし、それにドリブルには正直それなりの自信があった。

しかし元キャプテンであるシュースケ先輩のプレーを目の当たりにすると、自分の認識がいかに甘かったかを思い知らされることになる。

でもそれで燃えてくるのがオレなんだよね。さあ早くガンガンコートの中で練習してドリブル磨いて、どんな敵のディフェンスも、シュースケ先輩さえもさらっと抜かしてやるぜ！

さてと、今日も張り切って校庭の10km走行ってきますか！

今度は勧誘する側の姫

「バスケットに興味ありませんかー？」

「今なら即レギュラー決定ですよー！」

あたしは今校門前でレイと声を張ってせっせとチラシ配りをしていく。

そう、部活勧誘だった。

正直人前に出るのが苦手なあたしにとってはかなり恥ずかしい作業だった。

しかしバスケットに興味ある人なんてそうそうおらず、当然いろんな反応が返ってくる。

「すみません、私そんな大きい人と一緒にやっていける自信ないです。」

レイがボソツと言った。

「あちゃ〜ヒメを最初に引き入れたの失敗だったかな〜」

おいおい聞こえてますぞダンナ。いろんな意味であたしにダメージのある勧誘活動であった。

そんな中、一人の女の子がこちらを見つめている。レイが目ざとく見つけて駆け寄る。

「もしかしてあなたバスケット部入部希望？」

「はい。」

「経験者だったりする？」

「そうです。SGやってました。」

「おお〜！即戦力ゲットだぜ！」

レイのテンションはダダ上がりだ。

「ちなみに男バスとは交流とかあるんですか？」

「う〜んまだこれからだし分かんないけど、コートの関係で合同練習とかはやるんじゃないかな？」

そのとき、彼女がなぜか小さくガッツポーズをしているのが目に入った。

巻き込まれ王子

「オージ、オージ！」

「『オージ』って呼ぶなあ〜オレには『タイガ』っていうカツコイイ名前があるからそっちで呼べって言うてんだろが〜!!!」

「わかったよ、オージ」

全然わかってねえ。この天邪鬼ヤローは本木元氣もとぎげんき。なんか親の離婚やらで途中で苗字が変わったせいで、読み方によっちゃ『もときモトキ』とかなりオモシロい名前になってしまっ衰れなオレの友人A。その腹いせなのか知らないが、人を変なあだ名で呼ぶのが得意技なようだ。

「で、人の名前連呼しといてなんだよ？」

「ねえねえ、かわいい子見つかった？」

「はあ、なんだよそれ？オレは今バスケで忙しいの！」

「連れねえな〜。それにバスケ部だったってこの3日間走ってばっかなんだろ？」

「ばかつ、これからオレはコートで縦横無尽に活躍する日のためにだなあ。」

「はいはいはい、悪かったよ。それより聞いてよ、オレもう恋しちやった。」

「まじかよ。どんな奴だ？」

「7組の宇野紗彩ちゃんていうんだ。これがまたスタイルよくて、めっちゃかわいいんだ。」

「へえ〜。」

『かわいい』と言われるとちょっと気になってくるのは悲しき男の性だな。

「決めた、オレ告白してくる！」

そういうと全力ダッシュで教室を飛び出してきた。
まったく気の早いやつだ。

3分後帰ってきた。

「どうだった？」

「ふられた〜」

「だろうな」

いきなりだしフラれるのは当然だろう。残念なことに別にゲンキはイケメンでわけじゃないし。

それより気になるのは

「なんて言ってフラれたんだ？」

「『ごめんムリ。』の一言」

容赦ねえな。一度その言動とギャップのある顔だけは拝んでおこう。

「ああもうオレはダメだ〜」

「そんな落ち込むなよ。名前通り元気出せって。」

「そういうこと言われると余計テンション下がるぜ〜。あっ、そうだ！」

なんだ！？急に立ち上がった。

「オマエも誰かに告白して来いよ〜」

「はあ？」

「それでフラれて一緒の仲間になろうぜオイ！」
「イヤに決まってるんだろがー！！！！」

クラス中に声が響いてしまい、告白せずとも十分に恥ずかしい思いをすることとなった。

王子と出会い、怒れる森の姫

「それでは学級委員長を決めたいと思います。誰かなりたい人いませんか？」

クラス内は変に静まり返っている。新学期になるたびに小学校のころから経験していることだが、いまだにこの空気に慣れたと思えることはない。

「じゃあ推薦で誰かいないか？」

先生強引すぎるよ。まだみんな知り合って数日なのにそれはムチャなんじゃないかな。

ま、あたしは関係ないから早く決まってくれさえすれば何でもいいんだけど。

そのとき一人の女子が言った。

「ヒメがいいと思います。」

このクラスであたしのことを『ヒメ』と呼ぶのは一人しかいない。そう、犯人はレイだ。

「じゃあ小泉でいいか。」

センセイちよつと待てえ〜い！

と言いたるところだがこんな時発言する勇気がない。しかたないがこの流れだと決定みただった。

あたしが決意を固め始めかけたとき、今度は男子の声でした。

「男子はオージでいいと思いまゝす。」

「ちよつと待てえゝゝい！」

あたしが考えたのと同じツッコミやつとる！

「おれは断固そういうメンドクサ…責任の重い仕事はバスケット部が忙しいのでできないであります！」

そうそう、部活との両立は大変だもんね…ってそれはあたしも一緒ではないか！

そういえばコイツバスケット部なのに小さいな、たぶんだけど170センチもないな。

…あれっ、こんなのと組まれたらただでさえ大きいアタシの身長が余計に目立ってしまう！

「すみません、あたしもバスケット部で忙しいのでお断りさせていただきます。」

「なんだ二人ともバスケット部なのか、それならちよつどいい。協力してがんばってくれ。」

なにが「ちよつどいい」だ。ヤバイヤバイ、話しがどんどん悪い方向に流されていってる！

「プリンセス姫」と「プリンス王子」で『プリプリコンビ』だね」

さっきの『オージ』推しの男子が余計なこと言ってきた。

「てめえ余計なあだ名つけてんじゃねえよ！誰がこんなデカいだけでバスケットやるようなバカ女とガツキューイインチョーなんてやって

られるか！」

ここでついにあたしもキレた。

「誰がバカ女よ。自分こそ、その身長割にそのデカイ態度どうにかしなさいよ！」

「身長のこととは今関係ないじゃねえか！」

「なによ、先にケチつけてきたのそっちじゃない！」

「オージ、やったれやったれ！」「ヒメー負けんなー！」

そこ、外野うるさい！っていつかいつの間にか『オージ』相手に二人で口げんかになっていた。

「うん、息もぴったりみたいだな。それじゃよろしくな『プリプリコンビ』」

先生がそういった時にはもう決定的だった。

筋トレ王子

放課後、部活の練習前に同じ一年の久保田くぼたカズキ一輝に愚痴っていた。

「っていつわけで見事その女バスのデカ女と学級委員ヤル羽目になっちまったんだ。」

「えっ、でも女子のバスケ部なんてウチの高校にないだろ？」

「それが今年部員集めて作るんだってさ」

「へえ、ちよつと楽しみい。」

「どこがだよ？コート狭くなったりしたらどうするんだよ。」

「だってだって仲良くなつて付き合ったりとかできそうじゃん？」

「コイツもオレと同じSFスモールフォワード希望らしいけどぜってえ負けたくねえな。」

いつものように10km走と筋トレを終わらせたおれ達に、今日は女子マネのコハル先輩からいつもと違う指示があった。

「一年生のみんなあ、ボール持って外に出てきてください。」

よっしゃー、ようやくバスケ部らしい練習できる！なにせ今までずっとボールすら触らせてもらえなかったからな。しかもオレが一日遅れて行ってなかった日には、一年の実力を見るためということで紅白戦があったというのだから余計にフラストレーションがたまっていた。

「これからあなた達にはドリブルで1on1で抜いてもらう練習をしてもらいます。ディフェンスになった人はそれを止める役目ね。」

「はい！」

「なお、待機中はずっとダムダムしてること！」

「はい！」

最初オレはオフエンスからだった。
待ってましたー！とばかりに思いつきりつつこんでいった。そして
ディフェンスを華麗に抜き去った。

「うん、なかなかよろしい。」
コハル先輩からお褒めの言葉をいただけただぜ！

続いてディフェンスだ。相手はカズキ。絶対止めてやる。
最初カズキはその場でゆっくりドリブルをしていた。

そこから一気にスピードを上げてオレの左を抜けて行った。

やられた。

見事なチェンジオブペースだった。

「はい、抜かれちゃったタイガくんは腕立て伏せ30回ね。」
まじかよ、さつき筋トレで100回こなしただけだったっていうのに。

その後も何度かトライしたがオフエンスはともかくディフェンスは
ずたぼろだった。

けっきょく今日腕立てを合計250回やるハメになる。

ようやくバスケット部ができた姫

一週間の地道な勧誘活動の甲斐もあってか、ようやく5人の部員がそろった。5人というのはバスケットをするのに必要な人数というだけでなく、新しく部として申請するための最低限の人数でもある。ともかくこれで部員の問題はオツケー。次は顧問だ。

「失礼しまゝす！」

レイが迷いなく職員室に入っていく、あたしはその後ろについていく。

「誰か女子バスケット部の顧問になってほしいんですけどお。平塚先生どうにかありません？」

まずは担任の平塚先生からだ。

「すまん、おれは今剣道部やってるんだ。」
あっさり断られた。

「そうですかあ。じゃあ誰かやってくれる先生いませんか？」
職員室中に聞こえるように言った。いや、その声の大きさは迷惑だろ。

「オレがやろう！」

一人の男性教師が名乗りを上げた。

「やったー！よろしくお願いします！」

展開速いな、おい。

「3年8組担任の佐々木勝だ、よろしくな。バスケットのことはよくわからんがその熱意に心えようと思ったままだ。」

なんだかちよつとカツコイイこと言ってる。

ここで確認のためいちおう聞いてみる。

「でもそんな急なお願いなのに受けてもらっても大丈夫なんですか

「？」

「問題ない！なんたってオレは女子が大好きだからな。」

前言撤回。こいつはくそやローだ。

でも顧問をやってくれるとこのだから文句も言ってもらえない。実際レイはノリノリで手続きを進めている。

「というわけで今日からワタシ達5人で女子バスケット部をやっていくことになりました！まずは自己紹介だね。ワタシは塩見怜^{しおみレイ}147センチ。ちっちゃくてもバスケットへの愛は誰にも負けません！ポジションはPGです。はい、じゃ次ヒメから」

「小泉陽愛^{こいずみヒメ}です。身長は181センチです。初心者ですがよろしくお願いします。」

「須藤朱音^{すどうアカネ}です。身長161センチでSG^{シューティングガード}やりたいと思ってます。勧誘の時に唯一話しができた子だ。アッシュの入ったオシャレなアシメトリーの髪型が印象的だった。」

「宇野紗彩^{うのサヤマ}です。身長170センチ。中学の時のポジションはフォワードでした。」
さらりと伸びた黒髪がきれいだな。というかそれに負けないくらいキレイな顔をしている子だ。

「城ヶ崎美鈴^{じよがさきみすず}と申します。身長は172センチでございます。ポジションはPF^{パワーフォワード}を希望しております。」
なんだか丁寧な話し方する子だな。お上品そう。

「はい、全員終わったね。じゃあまずははりきってランニング行ってみよう」

ランニングはあたしだけがダントツで遅かった。そしてその後のメニユーでも一人バテバテでこなしていくことになる。

計画王子

「あ〜だりい〜」

「だるいとか言わないの、それはこつちだつて同じなんだからね。」

今は放課後。でもいるのは体育館でも屋外でもなく教室。

そしてここにいるのはオレとこのデカ女の二人だけ。残念ながら別に色気もなんにもないシチュエーション。

「小泉じゃぜんぜん燃えも萌えもしねえ〜」

「はあ？なんか言つた？」

「別にい。」

「なに。その感じ悪い態度！王地つて日頃からいつつもそうよね」

「『オウジ』つて呼ばれるのクライなんだよ！下の名前で『タイガ』つて呼べよな。」

「じゃ、じゃあ平等にあたしのことも『ヒメ』つて呼びなさいよね
！」

なんだこれツンデレか？まあいいや、『オウジ』つて呼ばれなきゃなんでも。

「だいたいなんで遠足行くのに学級委員がイベント考えなきゃいけねえんだよ。」

「ほんとよね〜、そこだけは同意するわ。」

「ぐだぐだ言つててもしょうがないか。早く練習にも行きたいし、ちやつちやと考えて終わらそうぜ。」

「そうね。で、なんかない？」

「はあ？考えるのオレかよ！？ そうだなあ、バスケットボール2

個持つって2組に分かれてドリブルリレーとかどうだ？」

「どんだけあんたバスケばかなのよ！！もうちよつとみんなが楽しめそうなこと考えなさいよね。」

「じゃあお前なんかいい案あるのかよ？」

「そうねえ……」

といったまま10分間ずっと黙り続けていた。

「おいまだかよ。てかなんか言えよ。」

「一生懸命考えてたの！こんなのどうかしら、2組に分かれてバスケットボールのパス回し。最後はフラフープかなんかのリングにゴール。」

「けつきよくお前もバスケじゃねえか。しかもパス回しって単純だな。これだから素人は！」

「うるさいわね！ドリブルだったら足場が悪いとうまくできない子もいるでしょ。その点、パスなら誰でも気軽にできるから楽しめそうじゃない？」

「そう言われればたしかに。」

「じゃあそれに決定でいいよね。」

「おう！」

「じゃあ先生への報告は任せたから。」

「なんでオレなんだよ？」

「最終的な案を出したのはあたしなんだから肉体労働くらいやりなさいよね。」

なんか理不尽さを感じないでもなかったが「パス回し」の案に賛成してしまつた以上、あまり強くは言えなかった。

あとで先生のところに行くと、「さすがバスケット部同士の『プリプリ

「コンペらしい発想だな。」と言われてしまった。

計画王子（後書き）

学級委員の2人はこんなふうには、ことあるたびに「活躍」させられるかもです。

汗水流してダムダムする姫

毎年部活ごとに体育館の使用割が決まっているため、新設である女バスは夏予選が明けるまでは当分体育館内での練習はなかった。そのためあたしらはコートは与えられず、古いボールを持ってもっぱら外で練習することになる。

「よし、ランニング終わり！」

「やっと終わったあ。」

「ヒメ、そんなだらしない恰好しない！次の練習行くよ！」

監督もマネージャーもいないあたし達の練習はレイが全部考え、指示を出していた。

「じゃあ今から2対2でパス回しの練習始めるわね。ヒメはそこでドリブルの練習よ。」

ボールを使った練習の時は、初心者あたしだけは別メニューで行われていた。

今日のあたしの個人メニューは「ダムダム500回（左右で1000回）」だ。

ダムダムダムダム。

ポロッ

あっ

「ヒメ、なにやってんの！プラス100回だかね！」

「はい！」

自分の練習をこなしつつ、あたしの方にも目を光らせるなんてなんて視野が広いんだろう。

PGってというのはそういう能力が長けているのが重要らしいが、それだけでレイの選手としてのレベルの高さがわかる。

他のみんなにしてもパス一つとってもあたしがやるのと違ってなめらかだ。やっぱり経験者かどうかってデカいよなあ、特にサアヤの手さばきがハンパなく速い。

それにしてもあたしの練習は単調だな。

ポロツ

「ヒメー！！」

負け犬王子

今日はとっても嬉しいことがある。

いつもは屋外がほとんどの練習であるが、今日はなんと、コートが使い放題なのだ！

その訳はセンパイ達が練習試合で他校に行っているからだった。

休日の朝ということもあって一番乗りしてきたオレは、一人で何度もドリブルしてレイアップシュートを決めまくっていた。

そのとき外で女子の声が出た。うん？女子バレー部も今日練習なのか？

「やっぱり体育館の中はいいよね。」

「久しぶりのリングだあ〜」

5人いるうち知ってる顔が約2名。一人はチビで明るくてクラスでも目立ってる塩見怜。

そしてもう一人は、そう、デカ女こと小泉陽愛である。

とういことはこの集団はウワサの女バスか。まあ今日は空いてるしあっち側のコートで練習するんだろ。

かまわず一人練習を続けていると徐々に他のやつらもやって来た。

「はい、みんな集合してください。」

コハル先輩が声をかけると男バスのみんなが集まる。

あれ、女バスの子たちも来るぞ？

「今日は男子も1年生しかいなくて人数も少ないので合同で練習を行いたいと思います！」

聞いてねえ〜

男バスの面々はみんな驚いているがその後の反応はまちまちだった。特にカズキなんかは声に出して

「やったー！！」なんて言うから若干ひかれていたが。

キソ練が終わった後、練習試合が組まれることになった。

へ、ちよろいぜ。なんたって相手は女子だ。しかも一人はトーシロのデカブツだし軽くヒネリつぶしてやるぜ！

「ディーフェンス！ディーフェンス！」
ベンチスタートだった。

試合は意外と拮抗していた。レイがいいパスを出すので他の3人（もちろんヒメ以外）でうまく点をとれている。そのヒメにしたって初心者の割にしっかり足は動いている。少なくともキソ練はがんばっているようだった。

「へえ、やるじゃん。」

ちよつと見直した。

途中コハル先輩から声をかけられた。

「タイガくん、出番だから準備して！」

「はい！」

ようやく来ましたよ、本打ちが！

「タイガ、油断するなよ」

そう言ったカズキと交代した。

ん
オレはお前と違ってフェミニストじゃないから遠慮なんかしないよ

お、オレのマッチアップ相手は黒髪の似合っこの子か。かわいいと
いうよりキレイ系だな。

「サアヤっ」

レイからサアヤチャンにボールが渡る。

行かせねえよ！

クルッ

スピムーブか！体をキレイに回転すると簡単に抜かれてしまった。

今度はこちらのオフェンスだ。ボールが回ってきた。

さっきのお返ししてやんよ。

クルッ

スッ

ステイールされた？

その後もサアヤチャンを一回も抜くことはできなかった。

ホメられて伸びる姫

練習試合を終えたあたし達は男子より一足お先にあがりにした。なにせこっちは5人ぎりぎりで行っていたのだから当然である。

「よおし、これからミストで反省会をやりまーす！」

一人だけスタミナありあまつてる輩がいた。

レイだ。いったいあの小さい体のどこにそんな力があるっていうのか。

「まず今日の得点クイーン、サアヤさん心境はいかがですか？」

「相手がしょぼすぎ。」

「うわあ〜きつついねえ。でもSFはそれくらいだと頼もしいよ。」

「お次はアカネ。ほとんどコートで練習してなかったのによくあれだけ3ptシュート決めてくれたね。」

「家の近くにゴールネットがあつてリングコートで毎日シュート練習は欠かさずやってきたからね。」

「さすがあ。澄ました顔して生粋のバスケットプレイヤーだね。」

「そしてミスズ。よくヒメのヘルプもこなしつつ相手のフォワード陣に負けなかつたね。」

「いえ、私の家には専門のコーチがいていつも厳しく指導してくれていますからあれくらいなんともないですよ。」

そこで他のメンバーはあ然とした。「専門のコーチ」だと？

「前から思ってたけど、あんたの家って結構お金持ちでしょ？」

「いえ、そんなことないです。家にもバスケットコートは一面しかないし……」

いや、十分すぎるだろ。

「さて最後は」

最後に発表されるっていうだけで妙に緊張する。

それでなくたって、たくさん上からシュートを決められたし、攻撃なんて参加すらできていない。

内心何を言われるかドキドキである。

「ヒメ、よくやったよ。」

「レイほんとにそう思ってる？」

「そうですね、ヒメさんのがんばりにはビックリしました。ミスズ優しいなあ。」

「やっぱり180越えがいると頼もしいよ。」

これはアカネ。嬉しいけどいちいち身長を強調するんじゃない！

「やっぱりスポーツはホメて伸ばすのが一番だからね。でもさっき言ったことは決してお世辞じゃないよ。初心者なのによくがんばってくれたよ、ありがとう。」

涙腺がやばいかも。

「よし、これで身長も190センチには伸びたんじゃないか？」

「なつてたまるかぁー!!」

常識的でないだろっていうツッコミと、オトメとしてはこれ以上身長が伸びてほしくないという願望からくる叫びだった。

弱音王子

昨日の合同練習はいつになく疲れたぜ。

そんなオレを休まず気遣いもなく、ゲンキが揚々とやってきた。

「なあなあオージ聞いてくれよ！さっき廊下で宇野紗彩ちゃん見たんだけどやっぱりかわいかったあ。」

「ふられたのにまだそんな呑気なこと言ってるのかよ。」

今まで頭がボーっとしていたが、ここでオレは気づいた。

「うえっ、もしかしてお前が言ってた『宇野紗彩』って女バスの『サアヤ』のことか？」

「たぶんそんなにない名前だから同じ子だろうな。」

「見た目どんな子だ？」

「黒髪のロングで前髪はセンター分けでえ、目はパツチリしてて鼻筋は通ってて唇は薄いんだよね。そんでもって手足がスラリとながいんだよなあ。」

「やっぱしそつだ。」

「でも女バスなのかあ。いつペンプレーしてるとこも見てみたいな」「やめる〜〜思い出させるなあ〜〜！」

「どうしたんだよまたそんな騒いで」

先日こっぴどくやられたことを説明した。

「まじかあ〜ますます魅力的に思えてきたぜ、サアヤちゃん。それにしても女子に負けるってお前やばくないか？」

オウジタイガに痛恨の一撃。

「うるせえ、ほっとけ！」

この言葉をしぼり出すのに10秒かった。

追い打ちをかけるかのごとく、昼休みにコハル先輩に呼び出された。

「昨日の試合はボロボロでしたね。」

「はい。」

心がズキズキする。

さらに何を言われるのだろうとヒヤヒヤしていると、ボストンバツクを渡された。

「なんですかこれ？」

「強豪校やプロの試合を集めたDVDです。昨日の試合を見て確信しました。タイガくんはドリブルのスピードはかなりいいですが、フェイクなんかの小技がなさすぎです。要するに動きが単純すぎます。」

「はい。」

これ以外なんもいえねえ

「これを見てディフェンスの動きを見て予測できるようになってください。それと同時にドリブラーの体の使い方勉強してください。両方ができればドリブルだけでなく、ディフェンスの方の強化にもつながるハズです。」

「わかりました」

「それではごきげんよう」

この大量のDVDは見るだけでも骨が折れそつだ。

初めて人前でプレーする姫

いよいよ地区予選の一回戦が始まるうとしていた。あたしにとっては初の試合である。

「ヒメ大丈夫？」

レイが声をかけてくれる。

「おおお落ち着いてるわよ、なに言ってるの。」

「フフツ。ほんとヒメ見ると飽きないわあ〜」

「ちよつとアカネ、それどういう意味〜？」

「どうもこうもそのままの意味よ？ビビりまくってるのが顔に出まくり。」

「バカにすんなあ〜」

「あらヒメさん緊張がほぐれてきたみたいで良かったですね。」

「え？」

気づくと妙なドキドキ感は収まっていた。もしかしてアカネそのためにわざと…

「あ〜おもしろかった。」

チガウ、やっぱりコイツはあたしで楽しんでるだけだった。

いよいよ試合が始まった。

ジャンプボールが一番身長の高いこのあたし。

幸い相手は170そこそこだったので競り勝つことはできた。

ただボールを送る先を間違えていきなり相手ボールにさせてしまった、

「どんまい、しっかりディフェンスよ。」

負けた。完敗だった。あたし以外は実力のある子たちがそろっているチームだったのに。あたしのところから点を取られまくったのだから、完全にあたし一人足を引つ張っていた。

5人ぴったりしかいなかったため交代もできず、あたしは後半足を動かすことすらできなかった。

とにかく何もできなかったという思いが強く残った。

試合が終わった後、みんなが落ち込んでいるあたしに向かって「ヒメがんばってたよ」とか、「これからまだまだあるじゃない」とか言われたのが余計に心苦しかった。

慰め王子

「あ〜ねみい〜」

「オージ、どうしたん？昨日遅くまでゲームにでもはまってたん？」

「ちげえよDVD見まくってたら気づいたら朝になってなただよ。」

「DVDって。オージ朝からいやらしい〜」

「ばかつ！オレが見てたのはバスケのDVD。コハル先輩に指示されてずっとドリブラーの動きとか研究してたの！」

「ふ〜ん、なるほどねえ。で、成果はあった？」

「まだ見始めて数日だよ、そんなすぐに結果が出りや苦労しねえよ。」

「そりゃそうか、じゃあ引き続きがんばってくれたまえ。」

「はい閣下。ってなんでお前上から目線で行ってくれてんだよ〜」

こんな感じで今日も平和に学校生活を送っていた。

そして放課後。授業中たつぷり睡眠はとったので元気満タンだ！

これで今日も部活にガンガン打ち込めるぞ！

と言いたいところだが、またしても「学級委員のお仕事」でヒメと居残ることになった。

「だからここはこうした方がいいよな。」

「うん、そうだね。」

「で次はここはこうしよう。」

「うん、そうだね。」

「おいヒメ、さっきからお前」「うん、そうだね。」「しか言っていないぞ！こっちは早く部活したいのにちゃんと仕事しろよな。」「

「うん、そうだね。」「

「だあゝもうなんだってんだよ。」「

オレはいらいらして思いっきりデコピンをかましてやった。

「痛っ！なにすんのよ！」「

「そりゃこっちのセリフだよ！さっきからボーっとしたまんまで使物になりやしねえ。」「

「なによ、女子に向かってそのセリフ失礼じゃないの？」「

「こんなときに男子も女子もあるか！いったいどうしたってんだよ。なんか悩み事でもあったのか？」「

「べ、別になんにもないわよ！あんたにそんなこと聞かれる筋合いはないわ！」「

「じゃあ、もつとシャキツとしろよな！じゃないと学級委員の仕事終わらないだろ！」「

「ごめん。」「

あれ、いつもと反応が違う？いつもだったらもうちょっと言い返してくるはずなのに。ほんとになにかあったのか？

とりあえず話題を変えようと思って聞いてみた。

「そついえばこの前の地区予選の試合どうだったんだよ？」「

「うるさい！アンタに関係ないでしょ！！」「

今度はキレてきた。ほんとなんなんだよ。

「もしかして派手に負けちゃったとか？」

「…ひょ。」

「え？」

「そうだって言ってるのよ！あたしのせいでボロ負けだったのよ！」
やばい涙目になってる。

「い、ごめん悪かったよ。」

「あたしもうバスケやってく自信ない。」

「そりゃ初心者で初めての試合だったんだもん、できなくて当然だ。」

「でもあたし、レイに身長高いからって期待されて入ったのに、試合でなんにもできなかった。」

「バスケは経験積んでナンボだぜ？いくらお前が身長高くて有利って言ったってそんな簡単には活躍できねえよ。実際チームメイトも誰もお前を責めたりしてないだろ？」

「たしかに、それはそうだけど…」

「じゃあこれからがんばりやいいじゃないか、お前もみんなもまだ一年なんだし一緒に成長していけば。」

「そうね。」

この日初めて笑顔を見せた。

「じゃ、すつきりしたところで練習励むためにちゃっっちゃっと仕事終わらせますか！」

再びきらきら煌めく姫

学級委員の仕事を終えた後、急いで部活に向かった。

さっきまでの沈んだ気持ちから解放された反動か、なんだか心も体も軽くなった気分で今日は久しぶりに気持ちよく汗を流した気がする。

練習後、アカネに聞かれた。

「ヒメ、今日なにかいいことあった？」

「え？なによ急に。別に何も無いわよ。」

「今日の練習はなんか動きよかったわよ。」

「べ、別にいつも通りだし。」

「いやアンタこの前の試合負けてからずっと落ち込んだままで、練習も気持ちが入ってなかったよ？」

「そうなのよ、クラスでもずっとふさぎこんじゃってさ。バスケット誘ったあたしとしてはちよっと責任感じてたんだからね。でも放課後まで元気なかったし、もしかして変わったのはタイガくと二人で居残ってたときい？」

レイがにやにやしながらこっちを見てくる。

「ち、違いわよ！自分でさっき気持ちを切り替えたの！」

「あらあらその反応はますます怪しいですな。」

「なんのこと言ってるっていつのよ！」

ここでミスズがにつこりして言った。

「それはずばり恋ですね。」

「ちっが〜う、誰があんな生意気くそチビ男なんかを！」

「あ、もしかしてウワサの『プリプリコンビ』?」

「アカネ、その名前でもう一度呼んだら本気でキレルから。」

「お〜コワイコワイ。」

「あたしはバスケマジメにやってくればなんでもいいんだけど。」

「サアヤ〜、あなたのそのクールなとこ大好きよ!」

「ただ自分より身長の高い男ってのは物好きよね、アンタも。」

くそっひとこと多いぞ、冷血女め。

「よ〜しヒメも元気になったところで明日からメニュー増やすからね〜。」

部長の鬼発言に、あたしは元気にならなきゃよかったと少し後悔した。

憧れ王子

優勝した。

我が翔泉高校は県予選を勝ち抜き、県内ナンバーワンになったのであった！

それを応援席から眺めていたオレも少なからず興奮を覚えた。

早くオレもコートの中でアレを味わいてえ。

3年生が引退した後、キャプテンを任されたのはソーマ先輩だった。元キャプテンであり、オレの一番の憧れであるシュースケ先輩曰く、「高校からバスケットを始めたお前だが、一番チームのことを見られている。」らしい。

やっぱりシュースケ先輩言うこともかつけえー！！

こうして新チームとしてスタートしたオレ達だったが、週末にはさつそく練習試合が組まれた。

「とにかく試合をこなす」というのが我がバスケット部の伝統らしい。と言っても2年前からの『伝統』らしいが。

「きよ、今日のスタメンを発表します。」
3年生のマネージャーが抜けて、この練習試合が初めてまとも指揮をとるといふコハル先輩も緊張気味だ。

「PGソーマくん、SGリョウスケくん、SFカズキくん、PFジヨークン、Cイシちゃん」

カズキがスタメンかあ、ちくしょー！

ちなみに2年生はソーマ先輩、ジヨークン先輩、イシちゃん先輩の3人だけだった。一年は全部で8人いる。

ここでスタメンの簡単な見た目を説明しておく。

ソーマさんはPGの割に高い身長181センチだ。長めの襟足がちょっとかっこいい。

ジヨークンは髭の生えている割に優しい顔立ちで身長は187センチ。

イシちゃん（この人だけはコーハイでも「ちゃん」づけオツケになってる）は190センチだが、特筆すべきはなんといても90キロある超重量級の体格だ。

あと一年二人は、リョウスケは170センチでロン毛、カズキは185センチで髪が左寄り（アシンメトリーとかいうらしい）な変な髪形をしてる。

「新チームだからってびびってんじゃないぜ、それは相手も一緒なんだかな。いくぜっ！」

「うつす！」

新キャプテンの一声とともにコートへ入っていった。

ジャンプボールはジョーさんだ。

あっ取られた。

しかも速攻で得点を決められてしまった。

「なにとられてやがんだよ、××ついてんのかオラア」
この声の主はコハル先輩だ。

説明しよう。コハル先輩は試合中はその長い髪をポニーテールにすることで鬼のような性格と口調に変貌するのであった。

「よし、一本行ってみようか。」
そういうのん気な発言とは裏腹に、ソーマさんから素早いパスが出される。

リョウスケが受け取ると、迷うことなくシュートを打った。

いきなり3ptシュートだった。

リョウスケの一発で勢いづいたウチは、そのまま一気に流れをつかんで新チーム初勝利をおさめた。

ていつか早く試合してほしい。

初心者の中で光る初心者姫

「それでは球技大会のメンバーを決めたいと思います。」

そう、来週は球技大会だ。何が嬉しいって今回は学級委員の仕事が
司会だけで済むってことなんだよね！

部活の人は1チームに一人だけというルールがあるので、バスケットは
レイに任せるとして。

さあてあたしは何にしようかなあ…

「小泉さんバスケットやってよお〜」

「え、でもうちにはレイがいるし…」

「いやいややっぱバスケットは身長でしょ」

みんな口をそろえてそう言う。

こいつらアホだな、人を見た目で判断するなんて。

レイもなんか言えばいいのに、澄ました顔で卓球の欄に自分の名前
を書いている。

そして試合当日。

あれ、できる、できるぞ？

相手は初心者ばかりだったから、身長の方と2か月分の練習で他
の人より動いていた。

今までチームメイトや対戦相手が経験者ばかりだったしあんま分かんなかったけど、ちゃんと上手くなってるみたい。

ただしその自信は次の試合で無残にも打ち砕かれることになる。

次は7組、そうサアヤのいるクラスだ。

容赦なくドリブルで攻め込んでくる。っていうか他の子にもパス回してあげなよ、ホントとことんバスケには貪欲なんだから。

ということでボコボコにされましたとさ。

いちおう男子の方も応援に行くことになった。

さてウチのクラスのチビツ子バスケット部は健闘しているのか？

「おいそこ走れ！」

「違う、今のは逆だ。」

ダメだ、全然チームメイトを使いこなせてない。少なくともこいつにはPGの才能はないようだ。

ただ、ドリブルのキレは（ほぼ初心者の）あたしから見てもスゴイと思わせるほどのスピードだった。不覚にも一瞬かっこいいと思っってしまったことは誰にも言わないでおこう、またネタにされちゃかなわん。

コーンr王子

この前の決勝リーグの先輩の刺激を受けて、思い切ってコーンロウにしてみた。

よく黒人のNBAプレイヤーとかがやってる、頭全体をブロックごと何本かずつ三つ編みにしたものだ。

ただこれが大変なのなんなのって。

まずは手入れが大変だわ（頭がかゆくてしょうがない）、家族に猛反対されるわ（時すでに遅し）、街でヤンキーにからまれるわ（ホント怖かったあゝ）、とイイことなしである。

さらにコーンロウにした翌日学校に行くと、驚愕のあまりみんなが声を失っている中、一人だけ違う反応をしてきたやつがいた。

「アハハハハッ！なにそれ、ウケ狙い？」

「バカ、ちげえよ、これはバスケットプレイヤーとして生きていく証あかしだよ！」

「ほんと意味わかんない！それで急に強くなったとでも思ってるの？」

「ばか、これからの練習でより気合い入れてやってくためだよ！」

「なにそれアッハハハ、それにしても何回見ても笑えるわよ。」

「うるせえ！」

くっそお、人の本気をバカにしゃがって！くそっまたしてもこのデカ女、腹立つわー！！

しかしこれで完全にあとには引けなくなった。これから何が何でもレギュラーとって活躍してやるっ！

意外な人にモテてしまった姫

タイガにコーンなんちゃらでおもいきり笑わせてもらった日の放課後、あたしは違うクラスの女子に呼び出されていた。

さて、なにかしたかなと振り返ってみるものの、平凡極まりない生活を送るあたしとしてはなんの心あたりもない。

どきどきしながら指定された空き教室に向かった。

そこには一人の小さくてかわいらしい女の子がいた。身長はレイと同じくらいか？

「あの、あたしを呼んだのってあなた？」

「…はいそうです。」

顔をよく見るがやっぱり知らない子だ。

「…で、ご用件はなんでしょうか？」

「あの、好きです！」

一瞬固まってしまった。それから頭の中はこの「好き」に対するイロイロな意味を考えていた。

「あのどういう意味で…？」

「すみません！小泉さんはそんな気ないのはわかりきってるんですけど、どうしても伝えたくて。あの、球技大会の時の小泉さんすごくかっこよかったです。」

「あ、ありがとう。」

「ほ、ほんとにそれを伝えたかっただけで、別にそれからはなににも期待してないのでキニシナイでください。あゝもう自分でも変なこと言ってるなって分かってるんですけど。」

「はあ。」

「とにかくわたしはバスケットをしている小泉さんが好きです。陰ながらですけど応援してます。これからもがんばってください！」

そう言い残して去って行った。

なんか複雑な気持ちだった。たぶん彼女の方がもっと複雑な心境だったのだろうが。

とりあえずあの子も言ってくれたようにバスケットがんばろう。そう心の中で改めて思った。

インテリ？王子

おれがせっかくはりきってコーンロウにしたのに、先週からテスト期間で練習は休みだった。

ちなみにオレは抜群に成績がいい。

数学Aは87点、数学？にいたっては91点だ。どうだ驚いただらう！

他の教科？ナンデスカソレハ？

「あゝオージ英語赤点じゃんよ〜！」

「ば、ばつか勝手に人の点数見んな〜！しかもそれをデカイ声で言うんじゃない〜！」

「そこ、うるさい！しかも赤点を自慢するんじゃない！」
「いやいやいやいや、自慢なんかいつさいしてませんけど！英語担当の鬼瓦先生は成績悪いヤツにはとことん厳しいことで有名だ。それにしても赤っ恥かくわ、怒鳴られるわでいい迷惑だぜ。仕返しにゲンキの点数ものぞいてみた。」

98点だと!？

「ゲンキ、お前そんな頭よかったのか？」

「ふっふーん、どうだい見直したかい赤点オージくん。」
「くっ。悔しくてなんにも言い返せない。」

「あゝでも100点とれたのになあ。まさか「basketball

「1」の「b」を「d」と間違えるなんて凡ミスもいいとこだぜ。」
うざい。なにを言われても自慢にしか聞こえない。しかもなんだそのオレへの当てつけのような間違え方は。オレだけじゃなくバスケットをバカにされてる気分だ。

ゴツン

急に頭を殴られた。いつてえな誰だよと振り返ってみると、そこには鬼瓦先生が立っていた。

「まったく赤点のくせにテスト直しもせんとくっちゃべるとはいい度胸だな。お前は今回の範囲のテキスト丸写し3回分を提出するのと。わかったな？」

「…はい」

世の中って理不尽だと思わない？

英語の時間に叫ぶ姫

今日の英語の授業はテスト返しということ、テスト直しが終わったら各自で自習ということになった。

なんか赤点がどうとかで騒いでいる、文字通りバカがいるが気にすまい。

割と点数の良かったあたしはすぐにヒマになり、レイとおしゃべりしていた。

「この前の球技大会なんであたしに譲ったの？レイが出た方が絶対強かったのに。」

「そりやあたしも出てみたかったけどさ。初心者ばかりを指揮するつてのも楽しそうだったし。でもそれ以上にヒメに経験つんでほしかったから。」

「え、どういこうこと？」

「初心者ばかりとはいえ試合は試合でしょ。それに自分が一番バスケを知ってるという状況で、どういうふうに動けばいいかも体験してほしかったし。それと少しは自信もついたでしょ？」

「なるほどね、レイもいろいろ考えてくれてるんだ。」

「そうよー」自分に自信がないとなにをやってもうまくならん」がうちの中学の先生の口癖だったから実践させてもらったわ ヒメの場合、自信モテただけじゃなくて他にも『モテた』ことがあったみたいだけども。」

にやにや顔でこっちを見てくる。ホントこの子にはかなわんよ。

話題を変えようと思っていると、新学期のことを思い出した。

「…もしかして学級委員に推薦したのもそういうこと!？」

「あつたりい、アンタ見るからに自信なさげだったし、人前にでも立ってもらって度胸付けてもらおうと思って。でもまさか『プリプリコンビ』なんて名物コンビが生まれるとは思ってなかったけど。ププッ」

「その名前で呼ぶなあー!！」

「そこ、うるさいぞ!」

「すいません。」

鬼瓦先生の檄は女子相手でも容赦なしだ。

それにしてもなんであたしの方が怒られなきゃならんのだ。…たしかにうるさかったけれども。

補習王子

赤点だった人は補習を受けるとというのがウチの高校のルールだった。御多分に漏れず、オレもこうして英語の補習にやって来たわけである。

補習を受けるのはごく一部の生徒なので授業は他のクラスの人と合同になる。なんか転校生になったみたいで心細い。

そんな中、知っている顔を見つけた。

「よおミノル。」

「お、タイガじゃねえか、補習受けるなんてオマエバツカだな。」

「それはお前も一緒だろ！」

「そうだった。ハツハツハツ」

どんだけのん気なんだよコイツ。同じバスケ部として恥ずかしいぜ。まあこの状況だけでいえばオレも同類なんだけど。

バスケ部2人が集まれば当然のごとく(?)バスケの話題になっていた。

「しっかしこの前の練習試合でのリョウスケはすごかったよな。」

「ああ、点が欲しいとこでいつもきっちり決めてくるんだもん。」

「さすが1年で唯一最初からベンチメンバー入りしただけあるよな。」

「たしかに、前の大会でもあのレベルの中でも全然気後れしてなかったし。」

「はあ、オレも早く試合でてえなあ。」

「タイガはせっかくドリブルでいいもん持ってんだからもつとフェイクとか勉強しろよ。」

「それコハル先輩にも言われた。だから今DVDで学習中だよ。そ

れよりお前のポジションは大変だよな。」

そうミノルはPF、レギュラー確定のジョー先輩と同じだ。

「そうなんだよねえ、この前なんか鬼バージョンのコハル先輩に「ジャンプバカ」って言われた。」

「ハハッ、当たってる当たってる。」

「言っとくけどお前にはぜってえ負けないかな!」

「こっちこそ!」

「いつまでしゃべっとるんだ!」

「すみません!」

補習もまた鬼瓦先生だった。

それにしてもミノルはいいやつだ。オレの身長が低いのをバカにしている部員も多い中、こっちやって対等に接してくれる。いつか一緒に試合でプレーしてえな。

「王地、ポーっとしとるんじゃない!」

「すみません!」

掟に縛られる姫

「今から重大発表をします！」

突然レイから部員に向かって言い放った。

「これより部外恋愛禁止！」

一瞬みんなの思考が止まる。

「ごめんレイなにそれ？」

「恋愛」という言葉に真っ先に反応したのはアカネだった。

「文字通りよ。これから恋愛はしてもいいけど相手はバスケットに限るってこと。これは男バスのマネージャーのコハルさんも了承済みだからね。」

やっぱり意味わかんねえ。ふつう「部活『内』恋愛禁止」ならたまに聞くけど。

「その『部活外恋愛禁止令』になんの意味があるのよ？」

「よくぞ聞いてくれました！これはバスケットをしている者同士が互いに刺激し合い、高め合うことを目的とするすんばらしい掟であるのです！えっへん。」

そうやって手を腰にあてているレイはどう見ても「前へならえ」の先頭の人にしか見えない。

「バスケットをやっている人間としか恋愛をしない。他校相手でも認めるけどバスケットの応援は禁物よ。ちなみにあたしはバスケット

筋ですから。だからこれはみんなのための掟よ。」

「ちょ、ちょっと待ってよ、そんな急に言われても困るし。」
あたしだって女子高生だ。自由に恋愛くらいしてみたい。

「え〜なになに、もしかして他の部活にもう好きな人いるの〜?」

「別にそういうわけじゃないけど…」
あたしがなにか言いあぐねていると、

「へえ〜、おもしろそうな考えですことね。」

早くもミスズはノリノリだ。もう少し疑問とか持とうよ。

「まあ男子部員はそこそこ目ぼしいのもいるし、アタシはかまわな
いけど。」

これはアカネだ。狙う気マンマンだな。

「こんなのサアヤは反対よね?」
最後の頼みの綱として聞いてみる。あつ、でも考えてみたらこの子
恋愛とか興味なさそうだった。

「べ、別にアタシはそれならぜ、ぜんぜんかまわないけどっ」

あれっ?なんかいつもと違って乙女チックな反応!

「もしかしてすでにバスケット部に好きな人いるとかあ?」

あのクールなサアヤがなんだかもじもじしている!

「じ、実は付き合ってるの。」

「え〜〜!!だれだれ?」

「…イシちゃん先輩」

「え〜〜〜〜!!!!!!」

これには他の4人とも驚きだった。

イシちゃん先輩はお世辞にもカツコイイとは言えない。下手したらぽっちゃり系だ。それが女バス内どころか、学年単位でも1、2を争うかわいさのサアヤが付き合っているというのだからそりゃビツクリするさ。

どうやらそのぽっちゃり加減がたまらなくいいそうだ。
今日あたしは人は見かけによらないことを学んだ。

品評会王子

今日の練習後、コハル先輩から「部活外恋愛禁止令」なるものが通告された。

ちなみにコハル先輩は、

「私はシュースケ先輩一筋ですから問題ありません。もうフラれましたけどね!!」

なんか完全に私情が見え隠れしているのは気のせいか？

そんなことよりみんなは我が事の方が大事らしく、そこから一気に勝手な「品定め」トークが始まる。

「ていうか何気に女バスってみんなレベル高いよな？」

「たしかに。オレはミスズちゃんがいいな。なにげに本物のお嬢様らしいぞ。」

「お上品さが湧き出てるもんなあ。」

「レイちゃんもちっこくってかわいらしいよな。」

「でもあの子バスケ一筋で彼氏作らない主義らしいぜ。」

「まじかよ〜」

お前ら本気で誰かと付き合うつもりなのか？

「でもオレはやっぱサアヤちゃんだよなあ」

「うんうん」

大多数がサアヤちゃん派だった。

あとでコイツらは絶望を味わうことになるのだが…

「異議あり!」

そう声を立てたのはカズキだった。

「オレはアカネちゃん一筋だ。誰にもジャマさせねえ。あのギリギリした視線がたまらんぜ」
ああ、お好きにどうぞ。

「そういえば小泉もデカいけど、そこそこかわいいっちゃかわいいんだよな」

「おい、やめとけ。あの子はとっくにタイガのもんらしいぞ」

「ちょっと待てやー!」

誰だそんなこと言い出したのは。そんな根も葉もないウワサは断固断ち切らねば!

「でも逆凸凹コンビってなんかおもしろそうだよな。」

「おもしろいかどうかで人の這った惚れたを決めんじゃねー!」

さてさてこの指令は誰か縁のあるヤツはいるのかいないのか…

猛アタックを目撃する姫

「部活外恋愛禁止令」がでてから、アカネの行動が急変した。

練習後は必ず、

「リヨウスケくん、はいタオル。しっかり汗ふいてね」

「サンキュ」

「リヨウスケくん、これクッキー作ってきたの。よかったら食べてね。」

「お、おうありがとう。」

とまあこんな感じだった。

完全にロックオンしたようだ。

極めつけはこれだ。

「リヨウスケくん、これアナタのために一生懸命編んだの。受け取ってくれる？」

「いいよ、これ作るの時間かかったたる？いつもありがとな。」

「ううん、全然たいしたことないよ！それより受け取ってくれて嬉しいー！」

あたしはつい気になって聞いてみた。

「最近完全にアカネお熱だね。でもどうしてリヨウスケくんなの？」

「だってリヨウスケくん。入部してからずっと活躍してるじゃん。同じシューターとしては憧れて当然でしょ。あと何気にオシャレでかっこいいしさー！」

最後の理由だけにやたらと気持ちが悪かった気がするのは、気のせいだということにしておこう。

「決めた、今日リヨウスケくんに告白するわ!」

「がんばってねアカネ!」

あの努力を見たら応援しないわけにはいかない。

練習中、アカネのシュートはいつにもまして良く入った。まさに愛の力はオソルベシ。

その日の練習後、

「リヨウスケくん、後でちょっといいかな?」

「え?別に少しなら構わないけど。」

「やった じゃああたし先に体育館裏で待ってるから。」

そう言うとアカネは去っていき、リヨウスケも体育館裏に消えていった。

火照り王子

サアヤちゃんがイシちゃん先輩とすでに付き合っていることを知ってしまった「彼女作りたい組」（元サアヤちゃん派）は他校の女子に試合でアピールするためだとかで異様に練習に燃えている。

これを知っててやったのだとしたら、コハル先輩もなかなか策士だ。

7月に入って体育館の気温も高くなり、自然とみんなの顔も赤くなっている。

ところで最近やたらとリヨウスケにかまってくるアカネちゃんが今日ついに動いたようだ。体育館裏に呼び出したらしい。

当然みんなはその結果を気になって聞いてみる。

「おいリヨウスケ、アカネちゃんとはどうなったんだよ？」

「ふった。」

「どうしてだよ、かわいいじゃんよ？」と周りが問い詰める中、

「オレ今バスケのことしか考えられないから。」だそうだ。

なんとというかコイツもストイックなやつだ。

でもオレもちよつと言ってみたいセリフではあったりする。

ちなみにアカネちゃんのリヨウスケへのもうアピール期間、長さにして一週間の間はカズキはインフルエンザで休んでいたので何も知らない。

「部活外恋愛禁止令」が出されてから初めて練習に参加したカズキは、練習後いきなり体育館の中で叫んだ。

「アカネちゃん好きです！つきあってください。」

体育館にいる誰もが一瞬固まる。男どもの方はやっべえ、リョウスケのこと伝えてなかった！という焦りの気持ちも入っている。

本人の顔は真っ赤だ。これは暑さのせいではないだろう。なんだかこっちまで恥ずかしくなってきたぜ。

「いいよ！」

その沈黙を破ったのは、アカネちゃんのこの一言だった。

その思いもよらない発言にまたしばらく体育館は固まった。

もうすぐ夏休みがやってくる頃だ。

夏なのに浮かれてない姫

公開告白があったあとアカネは質問攻めだった。

「ビックリ、あんたつい昨日までリヨウスケくんラブだったじゃないの。」

「カズキくんじゃ全然タイプ違うじゃん。」

「やっぱりフラれたあとで弱ってたから効いちゃったとか？」

というかこれらの質問事項はすべてアタシだ。ウチの部員は他人のそれには関心が薄いらしい。日頃はあるだけあたしとタイガのことはムリくりいじってくるクセに。なんか不公平だ。

「うーん、ていうかりヨウスケくんダメだったからカズキにしようと思ってたし、手間が省けたって感じい？」

こいつはとんでもない尻軽女だなオイ。せいぜいお幸せにどうぞ。

「さあすつきりしたところで夏休みの予定のお知らせです！」
相次ぐ二組のカップルのことなんかどこ吹く風でレイが言い放った。

夏休み期間の予定表が書かれているプリントが配られる。
けっこう練習がびっしりだ。

これを見てアカネがぼやく。

「えーこれじゃカズキとデートできないじゃん！」

「はいそこ、『部活外恋愛禁止令』の原則を忘れない！」

こんなときに、何も言わずにちょっとさびしそうな顔をするだけなのはサアヤらしい。

まあヒマ人のあたしにとっては予定詰まってくれた方がありがたいんですがね。

「けっこう男バスとの練習時間被ってるんだね。」

「そりゃアタシら5人しかいないとせつかくコートがあっても練習できることが限られてくるからね。コハル先輩と話し合ってたんとか合わせてもらったわ。」

「男子の練習に合わせることになるからハードになるのは覚悟しておいてよねー!」

「はい!」

「でもこの『お楽しみイベント』ってなってる日はなんですか?」

「さすがミスズ、よく気づいてくれました。でも内容は秘密よ。」

「けっきょく教えてくれんのかい!」

スピン王子

夏休みに入ってすぐ紅白戦が行われた。

日頃のレギュラーメンバーAチーム対残りのBチームという組み合わせである。

ちなみにウチの部員は11人。

その唯一のスタメン落ちがオレだった。

「デーフェンス、デーフェンス！」

一人声を出す。

むなしくて泣きそうだけ。

得点は当然というか、Aチームの優勢であった。

Bチームの監督として入っている鬼モードのコハル先輩の檄が飛ぶ。

「スタメン入りしたかったら死ぬ気でやれや！」

「オラ、ジャンプバカ！ボール取ったらすぐに出せ。」

「うっす！」

これはミノルだ。

後半から出場するようコハル先輩から指示があった。

待っていました！

オレのマツチアップはカズキ。

「出てきたばっかで悪いが、愛のパワーで無敵なオレは抜けねえぞ？」

「そんなふざけたパワーには負けねえよ。」
オレにボールが回ってきた。

ダムダムダム

クルッ

「なにっ？」

スピナムーブだ。

前にサアヤちゃんにこれで抜かれまくったのが悔しくて何度もDV
Dを見て研究したし、何度も練習していた。

またボールが回ってきた。

もういっちょよ。

クルッ

スッ

ちっ、ステイールされちまった。

「2度目は通用しねえぜ！」

ちなみに今完成している技はこれだけ。その後は、得意のスピード任せのドリブルと織り交ぜてなんとか対抗した。

一方ディフェンス。カズキはスタメン勝ち取ってるだけあって多彩な攻撃で攻めてきて抜かれまくった。

「タイガあ、てめえディフェンスの方なんにも勉強してこなかっただろ！」

「すいません！」

まったくコハル先輩の言う通りなのだった。

意外と押しに弱い姫

「これから本格的にセンターとして育てていくから覚悟しなさいよね！」

レイはそう言ってあたしを指差したのは昨日のこと。

ただいまミスズちゃんとおしくらまんじゅうの真っ最中である。

べ、別に練習中に遊んでるわけじゃないんだよ？これはスクリーンアウトと言ってリバウンドのポジション取りの際に重要らしい。リバウンドの際ゴールに近ければそれだけ有利だからだ。

しかしミスズちゃん、お上品な見た目からは想像もつかないほど『押し』が強いな。身長も体重もあたしの方が一回り上なはずなのに全然押しこめないよ。」

「ヒメさん、もっと体制を低くしないと力が入りませんことよ。」

「はい！」

ちなみに残りの3人は今日は男子との合同練習中。

練習後、タイガがなんかこっちにやってきた。

「見てておもしろかったぜ。」

「なにがよ？」

「デカいだけ取り柄のお前が、ミスズちゃんに力負けしてひいひい言ってるよこだよ。」

「なんですってええ〜！」

「でもよくがんばってたぜ。」

「え？」

「リバウンドは大事だからな。じゃないとおれ達シュートする側の人間は遠慮なく打てなくなるし。これからもがんばれよ！」

「え、ああ、うん。」

「いったいアイツはなにを言いたかったんだろう。そしてこの気持ちはいったいなんなんだろう？」

夏祭り王子

練習は連日容赦なく続いた。時間もさることながら内容も十分に濃いバスケット生活を過ごしていた。

そしてようやく夏休み始まってから初めての休みの日、夏祭りをカズキに誘われた。

これでテンションアガらないワケがない。

だって「お祭り」ですよ、「お祭り」。いやっほっほっい

バッチリ浴衣に着替えて待ち合わせ場所に行くとなつーの私服のカズキが待っていた。やっべはりきりすぎちゃったのバレたかな？

「よっ」

「おう、やっぱ女子と待ち合わせすると絶対遅いんだよね」

「あ、アカネちゃん呼んだのか。」

そりゃそうだよな、念願の彼女とこんな日に一緒に行動しないわけがないよな。

「じゃあオレおじゃまむしじゃね？」

「そこらへんはご心配なく」

カズキはにやにやしている。なんだったんだよ。

しばらくしてアカネちゃんともう一人があらわれた。

髪を盛っているせいでいつも以上に高いその『全長』。

イヤな予感はしていたんだ。

あらわれたのは小泉ヒメだった。

「なんだよオマエかよ〜」

「それはこっちのセリフよ。バスケット部の誰かが来るっていつからってきり自分より身長高い子来ると思って、せっかくはりきって盛ってきたっていうのに」

「じゃあ早くそれ戻せよ。デカいのが目立つだろ。」

「相変わらず小さいわね。」

「どういう意味だよ？」

「2つの意味だよ。あつ、ついでにおバカさんでもあるからわからないか。」

「んなにう〜〜！」

「やっぱプリプリコンビさいこ〜」

「だろ〜やっぱ一緒に来てもらって正解だったぜ！
できたてほやほやカップルは人のケンカを見といて大爆笑である。
なんかもうイロイロ回る前にイロイロ疲れた。」

最初は4人でお店を回っていたのだがいつの間にか、というか当然のごとくカズキとアカネちゃんは二人でどこかに行ってしまった。

となるとこっちも二人っきりである。

「しょうがない、たこ焼きでも食べよう」

「「しょうがない」ってなんだよ。でもオレもちょうどたこ焼き食べたかったし別にいいけど。」

その後は射的屋。

「あんたSFなんだからちゃんと当てなさいよ。」

「こんな時にバスケ関係ないだろ！」

「なんでよ、SFっていつたらシュートとか入れてナンボのポジションでしょ？」

「オレはドリブル派なんだよ！」

「なにそれ意味分かんない。サアヤやカズキくんはなんでもこなせてるじゃない。」

「う、うるせえ！」

なんだか今日はやられっぱなしだ。

「今日はそこそこ楽しかったわよっ」

「なんだよ「そこそこ」って」

「また明日ね」

「ああまた明日」

べ、別にまた遊ぶわけじゃないからな。部活でまた顔合わすだけだ
つつつの！

夏の暑さに負けなかった姫

夏休みも残すところあとわずか。

思い返せば暑苦しいおしくらまんじゅうから始まり、きつ〜い練習の数々。

お盆も過ぎて少し体育館の中も涼しいとは言わないまでも、蒸し風呂状態から少し解放されつつある今日この頃。

刻一刻とその日は迫ってきていた。

そう、『お楽しみイベント』。

これだけを心の支えにして今日まで夏休みの練習を頑張ってきたと言っても過言ではない。

ついにレイからソレについての発表があった。

「この夏の総仕上げに、練習試合を行います！」

そっちだったかー！

てっきり娯楽系だと思って、浮かれちゃってたあたし。

これなら夏祭りの方がよっぽど楽しかったし…で、でも、べつにアレもそこまで楽しかったわけじゃないけどねっ！

そんなわけで『お待ちかね』の練習試合スタート！

レイを起点として、サアヤとアカネが序盤からバンバンシュートを決めてきた。

それでもたまに外すことがある。そんな時はあたしの出番だ。この夏マスターしたスクリーンアウトで相手のCをゴール下の外側へ追いやる。そこをミスズががちりとリバウンドを取ってくれるので、連続して攻撃が可能だった。

「今度はヒメさんにも見せ場を作って差し上げますわね。」

ミスズにそう言われて間もなく、そのときがやってきた。相手のシュートが外れた。

ミスズは自分のマーク相手を抑え込んでいる。どうやらここはあたしが跳ばなきゃいけないみたいだ。

相手の指先があたしの手首の外側をかすった。

取った！

あたしがリバウンドを決めて、ボールを取ったのだ！

「ヒメ！」

すぐに声のした方に夢中でボールを投げた。

その声の主はレイだった。あっという間に一人でコートを駆け抜け速攻を決めてしまった。

これってアシストっていうのだろうか？初めて得点に絡めた気がして、まだ試合中なのに嬉しさがこみ上げてきた。

試合は69 - 51で勝った。

みんなに褒められた。

夏の成果は出ていたみたい。

やっぱり勝つっていいな。

本末転倒王子

夏休みの間コハル先輩からずっと言われてきたことなんだが、
「今からデイフェンス力のアップは期待してませんから、その代りもう一つドリブルテクニクを身に付けてくるように」と
と言われ、もっか家でDVD鑑賞中。

それにしても見るだけで疲れるんだよなあ、これ。やっぱりバスケットは見るもんじゃなくてプレーするもんだよなあ！

なんて思っているとかズキから電話がかかってきた。

「今なにしてる？」

「バスケの勉強中だよ。言っとくけどこの前みたいに遊びの誘いなら残念だがお断りだぞ。オレは日々バスケのために生きてくことを決めたんだかな。」

「それも大事だけどさ、オマエ夏休みの宿題って終わった？」

しまった〜

「この間はさてはオマエやってねえな？」

「おっしゃるとおりでございます。」

「明日31日は練習休みだろ？それでそんな哀れな子羊どもを集めて勉強会でもしようと思ってるさ。」

「カズキくんナイスう！」

「じゃ明日10時に学校の待ち合わせな」

「おう！」

次の日集まったのはカズキとミノルとアキヒトだった。

「なんだよミノルお前もかよ。」

「あつたりめえよ、宿題は前日まで残すのが男つてもんだぜ！」
こいつはバカか。でも状況はオレも一緒だから反論ができない。

4人で勉強をしていると30分もすると、カズキとミノルは飽きたと言つてジュースを買いに出て行ってしまった。

残されたオレもなんだか集中力が切れてしまった。

今はアキヒトと2人っきりの状況。

カズキやミノルとは部活でもよくバカをやっていたりするが、アキヒトとはあまり話したことがなかった。なので少し緊張していた。

「なあアキヒト、お前マジメそうだけどなんで宿題やってなかったんだ？」

「だって毎日のように練習だったじゃん？」

「オレが言えた義理じゃないが、それは他の部員も一緒じゃないか？」

「オレ実は練習の反省ノートとか書いてるんだ。で、書いてるうちにいろいろチームの構想とか考えてるとあつという間に時間なくなるんだよね。」

「さすがPGだな。チーム全体のこと考えてるなんてすげえよ！やつてることがやっぱ違うなあ。」

「そんなことねえよ。オレはソーマさんに追いつきたくて毎日必死だよ。」

オレがただただ感心しているとカズキとミノルが戻ってきた。

「お、なんかおもしろそうな話してんじゃない、聞かせてよ。」

そこからは4人でバスケット義で大盛り上がりだった。

夏休み最後の日に楽しい思い出ができたのだが、けっきょくその日宿題が終わることはなかった。

人の恋に振りまわされた姫

夏も終わるとあつというまに新人戦がやってきた。

1回戦は森山高校とかいう無名高校。そこそこ伝統はあるらしいが、ウワサじゃ合コンに行ったり、とつかえひつかえカレシを作ったりして遊びほうけてるような、いわゆる弱小校だった。

「みんないい、こんなチャラチャラした部と競ってるようじゃこの先なんて目指せないからね！」
「はい！」

試合は一方的だった。

そして今回の得点女王はなんといってもサアヤだった。その好調を見抜いたレイはサアヤにボールを集めた。容赦なく切り込んでいき一人で何本も決めた。これには森山高校のメンバーもなすすべもなかった。

試合は78 - 23で圧勝だった。

相手が弱かったこともあり、ベンチメンバーのいないあたし達にとつて致命的なスタミナ不足は問題なく解決した。

「サアヤ、今日は絶好調じゃない！」

「じ、実はイシちゃんに今日がんばったらご褒美してくれるって約束してたんだ。」

「え、なに、なにい？」

「キスしてくれるって…」

「ひゅ〜おアツイこって！次の試合も頼むよ！」

「うん！」

こういう時のサアヤは顔がかわいとかじゃなく、仕草とか内面から出る乙女チックなところが女のあたしでもきゅんきゅんさせてしまう。

2日後、2回戦が始まった。

序盤は24 - 36で劣勢だった。すかさずレイがタイムアウトを取った。

「ちょっと、サアヤ1回戦の勢いはどうしたっていうのよ！？まるで動きがなっていないじゃない！」

「…ごめん。」

「いったい何があったっていうの？」

「昨日イシちゃんとケンカしちゃって…」

「その原因てなによ？」

レイの追撃は止まらない。

「…イシちゃんのプリン食べちゃったの」

「はあ？」

「だってあんまりにもおいそうだったからつい…」

ああ、サアヤもなんだかんだでスイーツ好きの普通の女の子なんだな。ってというか今はそんなことに感心してる場合じゃない！

「レイ、アタシのこと思い切りぶって」

「それで気合い入るとでも言うの？」

「わからない。でも何かきっかけがないと、何も始まらない気がする。」

「わかった」

バシッ、バシッ、バシッ

容赦ない往復ビンタが体育館に響き渡る。

「よし、これで5人全員気持ち入ったことと思うし、絶対勝つわよ！」

「はい！」

しかし1回戦の相手とは違って実力派がそろったチームだった。序盤のリードが効いたこと、徹底的に走らせたことで後半疲れが見えて51-70で負けた。

1 プレー王子

女子の試合はもう終わったようだったが、シード権を獲得している男子はここからだった。

まず緒戦はベスト8まで勝ちあがってきた江戸川学園。

「相手の予想スタメンを発表します。PGの工藤174センチ、SG服部177センチ、SF高木185センチ、PF毛利188センチ、C目黒191センチです。PGを中心に、とても統制のとれたバランスのいいチームだと言っていいです。」

「身長差に関しては五分といったところか。」

「どっちが先にゴール下を制することができるかがカギだな。」

「こっちもいつも通り、PGソーマさん、SGリョースケくん、SFカズキくん、PFジョーさん、Cイシちゃんで行きます。他のベンチメンバーも場合によってはどんどん投入していくから覚悟しておいてくださいね!」

「うっす!」

試合は序盤から苦しい展開になった。相手のPGである工藤がフリーになった選手を見つけるのが上手く、ディフェンスにできた穴をうまく突かれて得点を許してしまった。

点差は12 - 20まで広がっていた。

しかしここで黙ってないのがゴール下の二人だった。ジョーさんはシュートブロックに何度も飛び、ピンチを救った。イシちゃんも簡単にゴール下へ入らせず、オフセンスでは見事にダンクを決めた。

「よし、ここ止めて一気に逆転すつぞ！」

そのソーマさんの一言はウソではなかった。さっきのお返しとばかりに、ディフェンスをかわしてフリーになったリヨウスケにパスをする。

シュパッ

お得意の3ptシュートが決まった。

次はカズキだった。パスをもらうと中へ切り込んでいく。しかしそこもベスト8。目黒と毛利がマークを付けてきた。この高さの差じや入らない。

誰もがそう思った瞬間だった。カズキは体を後ろに下げながらシュートを放った。

「ナイスだ、フェイダウェイシュート！」

コハル先輩も大興奮のプレーである。

そこで波に乗りかけていた翔泉高校だったが、次のプレーで一瞬戦意が奪われる。

服部が速攻からの3ptシュート。

それでリズムを崩したのか、翔泉の攻撃では時間オーバーになってしまった。

ここで翔泉がタイムアウトをとった。

「せっかく流れをつかみかけたのに、こんなんじゃ全然ダメだ！タイガを使う。」

このコハル先輩の言葉には他の部員だけでなく、オレ自身も驚いた。

「なんだ、タイガびびってんのか？」

「い、い、いやそんなことないっすよ！」

「めつちや動揺してんじゃねえか。」

「うるせえカズキ、これは武者震いってやつだよ！」

「なんか違う気もするけど、とにかくコハルの期待に応えてくれよな！」

「うす！キャプテン！」

こうして公式戦デビューとなった。

「遠慮しないでいいからね！ガンガンつつこんでくのよ！」

「うっす！」

交代開始早々パスが回ってきた。マッチアップ相手はオレより20センチ近くも身長が高い。でもそんなの言い訳にならねえ。

だってオレはスモールフォワードSFとしてやってくって決めたんだから。

クロスオーバーステップで相手を左右に振る。

相手が一瞬右方向に体重をかけた！

それを見逃さず左方向から一気に抜きさく。そのままゴールへ一直線。

シュパッ

決まったあー！！！！

公式戦初ゴールだぜ！

その後はすぐに交代させられた。果たしてチームに貢献できるプレーができたかどうかは分からなかった。ただし、あの抜き去った瞬間とゴールが決まった瞬間の感触は忘れることができなかった。

そんなオレの活躍のおかげか（？）チームは70 - 65で勝利した。

そんな浮かれムードの部員とは対照的に

「こんなんじゃないダメだ。」

ソーマ先輩が言ったこの言葉の意味を、オレは後で知ることになる。

新しい道が見えた姫

この前の試合の反省会をしていた。

「あの試合、サアヤのことを抜きにしてもかなわなかったのは事実だわ。

このチームの弱点てなにかわかる？」

アカネが迷わず言った。

「そりゃヒメでしょ。」

わかっちゃいるけどそんなはつきり言わんでも…

「そうよ、でもその初心者のヒメが一番可能性が大きいのもまた事実よ。」

「そうなの？」

あたしはレイの意外な言葉に驚く。

「そうですね。だって初心者のヒメさんにはまだまだ身に付けてもらいたい技術がたくさんあるんですもの。つまりヒメさんが強くなるってことは、イコールこのチーム全体が強くなるってことと同義なわけです。」

ミスズもそう言ってくれてるみたいだし、ホントになんだらう。

「なのでこれからヒメには新しい技をマスターしてもらおうと思っているの。」

「それって具体的になんなの？」

「シュートよ！」

「え、でもシュートできる人ならサアヤとアカネを筆頭に、他の4人で十分じゃないの？」

「わかってないわね。あなたにシュート力が全くないって相手にバシてないうちはいいわよ。でもそれを見抜かれたら最後、あなたを

マークする価値がないと思われる。そうなると思う?」

「えっと、他の人へのマークがきつくなる?」

「その通りよ。今までの試合でも後半になってサアヤにダブルチームをつけられたことは何度もあったわ。あなたがシュートを身に付けることで、それを打ち崩すことができるのよ!」

なんだか自分にもできることがあると知って嬉しくなった。それとシュートというのは実はずっと憧れていたプレーでもあったのだ。

「それじゃ早速今日からゴール下からのシュート練習やるわよ!」

「はい!」

「1日ノルマ300本!!!」

えええええ〜

絶望王子

次はいよいよ決勝トーナメントだ。

いいようのない緊張感がひしひしと伝わってくる。

なんとたつて相手は夏にぎりぎりですごったとはいえ、優勝候補筆頭の猛将高校だからだ。

「センパイ達が抜けたからってこれで負けてたらシャレになんねえぞ。気合い入れていっぞ！」

「うっす！」

しかしその気合いはまったく通じなかったことを知る。

前半だけで50得点を許し、ハーフタイムに入った。そのときのスタメンは肉体的にも精神的にも相当疲労がたまっているようだった。

「このまま引き下がるわけにはいかねえからな、タイガも準備しておくように！」

「はい！」

後半途中から交代してコートに入った瞬間、明らかにこれまでの試合なんかとは空気が違うのが感じられた。

そしてベンチから見てある程度分かっていたはずなのに、それでも

相手選手のレベルの高さにのまれてしまった。

結果はダブルスコア、しかも100点とられての完敗だった。

その日の試合の後はいつもお調子者のソーマさんやカズキも何も言わず、ただコハル先輩の叱咤激励を受けていた。

続く残りの試合も猛将戦でのショックが大きかったのか、惨敗だった。

そして試合後にはさらにショックなことが続いた。

8人しかいない1年のうち、新人戦後3人がやめた。

なんだかんだ言っつて、な姫

「文化祭楽しみだよな」

「そうだな。」

「なんていうかいつもの学級委員の仕事も全然苦じゃないっていうかあ〜」

「そうだな。」

「もう企画考えてるだけでウキウキになれちゃうんだよね」

「そうだな。」

「…タイガってチビだよな。」

「そうだな。」

これはアレだ。いつぞやのお返しに、

ピンッ

「イッタ、なにすんだよてめえ！」

「くらってるのに分らなかった？デコピンよ。そ・れ・に、なに
してんだよはこっちのセリフよ！こっちがなに言っつても「そうだな」
の通り一遍等な返事しかしないくせに！」

「だからってデコピンすることあねえだろ！オマエのムダにデカい
手だから破壊力ありすぎだっつうのー！」

「またそうやって人のコンプレックスに触れるとか、ホントデリカ
シーないわね。」

「さっきおまえもチビとか言っつたじゃねえかよ。」

「そこだけはちゃんと聞いてたのね。だったらちゃんと返事しなさいよ。まあそこだけ反応するつてもどうかと思っつけど。」

とにかく、文化祭の企画案まとめちゃいませよつ。」

「…ああ。」

「はあ、今日はなんかもうあんたダメね。」

「ダメってなんだよ！」

「そのままの意味よ。…この前の試合でなんか壁にでもぶつかったの？」

「べ、別におまえに関係ないだろ！このおせつかい女！」

わかりやすつ。でも、これもいつぞやの借りもあるし聞いてやるか。

「そんなこと言わずに話してみたら？ 初心者あたしに具体的なアドバイスなんてできるはずもないけど、聞いてあげることくらいはできるわよ？」

「うっ〜」

悩んでる悩んでる

「…全然届かなかった。」

「やっぱ身長のこと？」

「自分が小さいことくらいイヤってほどわかってらあ！…ただ技術でもあれだけ一方的にやられたのがショックだったっていうか。あんなにも常識離れた動きができる人間がいるんだって、実際コートに立ってみて初めて肌で感じたら、急にコワくなったんだ。」

「いつも強気なあんたでもそんなことがあるのね。」

「決勝トーナメントの相手はドコも今までの相手とは別次元みたいだった。3年生のセンパイ達が優勝してたから、心のどこかでもっ

と簡単なものだと思ってたのかもしれない。」

「…それに仲間があれから3人も辞めちまった。」

「それでタイガ自身も続けようかどうかどうか悩んでる？」

「それはない！オレは何があつたつてバスケットは続けていきたい。いや続ける！」

「じゃあやることは一つじゃない？」

「ああ分かつてるよ。練習して、練習して、それでも遠くても練習し抜いてやる！」

「そうそう、その意気その意気 やつとタイガらしくなってきたじゃない」

「えへへ、そうかな。」

「そうよ、タイガから強気と元気をとつたら何ものこらなんだから。」

「たしかにな、今日のところはそういうことにしといてやるよ。ありがとなヒメ。」

「きゅ、急になに言い出すのよ！べ、別にあたしはこのままだといつまでたつても学級委員の仕事が終わらないしい、あたしだってバスケの練習早くしたいもん。」

「はいはいわかつてるよ。それじゃちやっちやっとなつて終わらせますか。」

「うん。」

その後は文化祭の話が予想以上に盛りあがりすぎてしまい。7時過ぎまでかかった。タイガはコハル先輩に、あたしもレイにたっぷりしぼられたけど、たまにはこういうのもいいか。

衝撃王子

あの悪夢のような新人戦から一週間後、初めて部活でミーティングが開かれた。ちなみにここに残っている一年はオレとリョウスケ、カズキ、ミノル、そしてアキヒト。

そのメンバーを前にして、唐突にコハル先輩が言い放った。

「カズキくんをCセンターへコンバートします！」

なんじゃそりゃ！？本人も聞かされてなかったらしく、口をあんぐりさせている。

「幸い身長も伸びて190センチ越えてくれたみたいだし、カズキくんのセンスならこれから鍛えていけば十分に通用します。それになにより、今までのフォワード力を合わせ持ったセンター、つまりセンターフォワードが誕生するのです！」

「だからこの前身長測られたのか」
カズキが今度はつぶやいている。

「1年後には晴れてCセンターデビューしてもらってから覚悟しておいてよね！」

「え、でもそれじゃ今からじゃ夏の大会に間に合わないじゃないですか。大体Cにはイシちゃん先輩がいるじゃないっすか。」

ここでソーマ先輩が話し出した。

「コハルとおれ達2年の3人で話してたんだ。この大会に挑んでみて、オレらの代じゃ優勝は無理だろうって」

「そんなんっ」

「だから次の代、お前たちにバトンを託すからそのための準備だと

思ってくれ。幸い残ってくれたメンバーはこれから中心になって活躍してほしいと思っていたヤツらばかりだかな。カズキだけじゃなく他のメンバーもそれを意識しながら練習に臨むように。」

「はい」、という返事を誰もすぐにはできなかった。

その緊迫を破るように、コハル先輩が言った。

「それとタイガくん。このチーム状況だとこれからアナタは今まで以上に重要な役目になってきます。なので今日から『シュート力向上特訓』を開始します！」

いたせりつくせり姫

「ヒメいい、しっかり見とくのよ。」

シュパッ

「うんきれい。」

「当たり前じゃボケ！アタシがバスケ何年やってると思ってるんのはいアンタもやってみる。」

「はい。」

今こうして全体の練習後、レイと2人でシュート練習に励んでいる。

ガスッ

「だあくなんにもなってるない！　まず手がチガウ！　左手は添えるだけ！」

「レイこわいよあく。」

「うだうだ文句言わない！」

「はくい。えくつと左手は添えるだけつと。」

ガスッ

「うん、今は外したけどフォームは良かったわよ。その調子その調子。」

「やった」

「はいそれくらいで喜ばない！もう一球いくよ。」

ガスッ

うっうまくいかない

シュパッ

あれっ、あたしもレイも打ってないはずなのにボールが跳んできたぞ??

後ろを振り向くとアカネの姿が。

「ごめんあまりに下手だから冷やかしに来た」

「冷やかしに来た」じゃないわよ、あんたはさっさと帰ってカズくんといちゃいちゃでもしてなさいよ!」

「だってカズキこの前の試合で負けたの相当悔しいらしくって、全然相手してくんないだもん。」

へこんでたのはあのバカだけじゃなかったんだ。

「じゃなくて、人のジヤマしてんじゃないわよ!レイからもなんか言っっちゃって!」

「ちょうど良かったわ、アカネがお手本見せてちょうだい。ウチじやアンタが一番シュートフォームきれいだしね。」

「えっ、ちよっと待ってアタシはただ冷やかしに来ただけであって…」

「やってくれるわ・よ・ね?」

「…はい。」

そう、この部ではキャプテン命令は絶対なのだ。レイが言い出した

わけではないがいつの間にかそれが当たり前になっている。

「視線はそらさない！」

「ボールの握り方がチガウ！」

『監督』が2人になった結果、ツッコミ（指導）も2倍になるのであった。

新技に苦戦王子

ダムダムダムダム

キュッ

シュパッ

コハル先輩から言われたシュート練習というのはドリブルでつつこんで急に止まり、そこからのフリーの状態でのジャンプシュートをする。いわゆるストップ&ジャンプの習得だった。

フォワードとして致命的に身長の高いオレが、わずかなチャンスの時間にシュートを決めるためには必須の技だ。でもなかなかうまくいかないんだよな。実際にこうして練習してみると、ドリブルから止まった瞬間にどうしてもバランスを崩してしまってキレイなシュートフォームで打つのがいかに難しいのかがよく分かる。今のはたまたま入ったけど、まだほとんど外れることの方が多いし。

って一人ぐちっててもしょうがないってわかってるんだけどなあ。

ダムダムダムダムダム

そんな考え事をしながら気づくと、延々とドリブルを続けてしまっていた。

「さっきからダムダムうるさいわね」

隣で練習していたのは女バスの巨神兵、ヒメ。

「はあ？バスケはドリブルしてナンボだろ。それよりおまえのその地味なゴール下シュートの練習の方が見てて恥ずかしくなるぜ。」

「くあゝむかつく！人が初心者なの知ってて平気でそういうこと言う？？」

「おまえが先にケンカ売ってきたんだろ。…それとシュートするときもつと膝曲げたほうがいいぞ。」

「えっ？」

「さつきから見ると手だけで打ってたよ。だからフォームが安定しないし全然入らないんだよ。」

「わ、わかってるわよそんなこと。今から直そうと思ってたところ。」

「ぶぶっ。なんだよそのママに怒られたときの小学生みたいな答え。」

「うるっさいわね。教えるなら優しく教えなさいよ！」

「悪いけどオレも自分の練習で忙しいの。それにアドバイスできるのはそれくらいだよ。見たところ他の細かいところはチームメイトにアドバイスちゃんともらってるみたいだしな。あとは打って打って打ちまくって、その感覚を身に付けるしかないんだよ。」

「そ、そうなの？わかった、やってみる。」

最後のセリフはヒメに言っているようでいて、自分自身にも言い聞かせているみたいだった。

ダムダムダムダム

キュッ

ガスッ

あつ外した。
精進精進。

召使いに祭り上げられる姫

「はいそれじゃ文化祭の企画になにか提案ある人？」

この前タイガと話しても結局アイデアはちつとも湧いてこなかった。

こうなったらクラスのみんなに頼るっきゃない！そんなわけでクラスの前に立つてこうして仕切っているわけである。

すると誰かが言い出した。

「ていうかそれ、学級委員が原案出してくるって話じゃなかつた？」

「それはその…」

あたしがはつきり言えずにいると、タイガが助け舟(?)を出してきてくれた。

「い、イロイロあったんだよっ！」

「そ、そうよ学級委員だって他の仕事で忙しいの！」

「あらあら怪しげですなあ〜『プリプリコンビい』?」
「ゲンキくんうぜえ〜」

「ホントホント、お2人でナニをしていらつしやったのかしらあ?」
くっそおレイめ、この前部活遅刻した腹いせか? 訳知り顔な雰囲気出して、もうっ!!

「バカ言ってるじゃねえよ!なんでこんなのと2人でいて楽しいワケないだろ!」

「な、なによそれ!まるであたしがつまらない女みたいじゃない!」

「だからそういうややこしいこと言うから誤解が広まるんだよ、考

えろよっ」

「それとこれとは別問題よ！ さっきの訂正しなさいよ！」

「だあ〜〜めんどくせえ、これだから女はあ」

「アッ、ひらめいたっ！」

「急になによレイ？」

「2人で漫才しなよ！」

「はあ？」「え？」

「いいじゃん！いいじゃん！もちろんコンビ名は『プリプリコンビ』で」

「ゲンキ！当たり前みたいにその名前使ってるけどオレアぜんっせん認めてねえからな！」

「そ、そうよ、あたしだって願ひ下げだわ。」

「おもしろそ〜」「アタシも見てみたい。」「その調子でやれえ、プリプリコンビ！」

あたし達当人の気持ちとは裏腹に、次第に盛り上がっていくクラス。

「そんなこと言われてもなにしゃべったらいいかとか分かんないよ。」

「そんなのいつもの感じでいいからさ、大まかな原稿はわたくしレイとゲンキくんこと『召使いコンビ』にまっかせなさい！」

「いいねレイレイ、それいただきっ。そうですぞ姫君、われわれ
『召使いコンビ』にすべてお任せあれっ」

「よし、決まりだな。」

そして最後にドヤ顔でシメよつとする担任。

「「「うっそーん!!」」」

漫才王子

この前のホームルームであれよあれよという間に決まった『プリプリコンビ』の漫才。しょーじき納得いかないことだらけだけれども、もう決まったんだからやるしかないっしょ。

でもその前にぼやくだけばやかせてくれ。

『漫才』の雰囲気作りとか言って、教室の中はまるでおとぎの国の中のお城風アレンジ。加えてクラス中メイドやら執事の衣装揃えてるけど、オマエラ絶対ソレ着たかっただけだろ！まあこんなことは文化祭じゃよくある話らしいが。

ちなみにレイちゃんはメイド長という設定らしく、一人だけフリフリつきのカチューシャをつけている。いや正直似合ってたてかわいいけども！

…ゲンキはまああれだ、アイツの服もこだわりあるらしいが勝手にやっててくれって感じ。

それにしてもなんだよオレのこの衣装。

いかにも『王子様』って感じの、今にもベルサイユ宮殿のパーティーにでも行けそうなくらいの本格感！たしかに衣装係のみんなの努力は嬉しいけれども！ただ着てるコッチはメチャメチャはずかしいんですけど！

そして『お姫様』とのご対面。

え、え〜っと、馬子にも衣装とはこのことだな。

「な、なによ。人のことじろじろ見てイヤラシイ。」

「ば、ばか！一瞬誰か分かんなくなるくらい、あんまりにも豪華な衣装の方に驚いてたんだよ！」

「うわ、サイテー。こういうときは真つ先に「とつてもかわいいね」とか「キミに似合ってるてキレイだよ」とかの一言でもいってみなさいよ。」

「そんな気持ちわりいこと言えるかよ！」

「あらごめんあそばせ。あなたのような卑しい心の持ち主には似合わぬ言葉でしたわね。オーホッホッホッ。」

コイツすっかり『女王様』気分になってやがる。

「はいはいそういうやり取りは本番までとっておいてねえ〜」

そう、もうすぐ公演の第一回目を迎える。

ヒメと2人舞台そでに行きスタンバイをする。

(召使いコンビ特製の) 台本は擦り切れるほど読んだ。

これまでの練習のおかげで、コイツとの息もむかつくくらいにピットだ。

あとは落ち着くだけ。

えつと「人」という字を口に書いて手でつまむ。

あれっなんか違う気がする。

「くすつ。」

「ちょ、お前なに笑ってんだよ」

「あんたが謎のおまじないをしてるからでしょ。フツ」「人」の字を手のひらに書いて飲み込むでしょ。」

「うるせえ、ほっとけ!」

「でも安心した。」

「何がだよ?」

「あんたでも緊張するってこと。」

「わ、わりいかよ。」

「べつつにい。」

「バスケの試合に比べたらこんなんへでもないね!」

「もうだいじょぶみたいね。じゃ、いくわよ」

「おう!」

ブー

それでは只今より、とある国の『お姫様』^{プリンセス}と『王子様』^{プリンス}、通称『プリプリコンビ』^{プリンセス}による漫才を始めたいと思います。

メイド長と食べ歩き姫

あたし達の高校の文化祭、翔泉祭は2日間行われる。

1日目は2時間ごとに『漫才披露』があったのでとても他を回る余裕もなく、休憩時間もひたすらタイガと一緒にレイとゲンキくんのダメだしをくらって終わった。

でも2日目は午前中に一回公演しただけで、あとは自由時間になっていたのでレイとゆっくりお店めぐりをすることにした。

「おなかすいたね、ドコ行こっか。」

「サアヤんとかどう？たこ焼き屋やってるみたいよ。」

「よし、んじゃソコできまりい！」

行ってみると大行列だった。しかしあつという間にその行列も減っていき、あたし達の番が回ってきそうだ。

「あれ、サアヤ受付じゃないんだね。キレイだから絶対そうだと思うたのに。」

「あのミス無愛想にそれはムリっしょ？」

「ふふっ、それもそうかあ。どこにいるんだろっね。見当たらないなあ。」

「あ。サアヤだ。」

サアヤはお客さんに見えるところで一生懸命たこ焼きを焼いている。

クルッ　クルッ　クルッ　クルッ

それにしても手際のいい手さばきだ。生地をサアーっとまき、そこにタコ、天かすを放り込む。そして得意(?)のひっくり返し。一連の流れが美しくさえある。

「あれ、他にも見たことある顔がいるぞ」

「え、だれだれ？」

隣で同じようにたこ焼きをつつついているのはリヨウスケくんだ。

クルツ　クルツ　クルツ　クルツ

リヨウスケくんもサアヤと同じくらい器用に回している。手首の柔かさはさすが名シューターだ。

「ちょっとサアヤちゃん、リヨウスケくん作りすぎだよ。パツクに包むこっちの身にもなってよね。」

そのあまりの生産量に受け渡しの係りの子が悲鳴を上げている。

だがしかしどちらも返事がなく、黙々とたこ焼きを量産している。

意外とリヨウスケくんも負けず嫌い？

あたし達もその消費に貢献すべくたこ焼きを購入し、話しかけるとなくお店を後にした。

「なんか暑くなってきたね。」

「じゃあなんか涼しいものでもかっこみますか!」

「いらっしやいらっしやい!」

ちょうどタイミングよく、なにやら威勢のいい声が聞こえてきた。

「お、ヒメちゃんとレイちゃんじゃないか。どうよ一杯かき氷でも。」

「お、わかってるう。今ちょうど食べたいと思ってたところなんだ。」

「だろお、うちのアキヒトすげえんだぜ、今日は絶対アツくなるからかき氷がガンガンに売れるって予想したらこの通りズバリよ!」

「ちなみに配役考えたのも彼だったりする?」

「え、そうだけど?」

天才的だな。

「いらっしやいませえ。」

受け付けにはまたまた見知った顔。

「あ、ミスズだ。」

いつも見ている顔のハズなのにこの暑さの中なんだか妙に癒されるわあ。男子だったら余計にそうだろうな。だってみんなかき氷なのにムリして1人で2つも3つも買ってるんだもの。ぜったい後でおなか壊すよ?」

ウチのレイといい、PGってのはホントに頭のいいというか人を活

かすのがうまいよな。

「よし、最後のシメはあれよな。」

「そうあれあれ！漫才中もこれをずっと楽しみにしてたんだから」

なにしてそりゃ、クレープですよ、クレープ。

え、食べ過ぎ？

いやいや女子にとってスイーツは別腹なのだ。

カズキくんが生地を器用に広げて、それを受け取ったアカネがトツピングをする。抜群のコンビネーションである。

素早く出来上がったクレープはアツアツだった。

イロイロごちそうさまでした。

受賞王子

翔泉祭は実は3日目がある。それは後夜祭ともいうが、有志の生徒だけが体育館に集まり、前日までの疲れを吹き飛ばすかのように文字通り『お祭り騒ぎ』をするのである。

お菓子やジュースが置かれ、自由に飲み食いできてちょっとした立食パーティー状態。まあそんなお上品な雰囲気では決まてないが、とにかく盛り上がっていて楽しい。

皆さんご静粛に願います。

急にアナウンスが入った。

それではただいまより、クラス別企画の優秀賞を発表したいと思います。

それでは早速第3位。2・7『アッキーナの焼きとりーな』！
あ、ソーマさんのクラスだ。あそこの担任のアッキーナ先生かわい
いもんな。あつこれは関係ないか。でもたしかにあの焼き鳥はおい
しかったもんな。

続いて第2位は3・8『笹崎さんちの笹団子、佐々木先生ささっ
どうぞ』

なんだか「さ」がやたら多い名前だな。でも2位とってるんだから
味は本物なんだろうな。

そして栄えある第1位は

会場がいったん静まり返る。

1・5『波乗りかき氷』です！

すげえ、2、3年生を抑えての堂々の1位だった。

最後に特別賞の発表にまいります。

あれ、まだ賞が残ってたのか。でも正直そろそろ飽きてきたな。

1・2『プリプリコンビの優雅なお漫才』です！

え、まじで？

「やったじゃんオージ、特別賞だつてえ！やっぱりプリプリコンビは最強だなー！」

ゲンキは自分もかなり裏方としてがんばってくれたのにもかかわらず、オレとヒメだけの力でとつたみたいなきび方をしている。正直照れくさい反面、やっぱり嬉しくもあった。

放課後の部活で、1位をとつたミノルやアキヒトよりもオレの方が騒がれてたときは、初めてプリプリコンビやっててよかったなって思った瞬間だった。いや別に喜んで組んでるつもりはまったくないけどね。

あつ、でもこれでするそうプリプリコンビも解散したいな。

人の恋バナどころじゃない姫

翔泉祭が終わってすぐの放課後、部活前の更衣室はまだまだ翔泉祭のことで盛り上がっていた。そんな中、

「重要なお知らせがありますの。」

ミスズから珍しく、そう告げられた。

みんなこれには話を止めて注目である。

「わたくし殿方ができました。」

殿方？ 殿 オトコ 彼氏

「ええ〜〜〜」

これは詳しく事情聴取せねば！

「相手は誰なの？」

「もちろんバスケット部の方ですわ。」

「うちの男バスの誰か？」

「いえ、他校の方です。」

「どうやって知り合ったの？」

「新人戦の時にお見かけしていてプレーしているお姿がステキな方だなと思ってたら、今日の翔泉祭に来ていらしたの。そして昨日、お付き合いしてほしいと言われましたの。」

ひゅ〜。両思いだってわけかい。

「はい、驚くのはそこまで！今日は男子と試合するよ！」

そんな殺生な！ まだまだ聞きたいことがあるっていうのに。

「え、それって2年生も入ってるの？」

「そうよ、あっちもオールメンバーで参加してもらおうわ。」

「それだとかなりキツくない？」

「正直それは否めないのよね。そのため今日は混合チームミックスでやることになってるから！」

（本日2度目の）「ええ〜」

チーム分けはAチームが男バス2年のソーマさん、ジヨーさん、イシちゃんの3人とアカネとサアヤだ。そして残りがBチーム。

Bチームのリーダーは自然とレイということになっていた。

「いい、相手のインサイドはかなり強力よ。幸いこっちは人数も多しし体力気にせずガンガンぶつかっていきなさいよね。」

「はい！」「うっす！」

こっちのスタメンはレイ、リヨウスケくん、カズキくん、ミスズにあたしだった。

正直言つてこの組み合わせはかなりきつかった。特にアタシのところ。センター対決を言い渡されたのはいいけど、相手は男子の中でも超重量級のイシちゃん。

まずはBチームからの攻撃。

レイからパスを受け取ったリヨウスケくんが3ptを放つも惜しくも外れる。

よし、ここはリバウンド。あたしの出番だ！

しかしイシちゃんはびくともしない。だって90キロだよ？90キロ！あたしといくつ違うと思って！

まあ、あたしの体重がバレルから具体的な数字は言わないけれども。

当然のようにイシちゃんにリバウンドを取られ、ターンオーバー攻守交代。

ソーマさんのフリーの選手を見つけて出すパスは脅威だ。

あっという間にサアヤにボールが渡り、シュート態勢に入った。

今度はサアヤのシュートがリングに嫌われ落ちてくる。

もしかしてまたあ？

よし、今度は負けないと踏ん張ってみたものの、焼け石に水だ。

イシちゃんにスクリーンアウトをかけられてビクともしない。

すると横からさっとジャンプしボールをかすめとった人物がいた。

カズキくんだった。そういえばカズキくんてSFのほすだけど身長も190くらいあるし、リバウンドもこなせるんだな。プレーの幅が多くてすごいな。誰かさんに爪の垢でも飲ませてやりたいな。

「ヒメちゃんやるねえ、ぼく今の自由に動けなかったよお。」

「あ、ありがとうございます。」

やったイシちゃんにほめられちゃった。

「ヒメ、今度当たり負けたらはったおすわよ！」

レイさん、それはムチャつてもんですぜ。

けっきょく、レイが試合中ずっと走り回って相手をかき乱してくれたことと、カズキくんのインサイドでのフォロワーもあり、スコアは14 - 20となんとかくらいついていた。

初挑戦王子

またスタメン落ちかよ、つくづく縁がないな。

ちなみにコハル先輩はBチームの監督として指揮や交代の指示を出しているが、女子も混ざっているためか、髪は縛らず『通常バージョン』のようだ。

ようやく前半カズキと交代で出番が回ってきた。

レイちゃんからボールが回ってくるとすかさずドリブルで切り込む。

サアヤちゃんを抜いた。よっしゃ！

しかしヘルプですぐにイシちゃんが前に現れた。

そのときだった。

フリーでつったてるヤツがいる。

そこにパスを出す。

シュパッ

「ナイス、ヒメ！特訓の成果出てんじゃない！」

「てへっ」

「お、これがウワサのプリプリコンビですか、バスケのコンビネーションも絶対好調でありますな。」

「うるせえミノル！」
ただ今回に関しては悪い気はしなかった。

ここで大幅にメンバーチェンジし、アキヒト、リヨウスケ、オレ、ミノル、カズキの、純粋な男バス1年メンバーになった。

これからの翔泉男バス部を担っていく上で、これが重要なマッチアップであることは十分にわかっていた。

ソーマさんからのボールだ。オレは未だに、この人のパスを出す方向が全く読めない。これで県のベスト3にはかなわないというのだから、相手高校のレベルの底が知れない。

ソーマさんがちらりとサアヤちゃんの方を向いた。すかさずオレはしっかりマークにつく。

しかしボールがやってこない。

やられた、アカネちゃんの手にボールがある。気づくとすぐにシュート態勢に入った。
しかしリヨウスケが反応していたようだ。ボールに指先だけがかるうじて当たる。

ガスッ

「リバウンド！」

ゴール下で8本の手がひしめき合う。

そこから抜け出したのは、なんとミノルだった。

「よし、ここから一本とっついていこうか。」

「バカ、ミノルそれはフツーPGのアキヒトのセリフだろ?」

「いいよ、ミノルの方が気合いが入るからな。でもボールは返してくれ。」

アキヒトはコート全体を目線だけで素早く状況把握する。

そして見つけた。パスを通すための穴。

アキヒトのパスコースはカンペキだった。カズキもそれをしっかり受け取ってシュートを打とうとする。

しかしイシちゃんの壁は崩せず、力負けして仰向けに転ぶ羽目になったのであった。

リョウスケやオレも積極的にシュートを狙っていくのだったが、その度にジョー先輩のシュートブロックで防がれてしまった。

その後は一方的な試合展開が続き、終わってみれば50-72という大差で負けた。

聖なる夜の予定を勝手に決められてる姫

今年もあの季節がやってくる。

街中にイルミネーションが咲き乱れ、カップルが増殖しだす。そしてもう、あたしのところにはサンタはやってこない、ただ苦痛なだけのイベント。

そうクリスマス。

この前のミスズに彼氏発覚で、いよいよ部活内の一人身はあたしとレイだけになってしまった。

かと言って今さら誰か一緒に過ごしてくれる男の子が都合よく見つかるはずもなく。

だいたい高校生にもなつて家族で仲良くクリスマスパーティーつても、なんだか気恥ずかしいし。

そうなると頼れるのは一人。

「レイ〜、あんたクリスマスどうするの〜?」

「実はもう予定入ってるんだよねえ〜」

え、ちょっと待ってレイまで? あたしはどうすりゃいいの〜?

「そ、そ、それって相手誰なのよ?」

「もう何度もゲンキくんに誘われちゃってさ、一緒にクリスマス会することにしたんだ。」

「ちょっと、『部活外恋愛禁止』じゃなかったの?」

「なによ、大げさな。ただの『クリスマス会』だって言ってるでしょ。それにタイガくんとヒメの参加もすでに決定事項だからね。4人で楽しく過ごしましょ。」

やった！と、内心ガッツポーズをとるのは裏腹にここは悟られないようにしないと。何となくその方がいいと、あたしのカンがそう言っている。

「うんそれは別にかまわないけど…」

「でもま、アンタとタイガくんが『イイ感じ』になる分にはいつこうにかまわないけどね〜」

「それはずうえつったいにありえなーい！」

「あつ、プレゼント交換あるからちゃんを用意してよね。」

「え、それは一緒に買いに行ってくれないの？」

「それじゃ楽しみが半減しちゃうでしょ？」

「まあそっかあ」

「あと、包み紙の大きさが『手のひらサイズ』が条件らしいわよ？」
「うんわかった、がんばってみる！」

こうして今年は別の意味で悩めるクリスマスになりそうだ。

おそろい王子

いつの間にかやら『召使いコンビ』の間で決まっていた4人での『クリスマス会』。

やばい、待ち合わせ時間の30分以上も前に来てしまった。これではめちゃくちや張り切ってるみたいデハナイカ。

集まってきたのは私服で着飾った女子2人（プラス野郎が1人）。レイちゃんはサンタのコスプレだ。ヤバいかわいすぎる！ヒメはさすがにコスプレではないが、でも普段の制服や部活姿とは違う雰囲気ですごい狂うな。

いつも話しているようなメンバーなのに、いつもとはなんだか違う気持ち。あれっこれっでもしかして合コンとかいうやつ？って見当違いな勘違いをしてしまうほど、意識すればするほどなんだか緊張してくる。

パーティーはレイちゃんの家で開かれた。レイちゃんのお母さんお手製のチキンはめっちゃめっちゃ上手かった。もちろん手作りのロールケーキも用意してくれていた。わざわざサントラの砂糖漬けまでのつけてくれる。これで会費はタダっていうのは申し訳ないな。

その後にはゲンキのアホ企画が待っていた。と言ってもトランプの大富豪で大貧民になったらモノマネ披露というありきたりなものだったが、これがけっこうおもしろかった。

「じゃあ最後にプレゼント交換しようぜい!!」
「酒も飲んでないのにゲンキのテンションはいつにも増して高い。」

「全員目をつぶって、プレゼントを手渡しで交換し合ってください」

なんだか今日一番のドキドキだ。

「ストップ!さあ中身を開いて」

中身を見た瞬間、オレは思わずつぶやいてしまった。

「かっけえ。」

オレンジ色のリストバンドだった。

おんなじようにすぐさま「かわいい」という声を上げた人がいた。

ヒメだった。手にはピンク色のリストバンドが握られている。

あ、オレが選んだヤツだ。

「おお!オージとヒメちゃんの、おそろいじゃん!レイちゃんどっちかあげた?」

「いやあ、アタシもさすがにクリスマスプレゼントでもバスケットとは考えてなかったなあ」

「という事は『両想い』ってことですかなあ」

ゲンキのにやにやがいつにも増してうぜえ〜

「うるせえ、オシャレでも全然イケルと思って買ったんだよ。わり

いかよ。」

「そ、そうよこんなただの偶然だわ。」

しかしゲンキとレイちゃんのにやにやは止まらない。

「オレはちょうど新しいリストバンド欲しいって思ってたんだよね。ありがとさん。」

「こっちこそ、なんかこういうのわざわざ自分で買うほどでもないとか思ってたしい、ホント助かったわ、ゲンキくん、レイ、クリスマス会開いてくれてありがとね。」

「まあそういうことにしておきますか。」

「そうですね、『メイド長』。それにしてもオレンジオージの『オジオジ』と、ピンクだから『ピーチヒメ』か。なかなかいい感じじゃない」

こうして聖なる夜に愛ではなく、また2つ、余計なあだ名が生まれたのであった。

リバウンド尽くしの冬姫

クリスマスの浮かれムードも24日でキレイに終わり、翌日からまたバスケットの日々が始まるうとしていた。

「やっぱヒメのリバウンドはダメね。」
その一言が、この冬合宿のレイからの第一声だった。

全体練習が終わった後はひたすらリバウンドの練習だった。なんとあのイシちゃんからもいろいろ教わった。マッチアップした時はただ力任せのパワープレーヤーだと思ってたけど、実際教えてもらったならスクリーンアウトのときの体の入れ方や、ジャンプのタイミングなど、多くのことを学ばせてもらった。

しかしゴール下ってのはハードだ。男女のPFとC組がそろって、ゴール下シュートからの流れでリバウンドの練習をするのだが、なにせ当たりがめっちゃめっちゃ激しい。あたしはミスズとペアになってイシちゃん、ジョーさん、カズキくん、ミノルくん和张り合うことになるのだが、それでも吹っ飛ばされることなんてざらだ。

生傷の絶えない日々が続いた。

正直くじけそうになったこともあった。

しかしカズキくんはあたしの何倍も激しくしごかれていた。あんなにフォワードとしては活躍しているのにそれでも足りないものはあるみたいだ。それだけ、ポジションが変わるといことは大変なん

だと思った。

ミスズだってあたしより一回り小さいし、男子相手だとそれ以上に体格差があるのに全然気持ちで負けていない。

「わたくしこつ見えて負けず嫌いですの。」

その言葉のとおり、練習では一步もひかず何度もぶつかっていた。

なによりジョーさんに言われた言葉があたしの中では響いていた。

「いくら名シューターでも半分ははずす。それを最後にリングに押しこめるか、逆に阻止できるか、それを握っているのがリバウンドだ。つまりオレ達のせめぎ合いがそのまま勝敗を握っているともいえる。」

その言葉の意味、重みはあたしでも分かった。

「リバウンドを制する者はゲームを制する。」まさにその通りなのだ。

決して口数の多くないジョーさんとイシちゃんだったが、そのプレーから気構えとか役割の重要性を学ばせてもらった。

もちろんシュート練習もかかさずやった。なにせ合宿中なので時間は腐るほどある。

「シュート練習なんてたいして疲れないでしょ。」
というキャプテンの鬼命令により、延々とシュート回数を重ねるのであった。

新年早々全開王子

年末の1週間は合宿でみっちりしごかれる毎日だった。

ようやく大晦日と元日は『帰省』が許され、こたつの中でまったりのんびり紅白やらお笑い番組やらを見て過ごした。

そして1月2日。

再び学校に集合をかけられる男女バスケット部の面々。

年が明けてもしごきが休まることはなく、むしろよりいっそう激しくなっている気さえした。

この冬合宿では個人練習だけではなく、積極的に3on3が展開されることになった。

まずPGであるソーマさん、アキヒト、レイちゃんのいずれかがチームに入り、SG、SFが2人ずつ入る。

これをいろんな組み合わせで10分間でメンバー交代、それを30分2セットで行うのだった。

正直言って人数が少ない分、ボールが回ってくる回数が多いので体力の消費量がハンパない。

この極限の疲労感の中でいかに自分の持ち味を發揮できるかが試されるのだった。

ここで個人練習でかなりサマになってきた、ストップ&ジャンプシュートを披露したいところだ。がしかし、当然マークがあるのでそう簡単には打たせてくれない。

「タイガ、特訓の成果さつさと見せてみる！」

「あい！」

鬼バージヨンのコハル先輩はもう女子相手でも容赦なかった。

「アカネ、こんぐらいでへばってシュート外すようならSGやめちまえ！」

「いえ、決めます！」

「アキヒト、パスばつか出してないで自分からドリブルで切り込んでかないと他のヤツがマーク崩せないだろうが！」

「はい、がんばります！」

この特訓にはもう一つの意味合いがあるそうだ。それは『対応力』。どのポジションの選手とともに、どんな選手と組んでも呼吸を合わせられるような視野の広さと臨機応変の能力を身に付けるといふ狙いがあるらしいのだ。

こうしてバスケットに明け暮れている間に、あっという間に新学期を迎えることとなった。

2月13日にあれこれ悩む姫

女子にとって悩ましい時期がやってきた。

「もう、どうしようどうしよう」

「なによがるさいわね、どうしたっていうのよ？」

「だってレイ、明日はバレンタインだよ？」

「うん知ってるよ。それがどうかした？」

「誰にあげればいいのよ」

「誰ってヒメには『王子様』^{タイガくん}がいるじゃない」

「はあ？それは100パーありえない！ずえつつつたいそれだけはイヤ！」

「じゃあイベントスルーしちゃえばいいじゃん。」

「それは女の子としてどうかなって思うのよね。」

「そういうとこホント乙女だよね」

「ねえ、レイはどうするの？やっぱりゲンキくんにあげるの？」

「まさか。アタシはちゃんと『お世話になった人』にあげるつもりだよ。」

「え、だれよだれよ。」

「そんなの決まってるじゃない。」

「もう、もったいぶらないで教えてよ。」

「男バスのみんなよ。」

「え、なんで？」

「考えてもみなさいよ。5人しかいないウチらがゲーム形式の練習とかできてるのって男子のおかげなんだからね。これはチョコの1つや2つはあげるわよ。」

「そっか、そうよね。ねえ、それあたしも一緒に手伝っていい？」
「もちろんいいわよ。あ、でもタイガくんの分だけハート型にする
んだったら、それはみんなと別のところで渡してよね。」
「そんなもん作るか　　！！！！」

苦甘王子

練習が終わった後、コハル先輩がみんなを集めた。手に持っているのは大きな包み。それはもしかや？

「今日はバレンタインということでもみんなに手作りで作ってきました。去年はちよつと形だけ失敗しちゃったんですけど、今年は見た目も味もバツチリです。」

チョコレートだあ。バレンタイン万歳！！！！

たしかにかわいくラッピングされた中にはハート型のチョコがいくつも入っていておいしそうだ。

でもなぜか、ソーマさんとジョーさんはもらったチョコをこっそりイシちゃんに渡している。もしかして二人とも甘いもの苦手なのか？

その行動の意味はチョコを口にした瞬間知ることになる。

一瞬、これまでの辛い練習とか、大敗を喫したあの決勝トーナメントの思い出がよみがえってきた。そして口からナニカがでそうになるのを必死でこらえた。

「おいしいですか？」

「うん、今年もまいっ」

イシちゃん先輩ツワモノ過ぎです…

オレも含めた1年連中はなんとか1個だけは胃に流し込んで、あと

はバックにしまいこんだ。

「あの、もし良かったらなんですけど。」

あれ、レイちゃんとヒメじゃないか。どうしたんだろ。

「アタシ達もいちおうチョコレート作ってきたんですけど食べてもらえますか？コハル先輩の後でホント余計かもしれないですけど。」

今の惨劇をはた目からではわからないので、本気でそう言っているようだ。

「そんなことないよ、喜んで食べさせてもらうよ！」

すかさずソーマさんがそう答える。ズリィ、さてはコハル先輩の『アレ』を知っていたな！？

もちろんオレ達もいただきましたよ。たぶん普段だったらそこそこウマイなってレベルのおいしさだったんだけど、今のオレには高級フランス料理店のデザートでも食べてるような幸せなひとときを過ごした。

この時ほど女バスっていいなって思ったことはなかった。

今年の春はどこに行こうか姫

季節はもう春はなりかけていたことのこと。

「遠征に行くわよ！」

突然、レイから告げられた。

「ちょっとあたし達には早すぎるんじゃない？」

「ヒメ、そんな弱気なことじゃ。次入ってくるコーハイにスタメン取られちゃうぞ？」

うっ、あたしが気にしているところを的確についてくるっ。

「おもしろそうですわね。楽しみです。」

ミスズ、あなたはなんでそんなにポジティブシンキングなのよ。

「アタシは大賛成だよ。思いっきり暴れまわってやるうじゃないの！」

アカネは超強気だ。バレンタインでカズキくんといいいことでもあったのだろう。

「強い相手とやれるならどこでもいい。」

サアヤさん、いつも通りなストイックな意見ありがとうございます。

「よし全員一致で決定ね。来週新潟に行くからよろしく！」

いや、『全員』ではないですけど！でもこれも強くなるため。あたしだって負けない！

「今日はよろしくお願いしますー！」

「いえ、こちらこそドンと胸を借りるつもりでかかってきてくださいね！」

「さっきの自信過剰なのはPGの千夏よ。発言に負けず劣らずの名プレーヤーだから要注意ね。」

あたし達は軽くウォーミングアップをした後、作戦会議に入った。

「ちなみに今日のスタメンは日程の関係で、相手も全員が一年生よ。それでも手強い相手だつていうのは覚悟しておいてね！」

まずあそこで淡々とシュート練習をこなしているのがSGの秋穂よ。正確なシュートは練習を見てるだけでも伝わってくるわね。

次にSFの時雨よ。気弱な性格しているのとは対照的に、ガンガンドリブルで切り込んでくるから要注意ね。

PF春海はかわいい顔してスクリーンアウトの鬼だからミスズはポジション取り負けないように気を付けてね。

そしてこの冬美。彼女はリバウンド、シュートブロックともに一流よ。ヒメ、かなり厳しいと思うけど気持ちで負けちゃだめよ。」

「わ、わかった。でもそれにしてもなんで他県の選手の情報そんなに詳しいの？」

「千夏とは中学時代の親友でね、彼女の引越しが決まった時にバスケでの再戦を誓い合った仲なの。相手は強豪だけど今回たまたまスケジュールの関係で空いたから、こうして試合をさせてもらえるようになったわけ。とにかく、今日の試合はなんとしてでも勝つわよ！」

「はい！」

序盤からレイと千夏ちゃんとのデッドヒートが繰り広げられた。い

つもはアシストに徹するレイが今回は、10m1の勝負を挑んだり、積極的にゴールを狙いだしたのだ。

その結果は序盤こそほぼ互角に見えたが、後半ベンチ要因のいないウチは勢いが失速し、一方的な試合展開になりつつあった。

あたしはというと冬美ちゃんに完敗した。身長ではあたしの方が高かったのに、オフェンス、ディフェンスともに完全に封じられてしまった。

「「来年の春もどこに行こうか」っていうのはこれで決定ね。」
そうレイが言っている時は、いつも以上に悔しそうな顔をしていた。

お悩み王子

「タイガ、練習終わったらちよつと付き合えよ。」
そう言ってきたのはミノルだった。

「ああ。いいけどなに？」

「それはヒ・ミ・ツ」

うぜえ、こついつのはスパツと言ってくれた方がどれだけ楽なことか…

そんで練習後、

「明日は何の日か知ってる？」

「さあ？」

「3日14日だぜ？」

「それが何か？」

「オマエもとことん、にぶちんだなあ。この前のバレンタインでのお返しに決まってるんじゃないか。」

「ああ、そう言えばそんなこともあったかも！」

「よく言うよ。チヨコもらって一番テンションあがってたのお前だろ？」

「…そうだったかも。」

「とういうわけでオレたち3人でプレゼント買に行くというキャプテン命令が出たのである！」

「え、3人てもう一人は？」

「あのおレ、ずっと前から隣にいたんだけど…」

「アキヒトほんとゴメン！ミノルの暑苦しいテンションで全然気づかなかった。」

「こらタイガ、アキヒトの影が薄いなんて言っちゃダメだろうが！」

「んなこと一言も言ってるええよ！」

「タイガくんヒドイです。」

えっ、悪いのオレ？そしてなぜに敬語？

「ほんとタイガってデリカシーとかねえよな。」

「ミノル、オマエに言われたかねえよ！」

「そんなにボクって影が薄いですか？」

「そ、そんなことないって！アキヒトからはオーラがピンピン出てるよ！」

この子普段はしっかり者なのに意外とさびしがり屋なのか？

「タイガくんでもっと気配りの出来る、いい人だと思ったんですけどねえ。」

ああ、なんかスネテらっしやる。

「だからオレはだなあ。」

「いいんだ、どうせタイガくんには今のボクの姿も見えていないんですよ。」

もうだめだ、ナニ言っても通用しないみたいだから心の中でぼやいてみる。

「まあいいです。とりあえずお店行きましょう。」

スネると敬語になるのか、アキヒトってば影がうす…キャラが薄いと思ってるなら意外な一面を発見だ。

さあ気を取り直してお返し選びだ。

「へえ〜どのお菓子もおいしそうだなあ。」

「おいミノル、オマエが食べたいもの探すコーナーじゃないんだぞ？」

「わ、わかってるよ、ただ感想を素直に述べただけであってだなあ

…

「あ、これとかいいんじゃない？」

そう言っアキヒトが手に取ったのは、クッキーの形もラッピングも女の子向けなかわいいデザインのものだった。

「よし、それでけってーい！」

「え、ちよつと簡単に決まりすぎじゃない!？」

「アキヒト、心配するな、オマエのバスケセンスの良さは部内の誰よりも認めてるよ!」

「そうかなあ。でもこれとバスケとは関係ないんじゃない? でもわかった!それならこれにしよう。」

こうして『お買いもの』はほぼアキヒト一人の力によって決められたのであった。

3月14日にドギマギする姫

この前の遠征試合でポッコボコにやられて正直落ち込んでいた。

ああ〜どうしよう、あたしゃやっぱダメダメだあ、あんなに実力差みせつけられたら心折れるっつうの！
なんかイイことないかなあ〜

そんなある日の朝のできごと。

「はいコレ。」

そう無造作に渡されたのはかわいくラッピングされた包み。

渡してきたのはオウジタイガ。

「なによコレ？」

「この前のお返しだよ。」

「ああ、そういえば。」

「か、勘違いすんなよ？ これは男バス全員分のお礼なんだからな。そのお菓子選んだのもオレじゃねえし。ちゃんとレイちゃんにも後で渡すんだからな。ただソーマさんがキャプテン命令で「オマエが同じクラスなんだから渡せ」っていうから仕方なくだなあ」

「わかってるわよ。どうもありがとね。」

「そ、それは男バスのミンナの前で言ってくれ！」

「あれ、オジオジがピーチヒメにプレゼントしてるう〜」
「うわっ最悪のタイミングであの男ゲンキくんが現れた。」

「ゲンキこれは違うんだよ、オレはバスケ部の代表として、」
「いやいやミナまで言わんでもよろしい。ワタクシには全部分かっ
ております。それが『王子様』から『お姫様』への愛の贈り物だ
ということくらい！」

「だから違うって言ってんだろ！」

「そうよ、ただの義理チョコバレンタインの『お返し』なの！」

「なんだなんだ？」

「おっ、またプリプリコンビがなんかやってるのか？」

「だんだんと人がクラスの集まり始めて注目されるあたし達。こうな
つてくるとあたしは恥ずかしくて何も言えない。」

「その後もタイガはゲンキくんや周りのみんなに説明していたけど、
その間あたしはもらった包みをなぜか握りしめたままだった。」

進級王子

今日からオレも2年生だ。なんかそれだけで気がひきしまるよな。

「オージ〜」

って、またコイツと同じクラスかよっ

「なんだよゲンキ」

「いや、呼んでみただけ〜」

「ふざけんな。『オージ』って新しいクラスで呼ばれるようになったらお前のせいだからな！」

「ちよつとつちよつとお、クリスマスよきの『オジオジ』は封印してやってるんだからありがたく思いなよ。」

当たり前だ！そんなふざけた名前では呼ばれてたまるか。しかし今年もクラスに「オージ」が普及しないように尽力するのは大変そうだぜ。

この苗字のせいで下の名前の「タイガ」って呼ばせたがつてる、ただの馴れ馴れしいヤツって思われないうちにもしなきゃいけないから一苦労だ。

ちなみに他に同じクラスになったバスケット部メンバーはカズキ、ミノル、リョウスケ、アキヒト、それに女子はレイちゃん、アカネちゃん、サアヤちゃん、ミスズちゃん。

そしてもう当然のごとくいるのが、そう小泉ヒメ。(つまり同期は全員集合ってわけだ。)

「またあんたあ？」
「そりゃこっちのセリフだよ！」
「もうムダに絡んでこないでよね。」
「オレがいつ自分から絡んだっつうんだよ!？」
「まあまあお二人さん、朝からおアツイこって」
「そんなんじゃないの!？」

こうしてオレの2年生としての新学期はスタートした。

あれよあれよでなっちゃう姫

教室の中はざわざわしている。

新しく担任となった先生が入ってきた。みんな着席。

「はい今から学級委員その他もろもろの役員決めたいと思います。」

するとすかさずゲンキくんが発言する。

「あ、学級委員はオージとヒメでいいと思います！」

ちよつとゲンキくんナニ言っちゃうてくれてんの？

「あ、オレ知ってる。去年のクラスでおまえら2人『プリプリコンビ』って言われてたんだろ？」

「そうそう、文化祭なんか2人で漫才までやってたし。」

「アタシもそれみたあ。チョーおもしろかったよあ。」

「プリプリコンビかあ、それ先生も見たかったな」

おいおい話の流れがよからぬ方向に進んでいますぜ。

「じゃあプリプリコンビでいいと思う人！」

えっちよつと待って先生それはさすがに急すぎやしませんか？

「はい」

クラス替え初日なのに、なにこの団結力！？

「それじゃ学級委員はオージとヒメに決定な。」

「先生異議あり！」

「なんだオージ？」

「『オージ』って呼ばれるのキライなんで下の名前で『タイガ』って呼んでください！」

そっちかい！

かと言ってこの空気の中自分で発言する勇気があるはずもなく…

こうして今年も、アイツとコンビを組まされるハメになったのだっ
た。

センパイ王子

ついにこのときがやってきた。人から『センパイ』と呼ばれるその日！

部活の練習前に集まった一年生にソーマ先輩が声をかける。

「じゃあ一年生、軽く自己紹介してもらおうか。」

「はたけやまエイジ 畑山瑛二つて言います！身長は185センチです！中学の時もずっとやってたんでSFやらしてください！」

うん、髪も短く、なかなかの好青年だ。

続いては長身の割に細身の彼だ。

「ならはしアキラ 榎橋彰です。身長は195あってC希望です。体の強さなら誰にも負けません。」

いやその細そうな体で言われても説得力ないよ…

「いとうマコト 伊藤誠。174センチ。とりあえずはPG狙ってますけどシュートも結構いけます。」

おっ、おとなしそうな顔してなかなか強気なこと言う子だなあ。

そして最後はコイツ。鋭い目つきと、しなやかな髪が威圧感を放っている。

「ひらばやしカツトサ 平林勝久。身長は188。SF希望です。」

随分、無愛想なヤツだな。ていうかコイツもSF希望？しかも二人ともかなり身長高いし… せっかくカズキがCにコンバートしてくれたつてのに、まだまだオレのスタメンへの道は険しそうな予感がするぜ。

まあこれでビビってたらオトコがすたるってもんだ。ドンとこいよ、1年ども！

「ウチは人数も少ないしキミらも即戦力になることもあるだろう。だから1週間体力トレーニングこなしたら、その後はドンドン2、3年のメニューに混ぜてもらうつつもりだからよろしく！」

「うつす！」

なかなか気の抜けない新学期が始まったようだった。

シックスマンのピンチの姫

放課後体育館で練習していると1年生らしい子達が顔をのぞかせていた。

「キミたち女バスの入部希望者？」

「はい！」

ついに『センパイ』になるのかあ、いやあなんだか嬉し恥ずかしだな。

集まったのは3人だった。

「3人とも経験者？」

「はい！」

「じゃあ軽くアップしたら、せつかだから3on3でもやりますか。」

思い立ったら即実践。展開が早いというか、レイらしいな。

メンバーを入れ替えながら30分ほどゲームをすると、レイが思い出したように言った。

「あ、自己紹介してなかったね。」

遅っ！

ここでようやく、新2年生のあたし達の名前とポジションなんかを話し出した。

「次は1年生の番よ。」

まずは背も髪もロングな彼女。

「南野みなみの雫シズクつす。あつヒメさんて何センチつすか？」

「…181センチだけど。」

「自分身長は178センチつす。ポジションはC希望なんで3センチの差くらい技術で軽く埋めて、ヒメさんにはシックスマンになつてもらおうと思います!」

い、言つてくれるじゃないの、1年の小娘が。受けて立ってやるうじゃないの。

続いてはセンター分けの髪と、切れ長の目が特徴的な子だ。

「初めまして、優木ゆうき藍華アイカと言います。身長は172センチです。中学の時のポジションはPFをやっていました。」

礼儀正しい子だな。うん、やっぱりコーハイってのはこうでなくっちゃ。

最後はちっちゃくてツインテールで、まだまだ中学生みたいなきらきらの目をした女の子。

「朝影あさかげ陽奈ヒナ、ポジションはSF希望です。155センチですが、デカいだけの人には負けません!とりあえずヒメさんからスタメン奪いたいと思います。」

マジか、またもやあたしを補欠にしようと企む輩が一人。

そこでレイがつっこむ。

「ちょっと待って、それはポジションとかの関係からしてイロイロおかしいでしょ」

「さっきの練習とか見てて、ぶっちゃけゴール下はミスズさんがいれば十分だと思っんです。あたしはスピードバスケにカタルシスを感じるんですよね。あたし、きつとレイさんの速いパスにもきつと対応してみせます！」

「ふう〜ん、それはおもしろそうね。まあキャプテンはアタシだから、使えるとおもったらその起用もなくないわね。」

ええ〜レイさんそれはないでしょお。でも実力によつてはいたしかたないか…いやいやそんな弱気でどうするヒメ！負けるなヒメ！

声に出さず、一人心中で自分を励ますのであった。

浮かれ王子

実は男バスの顧問の先生だった歴史の木島先生は、今年で定年退職だったのだ。

さて、これで新しい顧問を見つけなければならぬという問題が発生したのだが、これはあっさり解決した。

「今年から翔泉高校に転任してきました、黒谷美幸くろたけみゆきです。今日から男子の顧問になったんだけど、あと女子の練習も一緒に監督することになったから。両方とも初日からバンバン指導していくからよろしくね」

そうやって現れたのは見た目は30歳前後でけっこうキレイな先生だった。

全員ウツキウキである。

「やった、念願の顧問だー！」

「しかも『お飾り』じゃなく監督やってくれるっていうんだからサイコーだぜ。」

「これで美人だし言うことなしだな！」

「カズキ、そんなこと言っているとアカネちゃんに怒られるぞ？」

「だいじよぶだつて。それに、彼女がいるとかは関係ないのだよ。」

それはそれ、これはこれだよお子様タイガくん」

「誰がお子様だー！」

そうやって浮かれていた男子諸君は練習1日目でその認識の甘さを痛感する。

「ほらー、そこ手え抜いてないでもっと走る！」
「だあ〜どうしてそこでシュート外すかなあ、罰として腕立て30回。」

絵にかいたようなスパルタ特訓が開始された。

今までの練習もきつかったが、監督初日ということもあって黒谷先生のテンションはマックスで加減というものを知らなかった。

けっきょく、部員全員が心身ともに追い込まれた一日となった。

練習が終わって黒谷先生が帰った後、コハル先輩がボソツと言った。
「これで監督の後継者問題は無事に解決しました。これで安心して次世代にバトンを託せます。」
仮にも顧問の先生をそんな上から目線で片付けますか…
コハル先輩、オレが思ってたよりだいぶ肝っ玉の強い女の子らしい。

でもこの言葉の中には、自分たちの代では全国出場できないんだという悔しさと哀愁もこめられていたような気がした。

鬼のしごきに負けない姫

黒谷先生のスパルタ特訓は女子に対してもそれは変わらなかった。まだバスケ歴1年のあたしにも当然のごとく容赦はない。

3on3では何度もサアヤやヒナにドライブで何度も切り込まれてしまった。

「ヒメ、あんた抜かれ過ぎよ。Cなのに全然ゴール下守れてないじゃないの！」

そしてシズクとのゴール下争いではことごとく負けていた。

「なにやってんの、自分より身長の高い相手に簡単にリバウンド取られていいと思ってるの？」

あんたこの1年なにやってたの？」

最後の言葉はずしりと効いた。

自分では一生懸命この1年がんばってきたつもりだったのに、それをあっさり否定されたようで悔しかった。自分の今までの努力を簡単に流されたようではらが立った。そしてなにより、それが真実だと分かっていたから何も言い返せなかったのが余計にみじめだった。

だがその夜は泣かなかつたし、落ち込みもしなかった。それは今まで散々経験してきたことだったし、今さら何も失うものなんてないって言う開き直りだったのかもしれない。だからなのか知らないが、次の日の練習も罵声を浴びながらも練習をこなしていったのであつ

た。

スネ王子

「めっし めっし 三度のメシよりうまいめっし」

この、謎の歌を歌ってるのはミノル。

そう、今は昼休みだからアイツほどじゃないにしてもみんなウキウキ気分なのだ。

「リョースケく〜ん、今日はどんなお肉が入っているのかな〜？」

「言っとくけどミノル、オレの弁当にどんなもんが入ってしようと、オマエの腹にはおさまらねえよ。」

「うわ〜相変わらずキツ〜イっつこみですな。」

2年の新クラスになると自然と、こうして男バスでメシを一緒に食うという流れになっていた。

ちなみにカズキとアカネちゃんは2人で毎日ラブラブランチだ。

いつもはバカ話ばっかなのだが、監督も入って気持ちも引き締まったのか、今日の話題はバスケットのこと。

「なあ猛将の強さハンパなかったよな〜。」

「ホントだよ、どうすりゃ倒せるのか全然ビジョンがわかねえ。」

「うわっ、ドリブルバカのタイガさんが『ビジョン』とか言ってますぜえ。」

「うるせえジャンプバカ！」

「でもその気持ちわかるぜ。オレはシュースケ先輩の代が中心のチームとも戦ってたけど、はっきり言ってあれ以上だった。この部活

には足りないものが多すぎる。」

「たとえば？」

「絶対的司令塔の不在とかな。」

「くっそ！」

「わりいアキヒト、別にお前のこと責めてるわけじゃないんだ。」

「うん、分かってるよ。でも高校から初めてバスケットやったソーマさんを超えられない今のオレじゃ、チームになんの力にもなれないのが事実だよ。」

アキヒトが悪態つくのも悔しそうにするのもこの時初めて見た。

「そういえばずっと気になってたんだけどさあ。オレの年の離れたバスケットだった兄ちゃんがいるんだけど、兄ちゃんが言うにはここいらじゃずっと精機高校が絶対王者だったって聞いたけど。」

「それが猛将は、去年監督が変わってから強くなったらしい。選手を活かすのが異様に上手いから、選手が最大限に個性発揮してるしな。あれを倒したシュースケ先輩たちはホントすごい一言だよ。一緒にプレーしてるときは気づかなかったくらいにな。」

「あと、去年3位だった高校も夏の大会と違ったよな？ たしか彩色学芸高校だったっけ？」

「あ、それウチの姉ちゃん行ってるよ。元々ベスト8ぐらいの実力はあったらしいんだけど、なんかそっちは3年前に監督変わってから急に強くなりだしたらしいよ。」

「ふっん、監督ってやっぱ大事ななんかもな。」

ここでミノルの発言で話はそれていく。

「ていうかタイガ姉ちゃんいんのかよ〜いいなあ〜。オレなんて兄ちゃんだから小っっちゃいころからパシられたりとかばっかだよ〜。」

「ふ〜ん。」

「交換しない？」

「いみわかんね〜。それに姉ちゃんつつつても結局いじめてくんだぞ?」

「まじかよ〜。女兄弟憧れあつたのにな。」

「まあ今その幻想が崩れて良かったな。」

「そつえばリヨウスケつて兄弟とかいんの？」

「オレ? 2コ下の弟一人だけど。」

「お、もしかして翔泉バスケット部に入ってきたりする？」

「さあ、それはわかんねえなあ〜あんま話ししないし。」

「ぜつたい来てくれるように推薦しとけよな！」

「なんでだよ？」

「だってソツクリかどうか見てみたいんだもん。」

あれ、会話に参加してない子が約1名。

あつ忘れてた…

「えつと、アキヒトは兄弟いる？」

「…一人っ子ですけどどうかしました？」

さすがのミノルも言葉が出てこないでいると、

「いいですよ、どうせボクは兄弟もいないようになつまらない人間ですから。」

そのあと、普段取り乱さないリヨウスケも含めての3人でアキヒトをなだめるのに昼休みの残り全部を使ってしまったが、しょうがな
いか。

コーハイを陰で支える姫

今年も夏の地区予選が始まった。

「せっかく補欠メンバーもできたんだし、体力とか気にせず全力でぶつかっていいからね！」

「はい！」

黒谷先生からスタメン発表を告げる

「今日のスタメンはレイ、アカネ、サアヤ、ミスズ、シズクでいくわよ！」

「はい！」

つて、あたしは補欠か〜！

まあ1年がんばったとはいえ、中学までみっちりバスケットした人にはそう簡単には勝てないか。
でも悔しい〜！！

しかし試合が始まると自分がちょっと自信過剰になっていたことに気付く。

レイはインサイドのシズクにボールを積極的にボールを集め、ゴール下から確実にゴールを量産していた。

ディフェンスの際にもシズクの動きは絶好調だった。相手がシュート態勢に入るとありえないくらいの反射神経で跳びついて、シュートブロックを決めていた。

しかしかなり攻防ともにムチャな動きばかりするのでスキが多くなっているのも事実だった。でもそこはミスズがうまくカバーしてその穴を埋めていた。力技だけじゃなく、こういう細かいこともできるところはさすがというしかない。

シズク投入によるチーム力の大幅なパワーアップにより（言ってる切なくなるなあ）、40ー21で大きくリードして前半を折り返した。

「うん、思った以上に大きくリードできたみたいね。それにしてもシズクいい動きするわね。」

「あざーす！」

「よし、後半からヒメと交代よ。」

「えっ、なんでっすか!？」

「だってあんたバテバテじゃないの。」

「そんなことないっすよ、まだまだ全然いけます。」

「自分の疲れに気付いてないなんて3流プレーヤーもいとこね。」

「うっ。」

黒谷先生キッツ

「それとミスズもかなりフォローで疲れてるみたいだからアイカに代わってもらいませよ。」

「はい。わかりましたわ。」

「そう、こうやって素直に認めることも大事なのよ、シズク。お分
かり？」

「…はい。」

黒谷先生となにか約束でもしたのか、後半になってもレイはあたしとアイカにボールを入れて、徹底的にインサイド勝負に持ち込み、その期待に応えられたかどうかわからないが見事に勝った。

続く2回戦。

「今日はレイ、アカネ、サアヤ、ミスズ、そしてヒナでいくわ。」
「またしても補欠…」

ていうかこのポジションの偏ったメンバーで大丈夫なんだろうか？
そんなあたしの疑問をアカネが代弁してくれた。

「あの、ほんとにこのメンバーでやるんですか？」
「えっだっておもしろそうじゃん？」

この人はどこまで本気なんだろう。

ヒナは自分でスピードバスケットを自負するだけあってドリブルのスピードもかなりあるし、パスを出すタイミングもかなり速い。

それと異様に燃えている人がもう1人。

サアヤだ。前の試合であまり活躍できなかったうっぶんを晴らすように、ヒナとダブルSFとして見事な連携を見せて得点を稼ぎまくっていた。

しかしこれで大変なのはミスズである。サアヤはともかくヒナはけ

つこうシュートを外すのでリバウンド勝負を一人で何度もさせられた。

「派手でかなりおもしろかったけど、さすがにミスズも限界ね。後半からヒナも抜いてヒメとアイカ入れるからよろしく。」

「はい！」

「あたしまだ全然イケますよ!？」

「ヒナ、あんたもバカ? どんどんスピード落ちてくるわシュート入らなくなるわ、自覚ないっていうの?」

この一言で完全にヒナは黙りこくってしまった。

さらにここで不服そうな顔をしてシズクが抗議する。

「あの、ヒメさんじゃなくてアタイじゃだめなんすか?」

「あんたみたいなめちゃくちゃプレーに大事な後半任せられないわ

よー!

「…はい。」

後半はアイカと一緒にインサイドを手堅く守り、前半のリードもきいたのもあって勝つことができた。

この2試合を通して思った。

よかった、あたしもまだまだ全然やっていけるみたいだ。

汗と涙の王子

ダムダムダム

キュッ

シュパッ

「イエー、まずは2ポイント」

「そんなのすぐに取り返してやりますよ！」

ここ、翔泉高校の体育館では来たる地区予選に向けて、『SFスタメン争奪戦』なるものが繰り広げられていた。

その方法とはずばり、エイジ、カツヒサ、オレによる『1on1』
総当たり戦。

選抜方法はスコアだけでなく、その様子を黒谷先生やコハル先輩がチェックし、今度の試合のスタメンを決めるというものであった。

こちらら念願のスタメンがかかってんだ。そうやすやすと負けるわけにはいかねえな。

さて、1年生君のお手並み拝見といこうか。

エイジはなかなかプレーの幅も広いしボールハンドリングの技術は認めるが、それじゃオレは抜けねえよ？まだまだ『中学レベル』っ

てのがプレーににじみ出てんなあ。青い青い。なんたってオレはこの1年で一流選手のドリブルを何度もDVDで研究し尽くしてきて、それに対するディフェンスも日々実践してるんだからね。

カツヒサはドリブルの突破力はなかなか目を見張るものがあるが、それだけだな。なんか昔のオレを見ているようだぜ。動きが単調すぎて手に取るように分かるつつうの！

「っしやあー！ー！！！」

見事オレが優勝した。スコアもエイジ相手に18 - 12、カツヒサに至っては22 - 10だし、これは文句なしだろ！

「よし、次のSFのスタメンはカズキで行くか。」
「そうですね。」

えっ？

ちょっと待ってよ、お姉さん方…

それはあんまりじゃないですか…

こうしてオレの1年間の思いが詰まった努力と純情を兵器で…じゃない、平気で踏みにじった魔女2人であった。

放課後ティータイム姫

3回戦の相手はお茶の時女子高校というところらしい。なんでも創部2年目だというから、ウチと一緒じゃないか。

勝手なイメージだが、さぞかしお目の高いお嬢様方がそろっているだろう。そんなところに負けるわけにはいかない。

会場に入ると、黒谷先生が相手選手を堂々と指を指しながら説明しだした。

ちなみにお茶女高校のみなさんというと、仲良くお紅茶を飲んでいらっしやる!?

「まずはPGのユイ。ほんわかしたちよつとゆるめな子だけど、試合に入った時の集中力は相当なものよ。」
あれ、雰囲気がちよつとあたしのイメージしたのと違う? でもほんとだ、先生の言うとおりなんか動きがふわふわしてるよ。

「続いてSGのミオ。はずかしがり屋だけどシュートの時は冷静沈着に決めてくるわ。」
いや、「はずかしがり屋」の情報はいらんでしょ。

「それからPFのムギ。見た目がおっとりしてるからって油断しちやダメよ?」

でも一人お嬢様オーラが出てる子がいた。どうやらこっちも生粋のお嬢様、ミスズの相手になるようだ。

「そしてこのりっちゃん。そんなに大きくはないけど強敵よ！ヒメとシズクは覚悟しておいてね。」

「あの、あだ名で紹介されてもテンションていうか、士気が下がるとはんですけど…」

「だって資料にそう書いてあるんだもん。」
「さいますか。」

「それとSFのあずにゃん。一年生ながらエースをつとめているわ。」

「え、なににゃんだって？もういいや、とりあえずがんばろ！」

「それじゃいくわよ！」

「はい！」

負けた。

ボロ負けだった。

普段は騒がしい面々だが、試合が終わったあと誰も口をひらかななかった。

これからまた戦うことになる、そんな予感だけがした。

肩慣らし王子

「デューフェンス！デューフェンス！」
何回なつてもスタマン落ちてくやしー！！
もうこれは恒例行事になりつつあるな。

試合はオレの出番が必要ないほど（？）、一方的な試合展開となっていた。相手はたしかにベスト8にあがってきただけはある実力校であるが、それでも攻守ともにウチが圧倒していた。

3年生は特に最後の大会とあってその意気込みは尋常じゃなかった。ソーマさんはこの日も冷静に、的確に、そして素早く味方にパスを送る。

またもやジョーさんのシュートブロックが華麗に決まる。

そしてイシちゃんの豪快なダンクでリングがきしむ音が会場に響き渡る。

前半はスタメンだけの活躍で20点差まで差が広がっていた。

「後半アンタ達出すけど、これで点差縮められるようだったら家までランニングだからね！」

コハル先輩のプレッシャーもいつも以上に絶好調みたいだ。

「うすー！」

とは言ったものの、一年も含めての総入れ替えに若干の不安もなくはない。それを見透かされたのかどうかわからないが、ミノルがこちらの顔をにやにやしなからのぞいてきた。

「おいタイガ、新人戦ときみたく緊張してんじゃねえぞ？」

「うっせえミノル！言っとくがオレはとっくに臨戦態勢入ってつからな！！」

「ほえ〜成長しましたな〜。」

「あ、疑ってんだろテメエ！　っっていうかマコト、アキラ、お前からこそ高校の初試合でテンパったりしてねえだろうな！？」

「タイガさんほどじゃないっすよ。」

「オレもっす。」

言ってくれるじゃないか、まあ頼もしい限りではあるが。

実際試合が始まってみると、我ながらその言葉にウソはない結果を出せたと思う。

アキヒトからのパスを受けた関係プレーはハマリ、SFらしく何度もシュートを決めた。

今回はしっかりディフェンスも機能できていたと思う。

さらに終盤ではカツヒサとエイジも投入し、フォワード力を高めてさらに得点を引き離しにかかった。

プー

後半でさらに10点差をつけて、試合は圧勝に終わった。

とは言っても、前半で勝負がついていて相手チームの士気が下がっていた感も否めないが。

とにもかくにも、なんとか罰ゲームのランニングを免れたオレ達は、清々しい勝利の余韻に浸っていた。

「浮かれてるんじゃないぞ！」

そんな1、2年の気持ちに気づいているのか、試合後のミーティングではソーマさんはいつになく厳しい声を出していた。

そうだ、これからが本番だ。3年生を中心として決死の、しかし絶望的な戦いが始まる。

その目に刻んでおく姫

男子はいよいよ決勝トーナメントに進出だ。黒谷先生の提案で、あたし達はそれを応援しに行くことになった。

あまりにもあつさり負けてしまつて気持ちの整理のつかないあたし達の気分転換でもあるそうだ。

しかし当日になってみるとその悔しさもなんのその。なんだかみんな浮かれて遠足気分。レイがみんなのお菓子チェックを始めた。

「アイカ、それなあに？」

「塩キャラメルクッキーです。」

「おいしそ、一枚もくらい。シズクあんたやたら荷物多いわね。」

「そうっすか？」

「なに入つてんのかなあ？」

カール、じゃがりこ、かつぱえびせん、カラムーチョ、とんがりコーンつてアメリカ人か！

どんだけスナック好きなのよ。

「どれどれミスズは？」

「わたくしはたいしたものじゃないんですけど。」

いやいやいやいや、あなた見たこともない高級そうな包みを手にしているんですけど。

「さすが格が違うわあ。あとでちょうだいね。」

「もちろんですわ。」

そう言つてる間にも、サアヤは一心不乱に食べてる。なにをって、ピノ、パピコ、アイスの実、爽、そしてガリガリ君…

「ただ「冷たい女」なのよあんた。見てるこっちが寒くなるわ！」

「ねえアカネはお菓子な持ってきた？」

「ん〜とね、つぶつぶいちごポッキーとお、ハイチュウイチゴヨーグルト、きのこの山いちごシヨコラ、あとはアポロ。」

「いちごばっかりやんけ！」

「そういうレイは？」

「あたしやミルクチョコレートとミルククッキーとミルク〜！」

「…別にそれ食べても背は伸びないと思うよ？」

「そんなんじゃないし！ただ好きなだけだもん〜！」

「なんかレイちょっとかわいいっ」

「気が合いますね、レイさんあたしも同じです！」

ヒナ、おまえもか。

「そついやヒメは？」

「え、あたしはのり巻きせんべえと酢昆布。」

「なにそれ、おばあちゃん？」

「色気なさすぎ〜あははは」

「ほっとけ！言っときますけどどっちもめっちゃおいしいんだからね！」

「はいはい」

最初はどこか楽しげな雰囲気もあったあたし達も、試合が始まるとそれが一変した。

まずそのプレーの激しさに圧倒されてしまった。

ドリブルであつという間にコートを駆け上がったあと、激しいゴール下での攻防からの華麗なシュート合戦が繰り広げられている。

これが全国をかけた戦いつてやつか。

翔泉高校も3年生をはじめ全員がこれまでにないくらい、いいプレーしていた。もちろん前からすごいとは思ってたけど、改めてウチの男バスの強さを知った。

あたし達も少しでもその力になれるように必死に声を出して応援していた。

しかし健闘むなしく結果は3戦全敗。

最後の試合が見終わった後は、みんな口数少なかった。

「すごかったね。」

「うん。」

そう言っただきり全員がまた黙る。その沈黙の中誰かがつぶやいた。

「遠いな…」

あんなに強かったセンパイはもういない。

男女の違いはあれど、改めて高校バスケットの厳しさを感じた。

それは男バスの前途多難な道を示しているようにも感じられた。

頼りになるセンパイはもういない。

タイガたちうまくやっていけるのかな？

あたし達もたくさんお世話になったなあ。

あたし達が引退した時にはこんな風に思ってもらえるようになるの
であろうか。

そんな、いろいろなことを考えさせられる数日間だった。

寄せ書き王子

試合の終わった次の日の送別会で、オレ達2年から引退する3年生にメッセージを書いた色紙を渡した。

「おまえら……」

そう言ったきり、ソーマさんは言葉が出てこない。ジョーさんは表情が固まったままで、イシちゃんは男泣きを始めている。

「あっ、もう一回返してください。今から読み上げますから。」

「アキヒトせんぱいへ　あの天才的なボールさばきにいつもびっくりして動けませんでした！　ミノル」

「ふっ、なんだよそれ。」

うわっ出鼻からムードぶちこわしな内容ブっこみやがって！

「ソーマせんぱいへ　そのノリのいいところ大好きでした。練習中でもいつもオレらを楽しませてくれてありがとうございました。タイガ」

「おまえも十分おもしろかったよ。」

「ソーマせんぱいへ　あの試合で不意を突いたパスで相手を出し抜いたあれ、サイコーでした。カズキ」

「ありがとよ。」

「ソーマせんぱいへ　いつもメツチャいいパスくれるのに、オレが全然シュート決めれなくてすみませんでした！　リョウスケ」

「そんなことねえよ。良く決めてくれてたよ。」

「ソーマせんぱいへ プレーでもポイントガードとしての見本を見せてもらいました。今までも、そしてこれからもずっと尊敬します。アキヒト、うっ」

感極まってアキヒトはソーマさんに抱きついた。

「おまえが先に泣くなよ〜」

「うっ、ぐっ、すいません。。。」

「え〜続きまして、ジョーせんぱいへ センパイとコンビ組んで攻めてるときチヨーやりやすかったす！ カズキ」

「ジョーせんぱいへ あの強烈なシュートブロックに何度助けられたかわかんないっす、すごかったです。 リヨウスケ」

「ジョーせんぱいへ いつも縁の下でチームを支えてくれていてかっこよかったです。 アキヒト」

「ジョーせんぱいへ ぶっきらぼうに見えて時折優しくしてくれるの、オレ知ってます。 タイガ」

「ジョーせんぱいへ 絶対オレ、ジョーさん超えるパワーフオワードになってみせます！ ミノル」

ジョー先輩は下唇をかんですつと黙ったまま、色紙を受け取った。

「イシちゃんせんぱいへ まったりしたオーラは部の雰囲気癒してくれました。 アキヒト」

「イシちゃんせんぱいへ その大きな体はゴール下は心強かったです。 リヨウスケ」

「イシちゃんせんぱいへ センターの手本となるプレー勉強させ

てもらいました カズキ」

「イシちゃんせんぱいへ ありえない食べっぷりにはいつも驚かされてました！ ミノル」

「イシちゃんせんぱいへ あの最後の試合での豪快な Dank はたぶんずつと忘れることはないと思います。 タイガ」

オレがそう言い終わったあと、イシちゃんのアツイ抱擁、もとい全カタククルが飛んできて死にそうだった。

「それとコハルせんぱい。」

「は、はい!？」

「コハルせんぱいへ 厳しい指導とかわいい笑顔でいつもオレたちを優しく包み込んでくれてありがとうございました。 リョウスケ」

「え、ええ〜もしかしてわたしの分まであるんですか？」

「当たり前じゃないっすか。せんぱいも『センパイ』なんですから。」

「うつつ、そんなこと言ったら泣いちゃうですう。」

ちなみにコハル先輩はソーマさんの分が読まれるときから一人で大号泣している。

「じゃあ次はタイガだな。よろしく!」

途中で流れが切れたからやりづらいな

「コハルせんぱいへ DVDいつも見てます。オレ、コハル先輩のおかげでスゲー成長できたと思います。ほんとに心の底から感謝

しています。 タイガ」

「タイガくん……」

「コハルせんぱいへ オレ、センターにコンバートしてもらって今すげえやりがい感じてます。絶対このご恩はプレーでお返しします。 カズキ」

カズキ気合い入ってんなあ。

「コハルせんぱいへ いつもオレのことジャンプバカって叱ってくれてありがとうございます！ ミノル」

オマエ最後までバカまるだしじゃねえか。

「コハルせんぱいへ 自分に自信のなかったオレがここまで来れたのもコハル先輩のおかげです。今までありがとうございました。

アキヒト」

最後はアキヒトがきれいにシメてくれたな。

この後黒谷先生もちで派手に焼肉パーティーをして、それを最後に3年生の4人は部活を去った。

新部員追加でテレル姫

「新しい部員を紹介する」

黒谷先生がそういつて現れたのはあたしより少し背の低そうな人影。だいたい175センチくらいか？

またあたしのスタメンへの道が遠ざかってしまうではないか。

肩まで伸びた明るい色の茶髪はキレイで、光を反射してキラキラしている。髪が傷みやすくてショートにしかできないあたしからしたらなんてウラヤマシイ。それにしてもなんでこんな中途半端な時期に入部？まあ細かいことは気にせず、ここは温かく迎えてあげなくちゃ。

「では自己紹介よろしく。」

「はい！まだまだびちびちの15才、菊池真佐美きくちまさえです。よろしくでーす」

ノリ軽っ！

ちよっと一緒にやっつく自信なくなってきたかも。

あたしテンション高い子って苦手なんだよなあ〜

「え〜男の子ということまで皆もいろいろと最初は戸惑うこともあると思うけど、せっかくのマナージャーなんだから優しく迎えてあげるように。」

「はい」

ふうん、マネージャーなのか、ちょっと新鮮だな…

「って男!？」

「ナニ言ってるのよヒメ。見りゃわかるじゃない。」

「だって男バスに女子マネはよくあるパターンだけど、逆はありえないでしょ?」

「偏見だよそれは。せっかく入ってきてくれたんだから大事にしないと。」

「いやムリムリ!全然頭がついていかない!」

いや、落ち着いて見てみりゃオトコ以外のなにものでもないよね。あたしがはなつから女の子の新入部員だと思っ込んでたからどえらい勘違いをしてみました

「ヒメさんておもしろいっすね、好きになっちゃいました」

「へ?」

「良かったじゃん、ヒメ念願の彼氏ゲットできて。でもマネージャー独り占めしないでよ?」

「うっさいアカネ!そ、それに別に今のは告白ってわけじゃないし!」

「ひどいヒメさん!オレの精いっぱい愛の告白をそんな風にスルーするなんて。」

「え、本気なの?」

「当たり前じゃないっすか。ってホントは前からヒメさん見かけて、それでイイなって思ってたんすよ。それで女バスのマネやつてみようかなって思ったんす。」

「いやだってあたしキミより身長高いんだよ?」

「そんなん全然関係ないっす。愛があればそんなん簡単に乗り越えられますから!」

「ひゅ〜ひゅ〜おアツイこって」

「ヒナ、せんぱいからかうんじゃない！」

「これは浮気ですな、さっそくタイガくん^に報告せねば。」

「レイ、なんにも報告することなんてなくいい！それになぜに「タイガに」なのよ！」

「あ、そつだマサミくん^に言い忘れてたけどヒメにはタイガくん^にいう男バスに許婚^{しいいなすけ}がいるのよ。でもがんばって！応援するから！」

「何もかもちつがーう！ 黒谷先生^になにか言っ^てやっ^てくださ^いよお〜」

「まあ部員の這った惚れたにかかわるつもりはないけど、ほどほどにしな。いやあ、それにしてもタイガとそんな関係だったとは意外だな。もてもてのヒメさんは早く結論出して、精々早く三角関係解消しなさいよ？」

もうだめだ。誰もフォローどころかどんどん推し進める気マンマンだ。

「さて自己紹介も終わったことだし、練習始めますか。」

いや肝心の自己紹介は名前くらいしか分かってないと思いますけど？あとはどうしようもなく軽いオトコだっ^てことくらいか。

その日、あたしは気が動転しまくってパスはとりこぼすは、シュートはリングにかすりもしないわ、拳句の果てにはリバウンド取りに^いって顔面でボールキャッチするわ、散々な練習日となった。

バトン王子

3年生の送別会があった次の日に、残されたオレ達1、2年はミーティングに召集されていた。

「昨日までよく戦ったわ、ご苦労様。でもね、あなた達はその余韻に浸っている暇はないの！」

第一声から黒谷先生はかなりキツめなコメントが飛び出した。

「今までのチームに何が足りなかったかわかる？」

誰もすぐには返事はできなかった。これでも、やれるだけのことは精いっぱいやってきたつもりだったからだ。

「それは『経験』よ。」

黒谷先生はそう言って一人一人の顔をじつと見つめる。目が合った時、「やっぱキレイだな」とか不謹慎なこと考えてたけどすぐに気持ちを引きかえた。

「バスケットに限らずスポーツは生まれ持った才能だけでなく、練習や試合で積み重ねられた経験がものをいうものなの。それは中学までの蓄積はもちろんのこと、高校で積み上げてきた一日一日が大事であることは言わずもがな。はっきり言って、これまでのチームで一番の不幸は3年生が3人しかいなかったことだわ。特にソーマくんはあれほどのセンスを持っていてたし、もし中学からバスケを始めていればもっと実力のあるプレーヤーに成長していたのと思うと、残念としか言いえないわね。」

改めてそういう風に分析されると、3年生たちの無念が伝わってくるようだった。

「ソーマくんやコハルちゃん達もそれを痛感して、あなた達に『夢を託したっていうのも聞いたわ。アタシはそれを聞いて、そしてあなた達のプレーを見て確信した。この一年、全員がバスケットにすべてを捧げる覚悟があれば不可能じゃない!」

「それって、ほんとですか?」

「こんなところでウソついてどうすんのよ? ただ、ホントにみんなその覚悟はある?」

「はい!」

すぐに返事をしたのは2年の面々だけだった。

「言つとくけど2年生の5人でも十分じゃないんだからね。今はまだピンと来ないかもしれないけど、1年生にも同じ気持ちがあるのかしら?」

「はい、おれバスケットのために翔泉高校来ましたから!」

「言っね〜マコト〜!」

「すみません、つい感動して泣いてしまいました。オレもやります!」

「よく言った、エイジ!」

「正直3年生の思いとかは半分くらいしか分かってないっすけど、

でもどうせやるなら全国目指したいっす！」

「オレもそんな感じっす。」

「うん、それでいいと思うよ。アキラ、カツヒサ」

「じゃあ早速、その第一歩となる練習始めましょっか」
「うっすー！」

意外と乙女心な姫

男子の方はセンパイが抜けて新チームとなり、ここ最近ハードな練習をこなしている。はたから見てもひとりひとりモチベーションも高く、目的意識を持ってバスケットをしているのがわかる。それに比べて、どうも真剣ムードに欠けているのが女バス。ここ一週間は黒木先生が男子の方につきっきりっていうのもあるけど、このたるんでる雰囲気の原因の8割はコイツのせい。

「チーース！今日も張り切ってバスケットしていきまっしょい」

そう、地区予選が終わって急に湧いて出てきた新人部員、とういか新マネージャーのマサミ。100歩ゆずって「オトコ」ってことは許すとして、あのノリの軽さぐらいはどうかならんものか。なんだよ「バスケット」で。

「ねえレイ、やっぱりマサミくんクビにしない？」

「なによヒメ、珍しく過激な冗談言うじゃない。」

「違うわよ、あたしは本気！！なんか彼が来てからイマイチ部の雰囲気マジメさが足りないっていうか、集中しにくいのよね。」

「うーん」

とか言ってるそばからキャッキャッキャした声が聞こえてくる。

「マサミくん、いつも元気だねっ。ヒナもとっても元気出るっ」

「あざす！もうどんどんテンションアゲアゲでいくよっ」

「そんなことよりさ、アタイのシュートどうよ？」

「もうサイコーだよシズクちゃん！」

なんだかしのれないが、一年のうち2人までもがそれに対してまんざ

らでもない様子なのだ。
いくら部の中に急に男子が入ってきたからと言って、ちょっと色気
づきすぎやしないか？

これが残りの2割だ。

「ね、あの2人かなり様子がおかしくない？」

「あの二人はミヨーにヒメにライバル意識をしてるからあんな告白
まがいのことされて嫉妬してるだけよ。「あんなデカいだけの女の
どこがいいのよ、アタシの方がよっぽどカワイイじゃない」ってね
そういうことだからキニシナイキニシナイ。」

「うーん、そうなのかなあ。…ってデカいだけウンヌンのあたりは
ちょっと気になるけど。」

「むしろマサミくん入ってきてからのほうがその「目」を気にして
いい動きしてるわよ、あの子たち。勝手に動き悪くなってるのは告
白されて浮かれちゃってるヒメくらいじゃない。」

「あたしは別に浮かれてなんかない！」

「じゃあ問題ないじゃないの。さっ無駄話は終わり！練習始めるよ
っ」

「は、はい」

そっか、あたしひとりが意識しすぎなだけか。なんだかうまくはぐ
らかされただけのような気もするけど。

「ヒメさーんお疲れっす。はいタオル。」

「あ、ありがと。」

まあ少なくともマネージャー業はしっかりこなしてくれてるわけだ
からいいか。要するにあたしの気が抜けているだけなんだから、気
持ち切り替えてがんばるぞっ。

よしっ、気合い入れ一発目のシュートッッ！

ガスッ

「ヒューッ」

どうやら気持ちの切り替えにはまだまだまだ時間がかかるようだ。

勸違い王子（前書き）

今日ついに、10000PV이었습니다！

今まで読んでいただいている方ありがとうございます。これからも更新がんばっていききたいと思います。

勘違い王子

今日は久しぶりに学級委員のお仕事で居残り。というか2年になってからは初なのだが、なにぶんパートナーが『アレ』なものでこれっぽっちも新鮮味がない。しかし2人ともボーっとしたまま、手は動いていない。ほんとはさっさと片づけて部活に行きたいのに、担任の先生がいないと進まない内容なのだ。しかもよりによって今日は職員会議だとかで先生は遅れている。まったくあの先生のテキトーさにはハラが立つ。

「じゃあないからヒメ相手にムダ話でもして時間つぶすか。」

「そういえば昨日見かけたんだけどさ、部員増えたみたいじゃん、なんていうのあの女の子？」

「入部してから10日以上たつのに今頃気づいたの？マサミくん。言っとくけど男の子だよ。」

「マジか、オトコかよ！？全然気づかんかったあ。」

「ば、ばっかじゃないの！？どう見たって男じゃない。どんだけ人を見る目がないの！？あんたの目は節穴ねっ。」

「まあそんなにじっくり見てたわけじゃないからな。そういえばそんな気もするかも。」

「なんだか知らないが、しよっぱなからヒメはケンカモードだ。ホントはこっちもキレかけたが、まあオレもそろそろ大人にならないとなってるって話はテキトーに合わせておいた。それにしてもほんと女って意味わかんねえ。」

「でもなんで女バスに男マネ？あ、わかった。もしかして女バスの中に好きな子いるとか？誰誰？教えるよ。」

「そ、それは…知らないわよっ、そんなこと！」

「ふっん。ま、ほんとに好きな子がいたとしても恋愛事にニブそう

なオマエにわかるほどそいつもバカじゃないか。」

「失礼ね、いつときますけどマサミくんはあたしのこと……。やつぱなんでもない。」

「あたしのこと」？あつわかった。オマエが男だと間違われたんだ。マサミってやつのは考えはこうだ。ある日女バスの練習をちらりとのぞくと女子に混ざってデカイ男子が突っ立ってる。「なんだよ、女バスにもうすでに男子いるじゃん。」それで安心して入部してきた。どうだ、当たり前だろ？」

「まったく毎度毎度失礼なヤツね、違うわよ。そんな勘違いする力はあんたぐらいだつづの！それにアイツは女子の中でも男一人でも平気なくらいずぶとくて、しかもただの女好きのチャラ男なのよっ！」

「そんな必死にならなくてもいいじゃねえか。」

ヤバイ、だんだんムカついてきた。しかしここでキレちゃだめだ。センパイもいなくなったし、オレは部活だろうがクラス内であろうが頼れる人間になるって決めただ。

しかしオレの決死の覚悟も、次の言葉で崩壊する。

「ちょっとだまっててくれる！？ヒトが一生懸命忘れようとしてることズカズカ聞いてきてなんなのよ、もう！教室にいるときくらい違うこと考えさせてよね。だからあんたと2人つきりなんてイヤなのよ！」

「ふざけんなよ、さっきから意味不明にキレまくって。お前は活火山か！しゃべるたびイチイチ噴火して、こっちこそいい迷惑だ！」

「またそうやってあたしを山なんか例えてバカにして！言つときますけどあたしってけっこうモテるんですからね！」

「うそつけ！マサミってやつに男だと間違われたばっかじゃないか。」

「それはあなたの勝手な妄想の中でしょ!?それに、その当のママ
ミくんにもさに出会った時に告白されたんだから!」
「うえ!?!」

さすがにこの予想外な事実には一瞬戸惑ったが、このくらいでオレ
の怒りの火山は止まらない。

「へ、へえ。あんなオトコだかオンナだか分かんないやつならむ
しろお前にお似合いかもな!」

「言つときますけどカレ175センチあるのよ。バスケットプレイ
ヤーなのに170もないかわいそうなどっかの坊やよりも、心も体
もずつと男らしいわよっ!」

「どうだかなつ。ふつうバスケのマナージャーやりたいなら男子の
方にはいれつつの!なんだよソイツ、女子に囲まれても平気なよ
うなナヨナヨしてるやつなんか男らしさで負ける気がしないねっ
!」

「なんかモテない言い訳みたいでかわいそつ。たぶん心も体も豆粒
みたいなあなたのせいでいつまでもマナージャーの女の子が入って
きてくれないのよ。」

「そ、そんなわけないだろ!と、とにかくそんな女男と仲良くして
んじゃねえぞ!」

「はっは、ん、図星だから急に話題変えようとしてるでしょ。」

「ばかつ、ちがつつつの!そういう男はろくでもないって相場は
決まってるんだから、オレはわざわざ忠告してやってんだよ。勘違い
すんなつ。」

「はいはい、とりあえずあなたがヤキモチやくほどあたしにホレ
てるってことはよく分かりましたよ」

「だ、か、ら」

「テレるなつてえ、大好きな女の子を独り占めしたいのは恋する男
の子のサガなのだから」

ダメだ、途中から完全にやられっぱなしで言葉が出てこない。

「もう入っていいか？」

オレが黙っていると突然声がした。なんか声が低いのでこれはヒメじゃない。もちろんオレでもない。

「わるいな言い出しっぺの先生が遅れちゃって。それにしても驚いたなあ、仲がいいとは思ってたけど、おまえらホントに付き合っていたとは。いやあ、イチャイチャしてるとこジヤマして重ね重ねスマン。」

「先生いつからそこにイラッシャイマシタ？」

「えっ？タイガが小泉に、「おれ以外の男を見るんじゃない」的なことを言ってたあたりだが。」

忘れてたー！そうだ、元はと言えばこの担任が遅れてくるからこんなことになったんだ。しかも会話を聞きだしたタイミングが最悪。やっべ、なんか勘違いしてるし…

「用件はすぐに済ますから、その後は二人っきりの教室でどうぞご自由にな。」

「先生違っんです。今のは恒例の漫才みたいなものでして、ねえタイガ？」

「そ、そうそう先生。ホントおれらそういっんじゃなくてタダの親友っていうか。」

「わかったわかった、クラスみんなには黙っておいてやるよ。今日の出来事はオレとおまえら二人の秘密にしといてやるからな。」

けつきよく、「おれって分かる『大人』だろ？」顔の先生のニヤニヤは止めることはできず、その後学級委員2人は顔を真っ赤にしなからさつさと仕事を終わらすことに集中した。

気になっちゃった姫

ピ

「今日の練習は終了でええす」
このチャライ声にもだいぶ慣れてきたのかな。いつも練習の最後には4対4のミニゲームをするのだがけど、今日は久しぶりに自分のプレーができた気がする。学級委員で遅れて時間短かった分、体力有り余ってたからかな？

そんな違いをよく見てくれているのが、われらがキャプテン。

「ヒメ、ようやくセンターのエースらしい動き出来てたじゃない！」

「やっぱりそうかなあ？自分でも動きがキレキレだったのわかるのよね。」

「自分でその違いがわかるようになれば一人前ね。でもま、マサミくんのこと気にしてなきゃ今のヒメの実力ならこのくらいがフツ―だと思っただけどねえ。さては本命のダンナ様になんか言われたとかあ??」

「ち、違っつっつうの!」

まあ「ダンナ様」かどうかはともかく、アイツになんか言われたのは事実であるが。やだっ、思い出したらまた顔が赤くなってきた。

「わっかりやすうっやっぱりヒメにはタイガくんの方がお似合いみたいっ。こりゃ修学旅行が楽しみだっ」

「ちよっ、レイ同じ班だからってなんか企んでふたりつきりとかにさせないでよ!??」

「なになに、それは「旅行中は2人だけにさせてくれ」っていうことと受け取りますがあ?」

「わぁヒメちゃんダイターン！」

「付き合ってるアタシとカズキでもそんなことはつきり言えないよ
お。」

「そろいもそろってウザいことこのうえない。どうしてあたしの周りの
人間はこうもヒトノハナシを逆に逆にとらえようとしたがるのか
っ！」

「ナニはなしてんすかぁセンパイたちい？オレも混ぜてくださいよお
」

「いやぁこればかりはマサミくんには秘密なんだなぁ」

「そうそう、1年は1年同士で仲良くしてなよ」

「うっわぁ、つめたいなぁお姉さんたち。まぁ別にいいんだけど
ね。ヒナタちゃん、シズクちゃん、アイカちゃんマツクい
こ」

「いいよ」 「おう！」 「…」

「こういうの聞いてると、この前の告白はどこまで本気だったのかわ
からないな。ま、別にその方がいいんだけど。」

「それよりも気になるのはアイカだ。マサミくんのテンションについ
ていけないって気持ちはよく分かるのだが、さすがに無視はひどく
ないか？」

「ねえ、アイカってマサミくんのこと嫌いなのかな？」

「うーんどうだろ。でも他の二人が仲良くし過ぎなのは置いといて、
たしかに一回もしゃべってるとこ見てないっていうのは異常かも。」

「ちよつとアイカに話し聞いてみようかな。」

「え、それは気にしすぎじゃない？ヒメっておせっかいだよ」

「あんたたちにはわからないかもしれないけど、新しい人が入っち
やうと簡単にはなじめない子もいるのよ？」

「それって実は告白で動揺してたジブンのこと言ってるんじゃないのお？」

「ニヤニヤするなあー！決めた、あたし今日アイカと2人で帰るからー！」

「お好きにどうぞー！」

というわけでアイカと2人で帰宅途中。

部活に関係ない話をしているときはいつも通り楽しそうにおしゃべりしていたのだが、マサミくんの話題が出ると急に黙ってしまった。「やっぱりああい子苦手だった？実はあたしもなんだよねえ」。なんか告白のことは又キにしても、なんかあのかるう〜いフンイキがどうも合わないっていうかさあ。まあでも話してみると意外といいやツだよ？あの子もあれで部を盛り上げようとかがんばってるっていうのかなあ。とにかく今度マツクでも一緒に行ってみたらいいじゃない。

「…あの、違うんです。」

「へ？」

「実はアタシ、うまく男の子と話せないんです。」

「え、それって他の男子でもそうってこと？」

「はい…」

あたしなんかやっちゃったかな。そういえば男バスの誰かと話しているの見たことないかも。女バスの中だとみんなに混じってフツーにしゃべってるから気づかなかったな。

「でもどうして？あっわかった。「オトコなんてミンナ野蛮よ！」とかって感じ？」

「そ、それは…」

「ご、ごめん余計なお世話だったねっ。そういうこともあるよね。」

いちおうマサミくんには嫌ってるわけじゃなくて、ただシャイなだけって伝えとくから。でもアイカもあいさつと返事くらいはしてあげなさいよ?」

「がんばってみます。」

そう言ったアイカの笑顔はかわいかった。この子をこんな笑顔にしてあげられる男子が、いつか現れてくれるといいなって思った。

「ありがとうございます。実はいままで誰にも言わずにちょっと苦しかったのもあるんです。ヒメさんに聞いてもらって少し楽になりました。」

「そう?そう言ってもらえるとあたしも嬉しいかも。それじゃ、明日も練習がんばるためにおいしいたい焼きさんでも寄ってきますか。あたしおいしいお店知ってるんだあ。」

「はい!」

災難王子

男マネが入って浮かれているらしい女バスはどうか知らないが、バスケ一筋に燃える男バスは新チームになって初めて練習試合が組まれた。

ほんとなら両手を上げて喜ぶところだが、ここで問題発生。それはリヨースケの発言から発覚した。

「先生、オレその日学校で科学館行くの決まってるから出れないっすよ。」

「え、なにその行事？あたし知らないよ？」

「先生は文系クラスの副担任だからじゃないっすか？理系の2年は全員行きますよ？」

「たしかアンタ達全員同じクラスだったよね。ってことは5人ともいないってこと？」

「いや、ウチのクラスだけ文理混じってるんすよ。ちなみにオレも理系っす。」

ミノルまで？というか2年メンバーで一番数学ができないミノルが理系だったという事に驚いた。

「あ、それオレも応募したんで行ってきます。」

「ちょっと待ってマコトも？」

「先生どうするんすかあ。」

「いや、だいじょぶっしょ6人いるし。なんとかなるって！」

黒谷先生たのむよ

先生も忙しい中コーチしてくれてるからあまりはつきりと文句を言えないといのもツライが、こういう時にマネージャーの不在が悔やまれる。

べ、別にそれでも『マサミくん』はうらやましくはないけど。

当日6人で相手校に乗り込むことになった。

ちなみに新キャプテンはリョースケに決まったのだが、新チームお披露目の日に不在というこのグダグダぶり。

さらにここで第2の問題発生。

試合前のアップ中、どうもカツヒサの動きが悪い。先生はカツヒサを呼んで額に手を当てると目つきが変わった。

「アンタひどい熱じゃない!?いくら無口だからってこういうことはちゃんと言いなさいよ!」

「いやだつてオレがいないと5人になるし、試合になんねえし。」

「さすがにこの熱じゃできないわよ!というわけで今から病院行ってくるからあとはよろしく、アキヒト!」

「え、なんでオレに「よろしく」なんすか?」

「今からアンタ副キャプテンだから。」

「ええ〜〜」

そう言い残し、先生はカツヒサを担いで去って行った。

残されたのはわずか5人。しかも監督なし。

「と、とりあえず。スタメンを言うね。」

「いや、今ここにいるヤツ全員だろ。」

アキヒト相当テンパってるな。

「うっ。じゃなくてポジション発表する。問題なのはリョースケ以外にいないSGだけど、割とボール運びなんかもできるエイジにやってもらおうと思う。あとはPGはオレ。SFタイガ、PFカズキ、Cアキラでいく。」

何気にカズキもPFはやったことないが、この際そんなことは言ってられない。

そんな状態で試合は始まった。技術的にも精神的にも要であるリヨウスケがいけないことが大きく、序盤からディフェンスは大崩れであった。それでもカズキを中心としてインサイドから得点を重ね、なんとか食らいついていく。

前半終わって、47 - 32

しかも後半はベンチのメンバーのいないこっちがキツくなってくるのは目に見えている。あげく向こうのキャプテンから

「あの〜なんか今日ベストメンバーでもないようですし、もうやめますか？」

なんて言われる始末。

「いえ、やります。続けさせてください！」

そう言い切ったのはアキヒトであった。早くも副キャプテンとしての自覚が出てきたのか？

その決意ははつたりではなかったらしく、後半からはアキヒトの指示が飛び、むしろ前半よりもディフェンスが機能し始めていた。

「ようやく相手の得点が止まってきたな。これから反撃行くよ！頼んだからねタイガ！」

「おう！」

正直言って今は走ってるだけでもキツイのだが、そんなこと言ってもらえない。だって本番じゃこのチームの何倍もの格上を倒さなきゃいけないんだから。

アキヒトが3Pラインまで一気にドリブルで運ぶとカズキにパス。

すかさず相手もゴール下でプレッシャーをかけてくる。

しかしカズキは一瞬オレのマークが外れているのを見逃さなかった。
よしっ。

ドリブルで空いているエリアにつっこんでいく。前にはディフェンスが迫る。オレは素早くその場で止まってシュートした。

オレの前に突っ立ったままのディフェンスの頭上を通り越してリングに吸い込まれていく。

「っしやあー！」

その後も最後まで善戦するも、一歩及ばず負けてしまった。しかし体力が限界の中やりきった経験は決して無駄ではなかったと思う。

ただ、もう2度目は勘弁してくれ。

出発前にも一苦勞な姫

いよいよ来週に迫ってきた修学旅行関係のことで毎日の授業はほとんど埋まっていた。

そして今日はその中でも、とっても大事な取り決めがあるのである。「じゃあ今から修学旅行中の自由時間の班決めをするから、各自3人組を作ってくれ。」

「はい！」

そう言われると同時に、クラス中がいつもの仲良しメンバー同士で寄り集まっていく。

あたしはみんなの勢いにのまれて一瞬固まってしまっていた。早いトコロはもう3人組確定してドコに行くかで盛り上がっている。

やばい、完全に出遅れてしまったあゝ

「ヒュー、一緒に組もっ」

「レイ〜」

「ちよ、ちよつと、息ができない…」

「ご、ごめん！」

「もう、抱き着かなくてもいいじゃん。あやうくアンタの起伏のない胸の中で窒息死するところだったんだから！」

この際ぺちやぱいをバカにされたことなど気にならない。

「やっぱ持つべきものは親友だあ！！」

「おおげさなまったく。で、もう一人誰にしようか。」

「もう誰でもいいよ〜レイにまかせる〜」

「ホッとしすぎでしょアンタ。まあフツーに考えたら女バスの誰かつてことになるけど…」

周りを見渡すと、クラスの中でも飛びぬけてキヤーキヤーうるさい

一団が目についた。このクラスで一番目立ちたがり屋のギャル集団、通称「ギャルキュア」だ。わりと校則を守っている子が多いウチの学校の中で、金髪ありカレシ複数ありへそピアスありの5人組だ。

その中にアカネが混じっていた。たぶんあそこで3人×2で組む魂胆だろう。

「なんかあの中だとアシンメトリーヘアのアカネが清楚に見えちやうね。」

「そうね…」

気を取り直してまた物色していると、こんどは逆にほんわかした空間を見つけた。そこにはミスズと、彼女に負けず劣らず優しい雰囲気、気の2人組、「文芸部シスターズ」である。

ちなみに彼女2人はそれぞれテニス部とソフトバレー部でレギュラーとして目下活躍中であるが、その知的なメガネ姿でいつも2人で談笑をしている風貌から、誰ともなくそう呼ばれている。

せっかく人数ぴったりのグループができあがってるのにジャマしたら悪いので声をかけるのをあきらめた。

「ていうかみんな女バス以外にも友達いるんだね。」

「いやそれくらい当たり前でしょ。ヒメが女バス5人っていう状況に甘えすぎ。言っときますけど、アタシだって他にも候補になる子くらいいたんだからね？」

「はい、レイ様にはいたく感謝しております。」

そんな時、起死回生の天使のような声がかげられた。

「ヒメちゃん一緒のグループにならない？」

「え、あたしでいいの？」

「うんあたし達2人しかいなくて困ってたんだよね。」

「えっ…でもあたしすらも2人だからムリだわ、ごめんね。」
せつかくのチャンスだったが彼女たちの方も別れる気はなかったらしく、断念した。

その後も声をかけてくれる子はいたが（ちなみに全部レイの友達）、人数が合わなかったりあたしが全然話したこともない子達だったりで決まらずにいた。

「やっぱこういうのって難しいね。あと残るはサアヤくらいだけど、見当たらないなあ…」

「そうだねえ。でもあの子かわいいから今頃ひっぱりだこになつてるかもよ？」

「それもそっかあ。そうするといまだに机で一人座ってるような子を誘うしかないかなあ。まあアタシは誰とでも仲良くできる自信はあるけど。」

「あたしもこの機会に新しい友だち作るっかな。あれ、でもそんな子いないよね？ていうか他のところは3人組できてるみたいよ？ウチのクラスの女子は18人だから余るはずないんだけど今日誰か休んでたっけ？」

「いや今日は全員出席してたはずだよ。おかしいな。ってうわあ！！！」

何気なく窓の外を振り返ったレイは急に大声を出した。

あたし達は今までクラスの間の方から見渡していたのでつきり全員が見えていたと思ったが、実はすぐ後ろにもう一つ席があったのだ。

そしてそこに座っていたのは…

「サアヤ！」

「どうしたの、一人でそんなとこ座って。」

「そうだよ友達のとこ行ってグループ作らないと。」
「だってあたし友達いないし。」

沈黙。

「そ、そっかあ。じゃあアタシたちと一緒に組もうよ！ちょうど一人足りなかったとこだし。」

「そ、そうね、友だちいない同士仲良くしよっか！」
「あんた達誘われてたの見てたから」

再び沈黙。

「も、もうそんなこと言わないで同じ部活の仲間同士仲良くしましよつ。」

「そ、そうよ！改めてよろしくねっ」

そのあと必死でなだめすかしてなんとかクラスで最後の3人組となつたのであつた。

浮かれ王子

「よし、全員出発時間間に合ったようだな。」

「はい」

「お前たちパスポートは持ってきたかあ？」

「はい」

聞いて驚くことなかれ

なんと我が翔泉高校の修学旅行先とはずばり、アメリカなのである
！！！！

「これから飛行機に乗るわけだが、その前に手荷物検査と身体チェックがある。金属製のモノを持つてる人は事前に出しておくように。」

先生そのセリフ、学校で10回は聞いたつつつの。今さらそんなの引っかかるやつなんていねえよ。

ピッピーー

ん、なんだこの音？

なんかゴツツイおっさんがわらわらと出てきたぞ？

あっそうか、誰かが金属検査でひっかったのか。バカだなあ、誰だ誰だ？

つてオレえ!?

いやいや何も怪しいものなんか持ってませんけど!?

「Hey! You %*」

やべえ、ナニ言ってるのか全然わかんねえ!なんだよ、ポケットの中身出せていったのんか?なんにも入ってないっつうの!

あれっ?

なんだこの固い感触。

え〜〜なんでバターナイフが入ってたよ?

今日の朝飯の時に間違えてそのまま持つてきちゃった?? いやありえないありえない! 大体今日の朝飯はゴハンに味噌汁に納豆っつうぜ・日本食だったし!

「って、ちょ、ちょっとドコ連れてくんだよ?」

ちっ、ゴツイおっさん達がオレをどっか取調室的なところへ連れてこっつとしてやがるっ

「だからオレのじゃないっつうの」

いや、そんな言い訳が通用する相手じゃないな。っていつかバターナイフじゃたいして悪いことできないし！

「ノーノー！ イッツバターナイフ！！」

パンに塗る動作を繰り返し、身振り手振りで必死でただのバターナイフであることを説明する。

ふうようやく分かってくれたみたいだぜ。バターナイフは没収されたけど別にいいだろ。

しかしこの珍事、犯罪の臭いがするな。犯人はいつたい『どうやって』オレのポケットに入れたんだ？ いや、それより問題なのは『誰か』だ。

犯人は意外と速くに見つかった。ほとんどのやつがあきれ顔の中、大爆笑しているヤツが約1名。

ミ〜ノ〜ル〜め〜

「お返しじゃボケエ！！！！」

オレの渾身のドロップキックは見事にミノルに的中し、見事に復讐を果たすことができた。

そのせいで、さっきのおっさん連中にまた連行されたのだが後悔はしていない。

サイトシーイング姫

「うわぁスゴイ、みんな英語で話してるぅ」

「見てあそこ、ゴリマツチヨの黒人と金髪美人のカップルだあ！」

「あんた達バカね、アメリカなんだから当たり前じゃない。一緒に歩いてると恥ずかしいからもう少し離れてくれる？ あっ、ジョニーデップ似の超絶イケメンはっけーん！え、えっとエクスクーズミー！！」

「アカネ、あんたが一番恥ずかしいよ。」

「アトムジャパニーズビューチフルガール！ えっなんか言った？ なるよ、そろいもそろって暗い顔してえ。せつかくの海外旅行なんだからさあ、そんなおとなしくしてないで楽しみましょうよ！ あっ今度はブルースイルス系のシブいおじさまよっ」

「よし、後始末はヒメに任せたっ」

「ちよっレイ、どこ行くのよっ。もう！」

「ふっ。アカネ、せつかくの旅行なんだから景色とか見ようよ。」

「景色なんか見たって1ドルの得もないつつの！」

「イケメン見ても結局お金にはならないと思うけど。むしろ訴えられたらマイナスだし。アメリカって裁判王国とかって言うし気を付けないと。」

「バカね、言葉のあやよ！ しかもなに裁判とか。あんたデカいくせに細かいこと気にしすぎなのよ」

カッチーン！ 小泉ヒメ、マジでキレル5秒前。

「そんなこと言わずにさ。ほら、ニューヨークってこんな高くてオシャレなビルがいっぱい並んでるんだよ？」

「ビルなんて東京とか大阪にでも行ったときに腐るほど見れるじゃない！！でも白人イケメンは海外旅行中の今しか見れないのよ！？」

田舎育ちのあたしにはビルも十分貴重なんだけどな。これはよっぽど目を引くものを見つけないとダメだなこりゃ。

「あつ、自由の女神見えてきたよ！うわ、こんなに大きいんだあ。ほらあの左手の方。アカネも見たらビックリすると思うよ？」

「そうね、アンタにとっては何かを見上げるってことは珍しいかもね。」
「キレちゃダメだキレちゃダメだキレちゃダメだ」

「あつでも自由の女神も近づいたらヒメより小っちゃかったりして。」

小泉ヒメのATフィールド崩壊。

「さつきからおとなしく聞いてりゃ好き放題言ってくれおつて！」

「ど、どうしたのよ急に？」

「だまれこの不揃いヘア嬢！」

「は？もしかしてアタシのアシンメトリーヘアdisってんのそれ！？」

「そうに決まってるでしょうが！今すぐ長い方むしりとつたるか！」

「！」
「アンタみたいなのもっさい女には分からないでしょうけど、これが最新のオシヤレだつっつの！ていうか人の外見バカにするとかサイテー。」

「どの口が言つとるんじゃボケえ！さつきから散々自分が言ったこととはもう忘れてんのかつっつうんだよ。異国に来てとんだだけ浮かれるんやっちゅうねん！」

「えっ？えっ？」

「さつきから吐いた暴言のことについて今すぐ謝らんかいつつってるんじゃあ！……！」

「ご、ごめん、なんか言い過ぎたみたい。反省する。」

「分かればええねん。」

「ヒメさつきから何大声出してんの!? クラスのみんなだけじゃなくて周りのアメリカ人もドン引きしてるよ?」

「だからそれはこの女が悪いんじゃない?」

「なにそのキャラ、そんなヒメ今まで見たことないよ...」

「こんなのいつも通りのあたしじゃあ! ...ってあれ?」

怒りも収まってようやく素に戻ったあたしは、さっきまでの一連の流れを瞬時に振り返る。

振り返るとともに顔が熱くなってくる。

とてもじゃないけど今は顔なんてあげられないよお。

結局その後は一度もニューヨークの街を眺めなかった。

どうやら舞い上がっておかしくなったのはあたしの方だったみたいだ。

反省したアカネとレイが隣で一生懸命街の様子を話してくれているのだが、一向に耳に入らなかった。

見え張り王子

今日は待ちに待った自由時間の日だ！ミノルとアキヒトと一緒に自由の国アメリカを満喫するぜ！

しかし実はこの3人だけではない。誰が決めたか知らないが、女子とも合同なのである。

「ってまた例によっておまえか、どうして毎回そうやってオレと一緒ににいたがるわけ？」

「はあ？くじ引きだからしょうがないでしょうが！言っときますけどあたしの方がアンタの100倍飽きてるんですけど！」

「オレはその100倍だね！」

「あたしはその100倍だっつってんでしょ！」

「もう旅行先でまでイチヤつかないの、お2人さん」

「イチヤついてなんかない！！！」

そんなこんなで6人で観光しているとなにかを見つけたのか、ミノルが急に走り出した。

「さすが本場アメリカだな。こんな街中にバスケのリングがあるぜ！」

「おついいねえ、体動かしたくてしょうがなかったんだよね。しかもこんなこともあるのかとボールもってきてるんだなあこれが。これはやるっきゃないな！」

「ちょ、ちよつとタイガ、ミノルまずいよお」

「ナニ言ってるんだよアキヒト、ほんとはおまえもやりたいって顔してるぜ！」

「そうだぞ、そんなんじゃ副キャプテン失格だぞ！」

「アタシもやりたくいい！」

「いいねえレイちゃん、そこなくっちゃ!」
ちなみにサアヤちゃんは荷物を降ろしていち早く臨戦態勢である。

「ほら、ヒメも来いよ。」

「え、勝手にやっちゃまずいんじゃない?」

「ダイジヨブだって。さては久しぶりにオレら男子とやるっていうんでびびってんだろ?」

「そ、そんなわけないじゃない! いいわよ、相手してやるうじやないの。」

「ちよろいなあ。」

そんなわけで修学旅行先で急きよ3on3が始まった。

オレがシュートに行こうとしたときサアヤちゃんにブロックされてしまい、ボールはゴールとは逆方向に転がって行った。

「おい、タイガ早くボール取ってこいよお。」

「わあつてるよ! あっ」

顔を上げるとそこにはボールを持った黒人の外国人が立っている。というか今はおれらが外国人か。

「わりい、ボール取ってくれないか」

って日本語で言っても通じるわけないか。とりあえずボールを指差して、パスしてくれというジェスチャーをする。

しかしその黒人は指先で「来いよ」と合図した後、おもむろにドリブルをしてこっちにつっこんできた。

へっ、なんだコイツもバスケットマンか。日本人なめるなよ、ゼッテー止めてやる!

えっ？

気づいた時にはオレの左側を通り過ぎて、ソイツはそのままゴールに向かっていた。あわてて追いかけようと振り向くと、同じように驚いて突っ立っている他の5人を華麗にかわし、そのままボールをリングにたたきつけた。

しばらく呆然としていると後ろから笑い声とともに英語が聞こえてきた。さっきの黒人とは別に、白人2人がこっちを見ている。

「やべえ全然わからねえ。アキヒトなんて言ってるんだ？」

「うーんたぶんだけど、『なんだ日本人なんてこんなもんか、へたくそはさっさとどいてるよ。』って感じのこと言ってる。」

するとさっきの黒人があとの2人に近づいてなにやら話している。それからこっちを見て言った。

「『3on3でやろうぜ。せつかくだから相手してやるよ。その代りに負けたらその女の子達とデートさせる』だって。」

「上等じゃねえかやってやるよ！ ……って伝えてくれ。」

「タイガなんかかっこわる。」

「うるせえ！」

こうしておれ達は急ぎよ3on3の国際試合をすることになった。

ぜってえまけねえ

ただ見守るしかない姫

ど、どうしょ〜

タイガたち絶対勝ち目なんかないじゃん。さっきダンクした黒人がうまいのはもちろんだけど、あとの2人もなんか雰囲気あるし片方なんか2mありそうだもん。

「タイガ達だいいじょうぶかな？」

「わかんない。でもとりあえず応援しなきゃ！」

先攻は外国人チームみたいだ。一番小さい金髪の彼（といっても180はありそうだけど）がガードみたいだ。自分からドライブで切り込んでいってうまくディフェンスを崩している。2m巨人は当然のごとくセンターで、あたしだったらあの威圧感だけで止めようとする気力すら持てそうにないな。

どうやらあの黒人はフォワードらしく、彼にボールを集中して攻めてきている。それにしてもパスを受けてからドリブルにむかうまでがすごくなめらかだ。正直そのプレーをずっと見ていたいと思わせるくらいだ。

「あ、タイガまた抜かれた。」

ガシャッ！

リングがもう古いのか、ダンクを決めると体育館よりも大きな音が鳴り響く。なんだかかそれが一層強そうに感じさせられる。それに比べてこっちでダンクできるのは180後半のミノルくんくらいかな。でも2m巨人が相手だとシュートするのも一苦労みたいだ。

「うわあまた決められた。かろうじて勝負になってるのはアキヒトくんぐらいだけど、彼は点取り屋ってわけじゃないし厳しいかも。これじゃ勝ち目ないなあ、そろそろデートどこに行くか考えなきゃ。アタシはあの金髪くんがいいな、ちよつとイケメンだし。」

「もう何言ってるんのレイ！こんなニューヨークのど真ん中でこの誰ともわからない外人となんて怖くて歩けないよ！」

「アタシが代わりに相手してくる。」

「サアヤも落ち着いて！さすがにアレの相手は厳しいよ。ここはアイツらを信じるしかないよ。」

でもあのアメリカ人3人、デカいだけじゃなくて小技もうまいんだよな。うわっ、2m巨人がスクリーンかけてタイガふつとばされてる。

ドガシヤッ！！

…やっぱダメかもしれない。

枕投げ王子

あの黒人の名前なんつて言ったっけ、忘れちゃった。結局オレは一回も点決めれなかつたし。くそつ、フワードとしてまだまだ実力が足りなすぎる！最近は実力ついてきたかなって思ってただけに余計へこむわ。しかも「デートは冗談だよ。キミたちを本気にさせるためだけさ。」とか完全にバカにされてたんじゃねえか！でも実際本気だったとしたら責任とれなかつたわけでもあるんだけど。しかもあん時勢いでアンナコト言っちゃまつたし… うわ、思い出しただけで頭ん中ワ　ってなる！！もういつそオレを誰か穴に埋めてくれっ

「くらえ！」

「ぶへえっ。ってえなにすんだよミノル！」

「なにつて決まってんじゃんか、修学旅行の夜つつたらまくら投げっしょ。」

「今そんな気分じゃないんだよ！アイツらにボロ負けしたおかげではらわた煮えくり返ってるんだ。静かにしててくれ！」

「もうそんなこと今考えてもしょうがないじゃんか。帰ったらまた死ぬ気で練習する。とにかく今は楽しもうぜ。」

「ほんとオマエはのん気だよなあ。つたく、うらやましいほほっ」

「タイガ、まくらはドコから飛んでくるか分からないんだぜ？」

「リヨウスケ、なんでここにいんだよ？」

「部屋のヤツら女子んとこ遊びに行っちゃってヒマなんだよ。ということでオレも混ぜてくれい」

「オマエも行つたらいいじゃないか。」

「オレはバカ騒ぎがしたいの！つてわけで負のオーラ出しまくってるタイガには罰として集中砲火の計だ。ミノル隊員、アキヒト隊員、部長命令で攻撃を許可する！」

「アイアイサー！」

「職権乱用だろうがテメエ　！！！」

もうこうなったらやけくそだ、徹底的にまくら投げ込んだる！

「くらえべへっ、げほっ。ちよ、ちよまって、3対1はヒキヨーだる！」

「問答無用！」

「ちっ、今日はふんだりけったりだな。だいたい、なんでアメリカ滞在の最終日が『旅館』なんだよ！昨日まではふかふかのベッドルームだったつうのに！」

「そんな細かいこと言ってるから今日も一人だけ無得点なんだよ、へたれフオワードが！」

「くやしかったらまずはおれらに枕ぶつけてみるよ、なんだ、シートも外れりやまくら投げも当たらないってか？？」

「もうあつたまきた！お前らがそうくるなら容赦しねえぞ！？　くらくえ〜！！！」

「オイバカっ、ふとんは投げんじゃねえよ！」

「うるせえ！」

バキッ！

リヨウスケ達がつさによけたのでオレが投げたふとんはその後方へ飛んでいく。そしてそこにあったのはふすま、だったモノ。そう、ほんの数秒前までは『部屋のしきり』という役割をはたしていたモノ。

そのあと先生たちの部屋で正座させながら4人仲良く説教をくらったのはいつまでもない。

平穩には眠れない姫

「明日でもうアメリカとおさらばか。」

「なんかあつとういう間だったですわね」

「そういえば後輩になんにもお土産買ってない？」

「ホントだ、自分たちの分は行く先々で探してただけどね。まあ空港でテキトーにそれっぽいお菓子とか買っとけば大丈夫っしょ。」

「もう、レイセンパイヒドゥイ。でも実際そうするしかないよね。アハハ」

イロイロあったアメリカ旅行も明日で終わり。今はレイ、サアヤ、ミズズの女バスメンバーで部屋でのんびりまったり雑談中というわけだ。

ちなみにアカネは別の部屋でお楽しみ最中だ。あつ、変な意味じゃなくてね、たぶん……

「あーもうサイテー！！！」

ウワサをすれば、本人が真っ赤な顔して登場した。

「ど、どうしたのよアカネ」

「アイツ絶対呪い殺してやるっ！レイ、帰ったら二度と男バスと練習なんかやめましょ！いえそれくらいじゃ気が済まないわ。あたし達へのセクハラ疑惑でもなんでもでっち上げて廃部にしてやる！」

「ちょ、ちよつとまず落ち着いて。なにがあつたのか順番に説明しなさいよ。」

「これが落ち着いてなんかいられるかっつうの！カズキのやつが浮気したのよ！？」

「うそっアンタ達付き合ってから2人ずっとラブラブだったじゃない！？」

「アタシだつて信じられないわよっ！でも見ちゃったんだもん。」
「何を？」

「浮気現場に決まってるじゃない！！アタシの目の前で他の女とキスしてやがったのよアイツ！ふざけんじゃないわよ、元はと言えばあつちから急に告白してきたクセに生意気に浮気なんて…これだからオトコって生き物は！」

アカネの方だつてリヨウスケくんにフラれた後に彼氏候補の2番目だったとか言つてソツコーで切り替えた、つてことはこの際言わないでおこう。「そんな昔のこと覚えてないし！」とか逆切れされるのがオチだ。

「あー今思い出しただけでもムカついてきた！！ちよつと！気晴らしにアンタらの恋バナでも聞かせなさいよ！」

「そ、そうね、それがいいわ。ねえサアヤ、最近イシちゃんセンパイとはどうなの？デートとかドコ行ったりしてんの？」

「別れた。」

「へっ？」

サアヤ様は今なんとおっしゃられた？

「へえ〜『ワカレタ』ってお店に行つたんだ。タノシソウダネ〜」

「ちがう！彼が部活引退してから会つてない。」

「それつて部活終わつてヒマができちゃつたから他の女の子に目が行つちやつたとかあ？」

「そんなんじゃない！彼がアタシのバスケジャマしないようにつて言われてフラれた。どっかのバカと一緒にしないで！」

やめて〜、この流れだと『バカ』はカズキくんしか聞こえないよ〜。つてあたしの質問もまずかつたんだけど。

でもここでくじけちゃダメよヒメ！こうなったら話題転換。とうい
わけで最後の誓、ミスズに頼るしかない！

「ミスズは例の他校の殿方とはどうなってるの？ほら、付き合っ
たって報告しか受けてないしい、今までどんなおつきあいされてたか
くわしく聞きたいなあゝなんて」

「あら、それならわたくし達とつくにお別れいたしましたわ。」

うっそ〜ん、ミスズまで！？しかもこの子もすでにご機嫌ナナメ？

「それは一体全体どうしてでありますか？」

うわああたしテンパってどんどんナゾな口調になってますよお。し
かも誰もツッコミもしてくれないのが余計にツライ。

「それは触れないでいただけます？」

え〜まさかのタブー！？ふだん温厚なミスズがムス〜っとしてる
よ。今彼女の周りにセリフを入れるとしたら「プンスカプンスカ」
って感じだな。なんかかわいいつ、って言っるとる場合かー！！どう
しよう、このピンチをどうやって切り抜ければいいんだ〜

よりによってなんで誰もうまくいってないんだ！？しかもレイはと
つとと会話から逃げてマンガ読んでるし。こういう時はいつだって
あたしが話しの進行役、というか一身にとばっちりをくらう役。あ
たしは爆弾処理班じゃないっつうの！

「なんなのよもー！辛気臭い話ばっつっつかり！！！こうなったら
ヒメ、アンタ今からタイガくんとこ行って告ってきなさい！」

「はい！？」

「あんたら見てるとイライラすんのよね。クラスでも部活でも一度
からむと止まんないし。しかもヒメなんて明らかにキャラ変わるじ
ゃん。いい加減くつつきなさいよ！」

「だからあ何度も言ってるけどあたしはアイツのことなんとも思っ

「ちやいないつていないのよ？」

「「ちや」「ちや」言つてないで今すぐ王子のとこへ行つてこーい！」

「人の恋路に首を突っ込む暇があつたらご自分こそ行動してはどうですか？」

「早く行けトンマ」

いつの間にかミスズとサアヤまで『そつち側』の人間に！？今日のあたしはどれだけの地雷を踏んでるっていうのよ」

「まあまあ皆さん落ち着いて。」

え、レイさん今さら助け舟？？いえ、この際いままでの態度なんて言つてられないわ！この窮地を乗り切るためだつたらなんでも大歓迎よ」

「このマンガおもしろいわよ。主人公の女の子はすごくカワイイんだけどもうこれがカワイソウなくらい男運がなくなつて笑えるの！付き合う人付き合う人にいろんな理由をつけられてはフラれていく、つて物語なんだけど。読む？」

その言葉を聞くと3人はあつという間にレイからマンガをふんだくつた。とんでもなく不幸なストーリーに惹かれたのか、仲良く3人で読みふけている。

「ふう、助かつたわレイ、あなたはあたしにとっての自由の女神よ。」

「ありがとう。これもキャプテンの務めかしらね。それにしても『部活外恋愛禁止令』なんて失敗だったかしら。もうメンドクサイか

らいつそ自由恋愛にしちゃおっかな〜」

「本気でその方がいいかもね。」

「ま、それはまた後で考えておくわ。それはさておき、実際どうなのよ？」

「「どうなのよ？」ってなにが？」

「タイガくんよ、タイ・イ・ガ・く・ん。アカネじゃないけど、修学旅行って正直告白する絶好のタイミングだと思っただけど？」

「もう、何言ってるのよ！あんなの一度もイイなんて思ったことなんてないっつうの！！」

「でも今日の3on3の時、アタシはちょっとドキっとしちゃったかも。勝負のあとにいきなり「オレのこと好きだけ殴っていいから、その代わりにコイツラに手を出すのは勘弁してくれ！」って言うんだもん。しかも日本語だから相手に通じてないのにね。そういうところが彼らしいっちゃ、らしいけど。ねえ、タイガくんかっこいいとか思っちゃった？」

「それはまあちょっとは……」

「ほらやっぱりね！いい加減素直になりなよ？高校生活だってもう半分終わっちゃってるんだし。」

「だからそれはあのセリフに対してっただけで！」

「そんな大声出したらあの3人に聞こえちゃうよ？でも、また追い込まれて『告白させられに行く』ってつもりなら止めないけどね。」

その日、アカネ達が例のマンガの感想で盛り上がる声が止んだ後も、あたしはなかなか寝付けなかった。

帰ってきた王子

「やっぱ部活の練習用Tシャツ着ると『帰ってきた』って感じするよな。旅行中はイロイロあったけどとりあえず今日からまたバスケットに集中しよう。」

「あれ、カズキ、その胸の傷どうしたんだ？まさかアカネちゃん襲おうとしてひっかかれたとか？？」

「ち、ちげーよバーカ！！これは飼い猫にひっかかれただけだったのー！」

「ふうん、そうなのか。」

「センパイ、おかえりなさい！待ってましたよ〜」

「おう、どうしたんだエイジ！？あつお土産か？悪いけどオレはおまえらの分買忘れちゃったんだけど。」

「そんならどうだっていいですよ！帰ってきてくれただけで幸せです。」

「なんだよ、そういう風に喜ばれると逆に気持ち悪いんだけど。」

「別にどう思われたってかまわないっす！とりあえず皆さんお帰りなさいっ！」

「お、おう……」

「なんでエイジはぼろぼろ泣いてるんだ？そんなにオレ達がいなかったのが寂しかったのか？？」

「あつセンパイ方おかえりなさいっす… あつ」

「ちょ、ちよつとどうしたアキラ！なんで急にオレに倒れてきてんだよ？バカっ抱き付くんじゃねえよ！！」

「なんだなんだ？いつから男バスはBL部になったんだ？」

「いや、これには深いワケがあるんですよ。」

「おうマコト、これがどういうことかオレ達に説明してくれっ」

「いや、ちよっとオレもダメージでかくて。正直あんま思い出したくないっす。」

「そ、そうなのか。そういえばカツヒサが見当たらないみたいだけど、どうした？」

「風邪です。」

「またかよ！偉そうな態度してる割に意外とアイツ体弱いな。」

「いや今回ばかりはアイツを責めないであげてください。」

「どういうことだ？」

「実はセンパイ達がいなかったこの一週間、『いつもと同じメニュー』をこなしてたんすよ。」

「いつも通りなら問題ないじゃねえか。」

「1年は男女合わせて7人ですよ？」

「それくらい知ってるっつうの！いいからそうなってる原因をサッサと言えよ！」

「2メンドリブルとか全員でローテーションしてくメニューあるじゃないっすか、アレも『いつも通り』なんすよ？」

「さっぱり話が見えないんだけど？」

「えっと、つまり、うっ」

まじかよ、マコト吐きそうみたいじゃねえか。いったい1年はそろいもそろってどうしたっつうんだよ？

「もしかしてさあ」

「うん、なにか分かったのかりヨウスケ？」

「いやまさかとは思っただけど、『いつも通り』ってことは2メンとか休みなしで延々と7人でやってたってことか？」

「はい……」

「マジかよ」

「そんな全員おかしくなるくらいだったら少しは加減しろよ！おま

えらバカか!？」

「誰がバカだつて?」

あれ、なんで男バスの部室で女の声がするんだ?

あつもしかして…

「練習させたのは私だよ。なんか文句あんのかい?」

「いえ、なにもありません黒谷先生サマ!」

「せっかく2年がない環境だったたまには1年にもノビノビとコート使わせてあげないとね」

ヤバイ、口元は吊り上つてて満面の笑顔なのに目だけが笑ってない。

「ほら、ウチって男女とも人数少ないからさ、体力だけはありすぎて困ることないじゃん? こういう時におもいつきり動いておかないとね」

「その通りです。さすが先生。」

「ありがとうございます でも1年生はこの一週間みっちり走らせたからさすがにバテテンのよね」だから今日くらいは休ませてあげようと思っただけど、どう思うリョウスケキャプテン?」

「とってもスバラシイ判断だと思います。」

「やっぱりそう思う? それじゃ2年生だけの部活にけつていいというわけで1年生は今すぐかえっていいよ」

「はい!」

1年生達の入部してから一番の「はい!」を聞いたぜ。

「さて、みんな分かっていると想っけど、」

「くっ」

「アンタラ私のこと忘れるくらい心も体もなまってるみたいだから今日は徹底的にしごいてあげ・る」

「う、うっす…」

次の日、2年生も1年生と似たような状態に陥ったのは言うまでもない。

仲良くみんなで眠り姫

はあ、今日は疲れたあゝ。修学旅行から帰ってきた日だっていうのに、いきなりハードな練習が始まったんだもん。しかも一週間のブルックがあるにもかかわらず、むしろ旅行前よりもハードなメニューになっていたのは気のせいだろうか。黒谷先生が練習中、ずっと満面の笑みでしごいている様子はなんだかゾツとするものがあつたな。なにかイイことでもあつたのだろうか？それとも逆にアレは機嫌が悪かつたのか。

まあそんなことどうでもいいや、今はただ眠ろう…

「おはよう、昨日はキツかったね」

「ほんとほんと、アタシ全然寝足りないんだけど。」

「あたしもあゝ。ふあゝ」

今日は一日、やたらとバスケット部の面々が授業中に居眠りを注意されるのが続いた。先生たちは「お前たちまだ旅行気分が抜けきつてないのか？」なんて言うけれど、それはほんとの理由を知らないからだ。

そしてついに爆発する先生が現れた。それは5時間目のこと。お昼ご飯を食べたあたし達は一層深い眠りについたのであつた…

バシッ！

「いったあ！」

「「いったあ」じゃない！なんじゃその態度は！！起きんかあ！」
まわりを見渡すと、バスケ部のみんなは同じく頭をはたかれた様子
だった。タイガなんか頭抑えた恰好のまま寝ちゃってるよあ。」

「おまえらバスケ部はそろいもそろってワシのことなめとんのか！
廊下へ立つとれ！！」

その日、生まれて初めて廊下に立たされるという経験をしたのだが、
あまり記憶がない。だって寝てたし。

「ふう、ようやく眠気が飛んできたかも。」

「アタシも。それよりなんかクラスメイトの視線が痛いんだけど…」

「あんだけ居眠り注意で授業の妨害されりゃあねえ。×10だから
そりゃイライラするよね、途中でもうあきらめちゃった先生もいた
くらいだし。ほら、もうさっさと『仲間』だけの部活に行っちゃお。」
「さんせーい」

「よし、今日も張り切って部活やりまっしょう！！」

「先生ゲンキですね。」

「なによ、そういうアンタ達はみんな沈んだ顔してどうしたの。バ
スケが楽しみじゃないの？」

「いやそりゃ楽しみなんですけど…」

「だったらそんな辛気臭い顔してないで、まずはコートラン行って
みよー」

まったく誰のせいでこんな顔になってると思ってるんだ。

次の日はさすがに一日爆睡ということはなかったが、この『バスケ

部眠りの乱』はしばらく続くのであった。

毎日の怒涛の練習に明け暮れていたら、夏休みは目前に迫っていた。

夏休み前に配られた練習の予定表には3日練習することに1日休みがある。

「なんだ意外に休み多いじゃん！」

「先生こんな練習の日程で大丈夫なんすか？」

「あんた達のん気だねえ。夏休みが終わった時にも同じセリフを言えたら褒めてやるよ。」

そう言った先生はまた楽しそうな、しかし段々彼女の性格を知り始めたオレ達にとっては悪魔の微笑みにしか見えないキレイな顔をして言った。

夏休み中は意図的なのか知らないが、女子とは練習時間がほとんどかぶっていなかった。そのため黒谷先生はずっと付きっきりである。

軽く全員でアップを済ませると、

「3on3をやってもらう！」

そう言つて黒谷先生はパツパとオレ達を3組ずつに分けた。

黒谷先生はチーム分けをすると練習時間だけを告げて、マコト、カツヒサ、アキラを連れてどこかへ行つていしまった。あの3人だけ秘密特訓でもするのだろうか？

そんなことは置いておいて、自分のことに集中しないと。

オレはアキヒトとミノルとの組になった。

相手はリヨウスケ、エイジ、カズキだ。コッチとは違って全員がス
コアラード。マークを外したところからあつという間に点を取られ
てしまった。

今度はこっちの番だ！と、景気よく行きたいところだが世の中そん
な甘くない。なんたって相手のリヨウスケはウチの攻守の要だ。デ
イフェンスも相当厳しくくるからアキヒトは苦勞している。オレが
近づいて早くもらわないと…

ダッ

えっアキヒトが強引に突っ込んでいった！？

その意外な行動に相手よりも先に対応したミノルがボールを受け取
り、シュート。

「ナイスアシスト、アキヒトっ」

「ありがとう！」

「おいおいアキヒト、いつの間になんなスタイルになったんだ！？」

「3人じゃオレも普段より積極的に攻めていかないかね。ストリー
トバスケの時の金髪くんがいい見本になったから。オレもそろそろ
一皮むけないかと思って参考に見てみたんだ。」

その後のデイフェンスでも、いつもは堅実的な守備をするアキヒト
が何度も飛び出しにかかって相手のリズムを崩したのか、ステー
ルに成功した。

「タイガ、今度はボーっとすんなよ？オレをちゃんと見てろ。」

なんだ？ミノルまで柄にもないこと言い出して。

アキヒトからボールを受け取って勢いよくドリブルしたはいいが、目の前にリヨウスケとエイジが立っている。

ダメだ、完全にシュートコースふさがれてる！

その時ミノルがエイジの横からスツと現れた。

あっ、これならイケルかも。

ミノルを壁にしてエイジの方から強引に切り込んでシュートした。よしっ、とりあえず初得点。

それにしてもミノルからは考えられないくらい完璧なタイミングと場所でスクリーン決めてきたな。あっ、あれは2m巨人がやってたプレーに似てるかも。ミノルもジャンプバカだけじゃなくなってきたみたいだ。

「すげえなお前ら、なんかいつの間にか別人みたいじゃん！」

「あのアメリカ人達に刺激を受けたのはお前さんだけじゃないってことよ。」

「タイガは自分のことで頭いっぱいでおれらのことなんて全然見えないもんね〜」

まったくだ。

この2人も決して悔しくないわけがなかったのだ。

そういえば修学旅行から帰ってきてからは鬼のようなキソ練習や体力系メニューばかりで、試合形式のことなんて何もしてなかったな。

ここにきてその成果が爆発中といった感じだ。

その後もひたすらそのメンバー固定で3on3が続いた。

今日の練習が終わった時、ようやく別メニューをしていた3人が帰ってきた。

なにをしていたのか知らないが、信じられないくらいの汗をかいている。いったい何があったっていうんだ？

きつと、キソ的な練習をひたすらやらされてたんだろ。やっぱり補欠組は大変だな。スタメンになれてつくづくよかった〜

次の日はマコト達を相手に、ひたすら3on3を繰り返して終わった。その間、今度はリヨウスケ達がどこかへ消えて、練習を終えるころにはやはり死にそうな顔をして戻ってきた。

しかし、彼らがやつれた原因は、オレも次の日にイヤというほど知ることになる。自ら身を持って体験することによって。

その内容については、聞かないでくれ：思い出そうとするたび、いつかのアキラみたいになりかねない。とりあえず昨日までの3on3がいかに天国の時間に感じられたかということだけは言うておこう。

ダイエットに付き合わされる姫

夏休み一発目は午後からの練習だ。すれ違いざまに男子に会ったけどタイガ達は疲れた様子もなくすっごく盛り上がってる。対照的に、1年生のうち3人が死にそうな顔してるんだけど何があっただろう？

ま、男子は男子、女子は女子。ってことで、今から練習だあ！

「女子は今日から5対4やるからね」

なんだそれ？初めて聞く数字なんですけど。

「先生、ウチら8人しかいませんよ？」

「もしかしてマサミくん練習に参加させるんですか？」

「ムリっすよ。オレバスケなんて見てるだけでおなかイッパイっすもん」

「だいじょうぶ、やるのは私だよ。」

えっ？

「いや、最近ちよつと二の腕のたるみとか気になってきてねえ。」

「あ、そうなんですか」

誰も表立ってノーとは言えない。「そんな軽い気持ちでバスケやらないでください！」なんて、絶対無理だ。

「チームは2年対1年とアタシで。」

しかも先生は人数少ない方！？

大丈夫なんだろう？途中でぶっ倒れたりしなきゃいいけど。

そんな心配も、最初の1プレーで見事に吹っ飛ぶのであった。

黒谷先生がどうやらガードの役目を果たすみたいだ。ボールをもった瞬間、1人で突っ込んでさっさとあたし達をかわしたかと思うと、一人でシュートを決めてしまっていた。

「なにそろいもそろって突っ立ってんの？言っとくけど4人の相手なんかには負けたらインターバルの間走っててもらうから。」

なんだその理不尽な罰ゲーム!?

いや、でも言っても相手は4人。そうそう負けるなんてことはないよね。

しかしあたしの考えは甘かった。とんでもなく甘かったのだ。

黒谷先生の突破力は並みではなかった。

さっきはレイたちも油断したんだろう、黒谷先生がまさかあそこまで動けるなんて誰も思わないもんね。

どうなってるんだ!？どうして2対1でマークしててあんなにあっさりと抜かされるんだ？

いっこうに止められずにいるこの状況に、レイもあせっていた。

「もうしょうがない!3枚付くよ!」

捨て身の作戦だがどうにかして先生の動きを封じないことには話にならない。それに、これならパスも簡単には出せないはず。

しかし先生の足は止まるどころかさらにドリブルのキレは増し、一瞬で一人を振り切るとその隙間からヒナにパス。当然誰にもマークされてないヒナは悠々とゴール。

なにこのチートの存在…

ディフェンスの時もその例外ではなかった。レイとアカネが2人ともいいように抑えられている。そのせいでシズクはディフェンスの時に他の人のことなんて気にしてない。終始ぴったりあたしに張り付いてて自由に動けない。

最初の1ゲーム目は負けてしまった。いやでもへこんでるヒマなんてない。3分あるからここでなんとか立て直さないと。

「なに座ってんの？あんたらは今はダッシュの時間って言ったですよ。」

まじだったんですか！？

その後、休みのたびに走らされ、そんな疲れた状態でやっても勝てるわけもなく、また走らされという無限ループに陥ったあたし達は、その日、とんでもない疲労感と敗北感を味わったのであった。

「ようオージ、おっはよ〜」

「終わった」

「おいおいナニ言ってるんだ、やっと今日から2学期の始まりじゃないか」

「燃え尽きたぜ…」

「たしかに今年の夏は例年にも増してあつつかつたよな〜」

「もう高校で思い残すことはない。」

「つてさつきからいつたいたいどうしたってんだよ!? 高校ライフはまだ半分だけ?」

「あ、なんだゲンキか。」

「ちよ、まて〜い! 久々の親友再会なのにその反応はひど過ぎないかい!? 2年に入ってから出番がなさ過ぎて読者の半分はオレの存在も忘れてる頃だっというのに。シクシクシク…」

「ん、どうした?なんで泣いてるんだ?」

「そりやおめえ、こんな多彩的な放置プレーくらつたらさすがのゲンキくんも落ち込まずにはいられないってもんよ!」

そう、いつの間にか夏なんて終わっていたのだ。ゲンキが最近見なかったことどころか、とつくに存在丸ごと忘れていたくらいだ。

「まあいいさ、オージ見るからに疲れてるもんな。その様子だとたつぷり部活でしごかれてたみたいだな。どうだ、夏休みは充実してた?」

「やめる、夏のことを思い出させるんじゃない!」

「わりい、いきなり怒鳴っちゃまって。やっぱ聞いてくれるか?」

「別にいいけどさ、それよりどうだったんだよ。」

「2日目までは楽しかったんだ。30n3でおもいつきりバスケットきたからな。」

「「までは」ってことは3日目の3対3でなんかあったのか？」

「あ〜〜！！その文字を口にするな！！それに3日目は30n3じゃないんだ。」

「?? わ、わかった、そこは触れちゃいけないんだな？で、4日目以降はどうなったんだ。」

「休みだ。」

「そりゃよかつたじゃないか。」

「そしてまた連続して3日間練習日があるんだが…。」

「楽しくみんな毎日30n3三昧だ〜！ってわけには、いかなんとか？」

「そうだ。」

「その間にはお前にとって思い出したくもない、オレにとっては謎のナニカがあったわけだな。」

「それを9セットだ。」

「…鬼だな。」

「ああ鬼だ。しかもその練習は、さ、さ、3人でこなすからメニューも『3』づくしなんだ。だから今オレ達は『3』という言葉に対して敏感なんだ。」

「ふ〜んそうなのか。」

そう言うと、ゲンキの目はイヤな光を帯びたまま、教室の隅で寝ているカズキのそばに近寄っていた。なんだかイヤな予感がする。あれは夏休みにさんざん目にしてきたものだ。そう、黒谷先生と同じ目をしていたのである。

「おっはよカズキ、今日『サン』デー発売日だけど買って来た？」

「ぐあ〜〜」

「どうしたんだ〜い？おまえ『サン』デー好きだったろ？」

「頼むから今はその話はしないでくれ！」

今ちょうどアキヒトが教室に入ってきた。やめろっ、これ以上無意味な血を流させないでくれ！

「お、雰囲気代わったね」。『散』髪してきた？」

「うわ〜」

そう言っアキヒトは回れ右して廊下を走り出してしまった。言っておくが、これは決してアキヒトが髪形を失敗したわけではない。

ちなみにオレも御多分に漏れず、一緒に仲良く(?)発狂している。

その後もゲンキは久々の自分の見せ場に、ここぞとばかり男バスマンバーに『あの言葉』を浴びせるのであった。そのためしばらくウチの教室では雄叫びが聞こえるという珍現象が続いた。

再戦に萌えに燃える姫

「ちゃんと覚悟はできてる？早くもリベンジのチャンスが舞い込んでくるなんてアンタ達運がいいね。とりあえずスタメンは2年でいくけど気持ちがるんでるようなヤツがたらすぐに変えるからね！」

「はい！」

そんなのありえない。だって今日の前にいるのは、この前の地区予選で大惨敗したお茶の時女子高校なのだから。

今は新人戦3回戦の直前ミーティングの最中である。ちなみに1、2回戦は、なんとというか思った以上にあっさり終わった。夏休みのあの地獄の日々に比べれば、あのレベルの試合なんて準備体操みたいなものだ。そう言い切れるのも、それくらい夏休みでの全員のレベルアップは大きかったのだと思う。

「あちらさんも3年生はいなかったから前回と同じ面子だ。スタメンは変わらずPGユイ、SGミオ、SFあずにゃん、PFムギ、Cりっちゃんだよ。ただしこの夏にシックスマンとして入ったウイツてのが意外といい動きするからあなどるんじゃないよ！」

「はい！」

「同じ相手に負けんじやないよ！あんたらのこの3か月での違いを見せつけてやりな！」

「はい！」

試合は序盤から速い展開が続いた。相手チームは機動力の高さと積極的なパス回しによるチームプレイでガンガン攻めてくる。

でもこれくらいじゃ焦ったりしない。落ち着こう、まず1番目の課題はしっかりマークにつくことだ。この前は相手チームのレベルの高さに圧倒されて一気に序盤でやられちゃったからな。

「アンタけっこうやるじゃん 夏は相当走りこんできたっしょ？」
「ま、まあ。」

「いいぜえ、燃えてきた ついてきなっ」
りっちゃんは今まで対戦してきたどのことも違うタイプだった。Cにしては小柄な体格にもかかわらず、当たりはけっこう強い。それになんたって、その運動量がスゴかった。黒谷先生のあのチートっぷりを経験していなかったら今回もなすすべなく負けていただろう。

「ユイ、くれっ」

「あゝい。いくよゝりっちゃん！」
相変わらずユイちゃんてかわいいよな。女のあたしまで変な気分になさせてしまう。しかしそんな見た目とは裏腹に、強烈なパスが飛んでくる。りっちゃんは3Pゾーンの外側でボールを受け取ると、一気にドリブルでゴール下まで迫ったきた。

「たく、こんなのCの動きじゃないっの。でもあたしだってそんな簡単にはやられない。一瞬抜かされそうになる所を必死にくらいついていく。それでもりっちゃんは強引にシュートを打ってきた。

すかさずあたしは手を出す。しかしボールには手が届かなかった。

ガッ

「あちゃ〜、やっぱムチャだったか。あんた反応イイね。」
「そりゃどうもありがと…ってウソッ!？」

いつの間にか目の前にいたはずのりっちゃんは消えていて、慌てて振り向くとそこにはさっきシュートしてあたしと会話までしたはずのりっちゃんが飛んでる!？

しっかりとリバウンドをとってそのまま得点を決めてしまっていた。

「う〜ん、プレーの途中で油断はいけないんだな〜」

「うっ」

「ヒメ、なに相手にアドバイスまでされちゃってんのよ!ちゃんとゴール下守ってなさいよ!」

「うめん!」

くそっ、まだまだ集中力が足りないみたいだ。スピードがゼンゼン違うから少しでも目を離せばあつという間に置いて行かれてしまう!

うちのチームもすかさず攻めたてる。レイとサアヤで一気にコートを駆け上がる。そしてアカネが3Pを放ったが、惜しくもリングに嫌われる。

よしっ、今度こそっ!

今回はなんとかリバウンドが取れたものの、りっちゃんの動きが激しすぎてとてもじゃないがシュートになんていけない。どうしようっ、時間がっ!

「ヒメっ！」

声が出た方を確認し、近づいてくる影にほとんど手渡しでパスをする。

パシュツ

「ナイスレイっ！」

「あたぼっよ！」

そうだ、あたしにはまだりっちゃんから1対1で点を取る実力はなくとも、それが負ける理由にはならない。だってあたしには頼りになる仲間がいるんだから。

「よし、ここ抑えてもう一本決めるよ！」

「はい！」

ただ見入る王子

今日の試合は女子にとって大一番ということで、男バス全員で応援しに来ている。この前の大会では女子は最後まで応援してくれたので、そのお返しだ。

さて、試合の状況はというと、

ヒメのやつ今のはアシストだったな。あれで翔泉高校の方に流れがきたみたいだ。

よしっ、ステイールから逆転シュートも決まった。

しかし、次の攻撃から相手PGのユイが爆発する。

「あずにゃん！」

シュツ

「もーユイセンパイのパス強すぎですよ！」

「いいじゃん入ったんだし」

今度は自分からペネトレイトしてジャンプシュートを決めた。

「ミオ、ナイス〜！」

「なにを言ってるの？決めたのはユイじゃないか。」

「相手の子をしっかりと抑えてあたしがドリブルする道を作ってく

れたんだよね、ありがとっ」

「バ、バカっ。チームなんだから協力するのは当たり前でしょ!? それに、あたしにボールくれれば3点とってたけどなっ!」

「またまた強がって。ミオ殿は今日なにげに得点0ですよ!」

「うるさいリツ!」

みんなで和気あいあいと楽しげにふざけ合ってるのに、バスケのキレは増すばかりだ。

「なんか急に一方的な展開になってきたな。」

「たしかに。ああいうムードメーカーがいると強いよな。とにかくあのPGを止めないと。」

「あっ、でもそのユイちゃんが倒れちゃったぞ?」

「ガス欠か? まああんだけ一人で暴れまわればな。これで少しは楽になるかも。」

しかしお茶時女子高はそんなに甘くはなかった。

代わりに入ったウイという子もなかなかのプレーヤーだったからだ。

ウイちゃんはユイちゃんとは違って的確な攻めをしてくる。

「あなたには負けませんわ!」

珍しく声を荒げているミスズちゃんと、その相手のムギちゃんとはプレースタイルもそっくりで、実力は互角と言ったところだ。両PFからは並々ならぬ気品あふれるオーラが溢れ出ていて、もうオーラ対決まで始まっているように見えるような気がするはオレだけだろうか?

しかしそんな均衡も、ウイちゃんの手にかかれば簡単に崩されてし

まっ。一瞬ミスズちゃんが右足方向に力を入れたのを見逃さず、すかさず逆方向に対してムギちゃんにパスを送る。ほんの半歩分だけ出遅れてしまったミスズちゃんをかわし、ゴール。

その後も微妙なディフェンスのもつれみたいなものを突かれ、徐々に点差を離されていった。

「レイちゃん相当きつそうだな。」

「さっきまであんな暴れ牛相手にしてたからな。彼女だっけって倒れてもおかしくないよ。」

「うちの女子にもPGがもう1人でもいれば少しは休めるんだけどね…」

もうフラフラなのに、少しも気持ちは負けてないみたいだ。体は小っちゃいけど強い子だな。なんとか勝たせてあげたい。

「翔泉ファイト　！！！！」

今のオレ達にはこれくらいしかできない。せめて目いっぱい声を出さないと。

しかし次の瞬間、思いもよらないことが起こる。

さっきまで疲れていても気丈にふるまっていたレイちゃんが倒れこんでいる。

「どうしたんだ！？」

「なんか右手を伸ばしてパスカットをしたあとうずくまってしまったみたいけど、大丈夫かな…」

「突き指くらいならレイちゃんなら試合続けそうだな。」

「たしかにな。たいしたことないといんだけど。」

しかし、しばらく待ってもいっこうに立ち上がらない。黒谷先生がかけつけて、そのまま負ぶわれて体育館を出て行ってしまった。

動揺を隠せなかった姫

「まずは一本だよ！」

あたしは今ベンチにいる。レイが急に倒れて運ばれていつてから、まともにプレーができていなかったからだ。レイも黒谷先生もいない状況で、マネージャーのマサミくんが急きよメンバーの入れ替えを仕切ることになった。彼は尋常じゃない汗をかきながらも冷静で、気持ちの入っていないあたしを見て交代を告げた。

「ヒメさんおつかれっす。とりあえず今はしっかり休んでくださいよ？」

「ありがとう」

いつもはおちゃらけていて苦手なはずのマサミくんの言葉も、今はありがたく思えた。

そうだ、代わりに入ったヒナやシズクはがんばってくれている。今はベンチにいるあたしは、声を出して盛り上げていかなきゃ。まだ試合は終わっていないんだから。そう頭では分かっているんだけど、レイのいないコートを見ていてもバスケをしているという感覚がわかなかつた。

アカネをPGにしてサアヤがそれをフォローするような形でなんとか攻めてはいるものの、慣れないポジションでは連携はなかなかうまくはいかなかつた。

司令塔を急に失ったショックからは簡単には立ち直れず、その後もズルズルと点差は離されていった。

「みんな精神的な疲れが大きいみたいですね。全然集中できてない。」
隣でアイカが精いっぱい応援しているものの、あたしにはその熱は戻っていなかった。

「アイカちゃん、出番だからね。しっかりみんなを支えてあげてくれ。ヒメさんももういっぺんお願いします！」

「う、うん。」

正直いって全然休めた気がしなかったし、完全に立ち直っていると言い難かった。でもいつまでも落ち込んでいられない、他のメンバーはそれでもなんとかプレーを続けているんだ。勝手に自分だけ終わったような顔してちゃダメだ！ツライのはみんな一緒なんだから。

「アカネ、へばってない？あたしががんばるからどんどんボール回してね。」

「ば、ばか言ってるんじゃないわよ、まだ全然余裕だつづの！あんなこそ戻ってきたはいいけどへマしたら承知しないだからね！」
「そんだけ強がり言えればまだまだイケるわね。サアヤも動きつばなしで大変だと思うけどよろしくね。」

「アタシが抜けたら試合にならないじゃん。」

まったく頼りになる子たちだな。

あたしは残り時間の間ずっと、とにかくガムシヤラに走り回った。

声を出してアピールして、何度もパスを要求した。今はプレー以外のことを考えなくて済むように。

ピ

試合の終了を告げる笛が鳴ったけれど、あたしには自分とは関係ない世界の音みたいに聞こえた。

アクセル全開王子

「女子に起こったハプニングは男子にはないとは言い切れない。みんなストレッチは十分にしておいてプレー中もケガには気を付けること！」
「うっす！」

イヤなムードの中、オレ達男子の新人大会は始まった。

「いいか、仮にオレが抜けようとアキヒトがぶったおれようと絶対に最後まであきらめずに勝ちにいこうぞっ！」

「おう！」

浮足立っていた部の雰囲気を一倍感じているリヨウスケの、キヤプテンらしい一言だった。そのおかげでベスト4を決める試合でいつも通りのプレーができたオレ達は、今回も無事に決勝トーナメントを迎えることになった。

「最初の相手は彩色学芸高校よ。ここ最近の大会ではうちはずっと県の4位だけど、ここは間違いなく堂々の3位ね。要するに、まずここに勝てないようじゃこの先の相手はお話にならないからね！」

「スタメンは2年で行くわ。最初に吞まれたら負けよ。うちの1年はフォワード陣にいいのが2人そろってるから、タイガは後半のことなんか考えずに初っ端から全力で行きなさい！」

「うっす！」

その先生の期待通り、オレは最初の攻撃から動きまくっていつでもチャンスを狙っていた。

アキヒトからリヨウスケへボールをつないだ後、一度ボールの動きが止まる。しかしすぐにボールは逆サイドに放られた。それをキヤツチしたオレはそのままの勢いでゴールまで向かう。

「ナイツシユウ！調子いいじゃんタイガ。」

「まあね。どんどんボール集めてくれよ、全部決めてやつから。」

その後すぐにミノルがファールをして一旦プレーが止まった時、ふいに声をかけられた。

「チビの割にやるじゃん。あんたフォワードだったんだ？」

そう話しかけてきたのは相手SFの白須だ。たしか1年のころからレギュラーで、毎試合と言っていいほどチームの得点王になっている。たしかこの前の夏の予選じゃ、コイツ一人に40点とられたんだよな。

「ああそうだよ、王地タイガって言うんだ、以後お見知りおきを。」

「覚えておいてやるよ、オレより点を取れたらな。」

自己紹介してからオレをライバルと認めたのか、本気を出すようになった白須からは一発目のように簡単には点を取らせてもらえなくなつた。

だからと言ってそこで終わりなわけじゃない。アキヒトは白須のクセを相当研究してきたのか、一瞬マークが外れた瞬間を見逃さず、オレに完璧なタイミングでパスをくれた。ここで応えなきゃ翔泉のレギュラーはもらえてないつつうの！そりゃっ！

パシユツ

「今ので4・0だぜ?」
「くっ」

その後も今日のオレはよくシュートが入り、第1クォーターは25
- 16でスタートダッシュに成功する。

逆にお見舞いされる姫

トントン

「どろどろ」

「レイ、元気？」

「元気よ、元気！なによそんな心配そんな声出して。だってただの骨折だよ？これくらいでいつまで入院させとくんだったっつうの。」

「そう、それなら良かったわ。これ、ベタだけどフルーツ買ってきたの。みんなでカンパしたんだけど、病院に大勢押しかけちゃ悪いと思ってあたしが代表で来たの。」

「そんな気い使わなくてもみんな来てくれていいのに。差し入れありがと！もうずっと病院食でウンザリしてたのよね。カプツぶはふふあのほうはほう？ふいふはふあんほふえんふゆうひへふ？（部活の方はどう？みんなちゃんと練習してる？）」

「うん。アカネが張り切っちゃって、「あたしが部長代理だ、臨時キャプテンだ」って言って部活の間中仕切りまくってるよ。」

「そう言えば副部長とか副キャプテンとか決めてなかったね。まあアカネが適任だと思うよ、うん。」
「レイもそう思う？よかった。」

そう言ったとき、あたしは次の会話がなかなか思いつかなかった。あゝダメだ。せっかく来たんだからあたしがちゃんと励まさないといけないのに！

レイは特に気にしてないのか、おいしそうにリンゴをむしゃむしゃ食べている。

「今年いっぱいには間に合わないって。」

「え？」

「アタシの手の完治。」

「そ、そっか大変だね……」

「やだナニ深刻な顔して。言っとくけど来週には退院して学校には行くし、部活にも顔出すからね？」

「そうなんだ、でもムリはしないだね。」

「ムリなんかしてないよ。むしろ早く体動かしたくてしょうがないしっ！」

そう言うとレイはギブスを巻いている右腕をぶんぶんと振り回した。

「あ、あぶないよ？」

「ちよつとお、人がケガした体張ってるっていうのにナニその腑抜けた返しは！？それにさつきアタシがリンゴくわえながらしゃべってた時もフツーに話進めるしさ。ヒメこそ調子悪いんじゃない？いつもはうるさいくらいシッコミまくりなのに。」

「ごめん。」

「どうした？なんか悩みがあるならレイおねえさんが聞いてやるぞ？」

「…ダメなの。」

「なにが？」

「レイがいなきゃダメなの！学校行って他の子たちと話してもなんか楽しくないっていうか。それに、部活はみんな練習がんばってるんだけど、あたしだけバスケしてるっていう感じじゃなくて。寂しいよ、レイ……」

「キモチワル。」

「…へ？」

お見舞いに来たのに、けっきょくあたしがレイに励まされちゃった
な。明日からまたがんばろう。

色めき王子

「エイジ、点やるんじゃないぞ！」

「はい、タイガ先輩！」

「バカ、いちいちこつち振り返って返事しないでいいんだつづの！」

第2クォーターからはエイジに交代してオレはかつての指定席、ベンチに座っている。しかもここに定住することはない。

「タイガ、後半いくから白須の動きよく見とくんだよ！」

「はい！」

というわけだ。

試合の方かというと、徐々に彩色学芸の『色』が現れ始めていた。

司令塔である黄金井が光のような高速ドリブルで切り込む。ディフェンスが全体的にかき乱されている間に、そこでずっと待っていたかのようにボールを受け取った青山が落ち着いてシュート。この2人のガードによる、絶妙な『動』と『静』とのコンビネーション、通称『グリーンライン』に何度もやられている。

ゴール下でも攻撃の手は休まらない。ジャンプ力で勝るミノルがリバウンドできつちり抑えた、に思えたがそのボールを強引に奪った赤丸は、ロングパスで白須につなげる。

「今のつてファールじゃないんすか？」

「うーん、あれはお見事というしかないねえ」

審判も先生と同じ意見なのか、笛は鳴らずにそのまま速攻で決められてしまった。

白須はとにかくドリブルで走らせるチャンスを与えようものなら手におえない。エイジはぴったりと張り付いてディフェンスしているが、構わずエンドラインまで走りこんでボード裏からシュートしたへっ、そんなんじゃ入るわけないだろ。案の定、ボールはボードに当たって跳ね返る。

ガシヤッ

一呼吸遅れて、観客の息を飲み込む音が聞こえてくる。

筋骨隆々、しかも1人だけ日焼けしていて、黒人かと思まがう黒川がこぼれ球をダンクで押し込んだ。

「先生、今こっち押されぎみじゃないっすか？オレ、そろそろ行きます！」

「まあ待ちなつて。ものにはタイミングつてもんがあんのよ。それに少しは自分の仲間を信頼しなさいな。」

そうは言っただつてよお。

リョウスケが放った3Pは、リングに嫌われ大きく弾んでしまう。ほらあ、なんか今ウチに流れがきてなんだよなあ。これじゃいつきに追いつかれちゃ…

ガシヤッ

さきほどの黒川のお株を奪つように、豪快な音が再びコートで鳴り響く。

カズキがさっきのボールをそのままダンクで決めてしまったのだ。

「やるじゃんカズキ！さすがセンターフォワード！」

「サンキュ！」

「まったくゲンキなやつだね。ほらタイガ、出番だよ引き離しておいで」

「うっす！」

ドキドキ代役発表の姫

「しばらくレイが戻ってこない間この部には、バスケにおいてもつとも大事な司令塔がないわけだ。こんなんじゃしばらくは練習試合も組めないからね、誰かにPGをやってもらおうと思う。」

誰だ、誰がやるんだ？

今ウチの部にとって、大事な話し合いの真つ最中である。そう、部員数の少ないあたし達にとって一人欠けるというのは大変な問題なのだ。それによりによって他に誰もポジションをやっていないレイがケガしたのだから、あたしだけへこんでればいい問題だけでなく部全体の一大事なのであった。

「とは言ったものの、誰にしようかはかなり迷った。」

みんなが息をのんで黒谷先生の次の言葉を待とうとしている時、アカネが急にアピールしだした。

「いや〜やっぱりアタシしかいないんですかね〜。ほら、レイキャプテン直々の任命受けた副キャプテンだし。ホントはシューターなんだけどお、まあそこそこ器用だしボール回しなんかもできなくもないよね。」

なんか言い方がちょいちょい腹立たしいが、正直アカネ以外にない気がするというのも事実だ。

「調子に乗ってるとこ悪いがオマエじゃない。」

「ふえ〜〜!?!?」

アカネは自分だと全然疑ってなかったらしく、素っ頓狂な声をあげた。

「もちろん、副キャプテンとして精神的にみんなを引っ張ってほしいというのはあるんだが、ゲームの中ではやっぱりシュートに主を置いてほしいからね。あんたがコンバートして今度はSGが空くのも困りものだし。」

「じゃあミスズさんっすか？」

せつかなシズクが先生の話の話を早く進めようとする。でも実際そう言われると、しっかり者のミスズということになるというのもうなずける。

「わたくしですか??」

「いや、ミスズがいないとゴール下がぐちゃぐちゃになるからな。それも一度は考えたんだが却下だ。」

「…アタシがやってもいいけど。」

なにい〜!? サアヤ、あんたもひそかに狙ってたのか!? でもたしかにこの子のバスケセンスなら慣れればできちゃいそうかも!

「いやサアヤにはやっぱり今のまま自由に動いてもらうのがいいと思う。SFがアンタの天職だよ。」
ぶくっ

え、サアヤすねてる!? 実はそんなにPGに憧れてたのか。ホメられてるのにめちゃくちや不服顔だ!

「それじゃあ、まさかヒメさんということですか!??」

「えええ〜!??」

アイカさん、そりゃムチャってもんですよ！そりゃみんな声をそろえて驚くって！アタシあんな頭使うポジション無理です！だいたい身長の高さ活かせないんだったらあたしなんてただのウドの大木だしっ！

「ええ〜ムリっすよ、それならあたいがやった方がましです！」

「アタシそれならバスケ部やめます！」

「ヒメに、負けた…」

みなさん好き勝手言いすぎ！でも否定もできないんだよね〜

あれっ、なにこの沈黙。もしかしてもしかしてホントにあたしがP
G!!!???

次回より、『センター姫とスモール王子』改め、『ポイント姫とスモール王子』が始まります。どうぞ期待ください。

「フッフッフッフ、アツハツハツハハ!!!」

「せ、先生、どうしたんですか??」

「フヒヒヒ、いやぁヒメの時だけみんなの驚き度が違い過ぎてツボに入っちゃってさぁ、かわいそうだからこらえてただけど、ガマンできなかった、ムリッ!!!ハハハハハ！」

ひびく、ひびくね...

「先生笑いすぎです！けつきよく、誰にPG任せるんですか？」

「ヒィヒィ。あ、そうだった。今日からヒナにPGやってもらおうと思う！」

「え〜！？」

ようやくの正式発表なのに、なんだかあたしの後だからいまいちインパクトがない。いや、これは決してあたしは悪くない、悪くないんだー！！

「あの、なんでアタシなんですか？」

「だってチビだから」

ええ〜そんな単純な理由で！？

「ちょっと先生、言っときますけどこれでも一応ちゃんとSFやって来たつもりですけど！？」

「これは消去法よ。他に適任者がいなかったというのが本音。」

「え、でもアタシ、レイさんみたいにできないです…」

「そんなのあたしだって重々承知だつづの。あんたはレイのようなプレーヤーにはなれって言ってるんじゃないの。ヒナにしかできないプレーをしろなさい」

「はい、やってみます！」

「それとついでにだけどシズクもSFの練習してもらおうから。」

「え、なんでつすか??」

「前から言ってるけどアンタ大味すぎんよ、最後の守護神であるセンター任すのは不安なのよね〜。逆にSFだとそのムチャクチャさが活きると思って。これは一応来年の夏以降のことも考えてるから。ほら、今の2年が抜けた時あんた達3人しかいないじゃん？今

度の1年にどんな子らが入ってきてても、ある程度対応できるように
しとかないとね。」

「なるほど、頭いいっすね先生。」

「えっへん!」

「これにて会議終了 言っとくけど、ポジション変わんなかった
子も今までより負担はでかくなるんだから一層練習に勤しむように

」!

「はい!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7987u/>

センター姫とスモール王子

2011年12月29日01時53分発行